の意氣や、露伴の作を通じて存する人物の特性の一にして、『一刹那』の風連より『五重塔』の源太に至るまで　皆同一轍に出づ。一世武士の遊惰を憤りて、村政の一刀、朱鞘に黒漆もて、何時にても死に申候と記せし『奇男兒』の喜劍は、やがて針程も心に面白き事あらば命さへ與れてやる男、人を救うて恩に着せるは大の嫌なる『風流佛』の珠運なり。世に捨てられて世を捨てて、神を罵り佛を憤り、今世に若し正體在さば針の先で衝てやりたきまで心逼りたる『對髑髏』のお妙は、やがて釋迦を大詩人と稱へて世の短見者流を罵殺せる『毒朱唇』の女なり。三十二相具足の美人を需めて得ずんば天帝に決鬪を申込まんといきまく『眞美人』の主人公は、やがて無上の美詩を需めて世にすね我儘を盡せる『血紅星』の皆非居士なり。露伴の作中かくの如き意氣あり張あり、俠氣と奇氣とを併せ有する人物を見ざること稀なり。然れどもかゝる類型的性格は、ようせずば一種の性癖若くは傾向に陷り、一歩を誤れば單調なる任俠一式の人物とならんとす。當代の批評家『奇男兒』に讃歎する者ありきと雖、今日より之を見るに、斯かる性格は決して露伴の價値を高うする所以に非ず。作者の中心思想を形作る人物に至りては、全然別種の性格に求めざるべからず。

別種の性格とは何ぞや。藝術に對する非常の熱愛を有する者卽ち是なり。露伴が作に特有なる氣象は、卽ち此の一技一藝に達せし人若ゝは之に憧るる人が、無限の執着と洪大なる同情とを以て其の技藝に對し、意力と情緒と二つながら高調に達して一身を之に抛つ所に存す。試みに見よ。『眞美人』は一場の落語に過ぎずと雖、其の主人公は眞美に對する愛慕者なり。『風流佛』の珠運は自家の藝術たる彫刻に對する執著の念止み難き者なり。『毒朱唇』の女主人公は大詩人に對する深甚の同情を體現せる者なり。『一口劍』の主人公は鍛刀に對する狂熱的愛着を懷く者なり。『五重塔』の十兵衛は木匠の術に對し獻身の執着動かすべからざる者なり。『血紅星』の皆非は唯專念に詩を思ふ一個の畸人なり。『辻淨瑠璃』は元祿模倣の頂點ながら、尙脫俗の釜師淨珠老を點出するを見る。思ふに此等は總べて是れ一個奇矯の性格、現實の社會に於ける普遍的の者に非ずして、其の一角に存する特殊の

氣質なり。而も其の描寫たるや、此等性格の忠實なる寫實的筆路に出でずして、悉く理想の熱火を以て陶冶醇化し、多少超世間的の色彩を有する者として描出する理想的筆致を取れり。此の性格や實に露伴の小說の中心思想を形作る重要なる者にして、彼の前條に述べし意氣俠氣の如きは畢竟一の屬性たるに過ぎず、然れども作者の想髓は、斯かる性格が現はす藝術家の自信と、自家の藝術に對する無限の愛着とのみにして止まざるなり。

作者が其の高調の詩筆を驅つて寫し出でし所は、進んで是等藝術家の精神的製作が永遠の生命を有する事と、其の作物の自然界乃至人間界に對して至大の權威を有する事との熱烈なる信仰に及べり。實にや吾生は須臾なり。蜉蝣に等しき人間が、斯の轉瞬の生涯に經營する所の者、孰れか亦須臾ならざるべき。人の力に出づる者一として不壞不滅なる者なきなり。一代の功業久しからずして跡方もなきは、恰も結びては消ゆる泡沫にも似たり。唯彼の藝術家の手に成り出づる精神的作物のみは、所有破壞の力に抗して永劫の世に活く。之を作り出でし人間其の者も之を破滅する力無く、人力を超越したる大自然の力も之を破滅する能はず。露伴の小說が描ける究竟事象は卽ち斯の信仰に外ならず。他の作家に在りては往々究竟事象として作中重きをなす戀愛の描寫の如きは、露伴に在りては決して其の要部に非ず。『風流佛』に見えたる熾烈なる戀愛は、其の描寫の妙、直ちに人の肺腑を衝く者ありと雖、畢竟永劫普遍の一靈作風流佛の一軀を得んが爲の所緣に過ぎずして、戀愛其の物の轉瞬の性質に對照して、益藝術品の永劫的性質を明瞭ならしむるを得るなり。

斯くの如きは卽ち露伴の小說に現はれたる思想なり。『風流佛』『一口劍』『五重塔』は、皆此の思想を體現せる者にして、特に『五重塔』の十兵衞は上述性格の好箇の標本たるべく、彼の篇中の絕唱と稱せらるゝ暴風雨の一段には、作者が人天の關係に於ける信仰の明かに現はるゝを看取すべし。人は到底天に勝たず。而も往々天を贖す者あり。飛天夜叉王一度怒つて是等贖天の人間を膺懲す。當る者破壞せざる無く、人の經營せる者一として全きなし。唯高尙なる心靈より出でたる卓越の藝術のみ、獨り昂然として

之に動せず、天の威力も之に加ふる能はず、直立十六丈の生雲塔は長へに動かざりき。斯くの如きは固と是れ抒情詩の畛域に入るべき者、現實界の事象を醇化して高く理想の仙界に至る。等しく新小說の流を汲むと雖、硯友社一流の寫實小說とは相距ること頗る遠し。

是に於てか、吾人は彼の硯友社一派の代表者たる紅葉と比較するの甚だ興味あるを思ふ。夫れ紅葉は都市生活の寫實小說家なり。其の觀察の及ぶ所頗る狹隘にして、人物や舞臺や、常に作者主觀の限界を出でず。到底彼の人生の種々相を包括し、千狀萬態の社會人物を驅使する客觀的寫實の大筆力を望むべからずと雖、描寫の方法は頗る客觀的に近し。故に其の假作の人物は、假令作者の性格に似、其の主觀に入り易き範圍に限らると雖、悉く現實の社會に見らるべき性格にして、決して作者の意志を以て創り出でたる者に非ず。露伴に至りては全然趣を異にし、其の想を構ふるや常に一個の觀念の上に立ち、其の人物を描くや常に一個の理想の上に寄す。故に其の弊流れて脚色の單調となり、人物の一律となり、作者其の人の面影至る所に光芒を閃出す。蓋し作者、學博く識高く、篤く藝術を愛し深く佛典に參す。されば人情を寫すや闡明詳に過ぎ剖析細に入り、作中の人物悉く酸いも甘いも嚙み別けたる悟道の人たらんとす。人情の僞多きを知りては一旦の恨に神を憤り佛を憤りし者も、翻然悟り來つて「浮世を見れば皆面白き人樣々、慘かりし昔時の胸の氷碎けて、東風吹く空に糸遊のあるかなきかの身も面白く、佛も可愛く凡夫も可愛く、天地に一つも憎き者なく」なりしは、獨り『對髑髏』のお妙のみに非ず、多くは諦め過ぎ悟り過ぎ、一度仙に入りて復俗に返りし聖者の如く、動もすれば世と相關するなき超絶界に入らんとす。是を以て當代の時尙に投せんには餘りに豫言的にして、又餘りに詩的なりき。知識ある讀者鑑賞家を代表すべき當代批評家すら、尙唯筆力の妙をのみ稱へ、幽玄にして凡人の窺知すべきに非ずなど、無意義の讃辭を呈するに止まる。況や一般の讀者に於てをや。批評家は紅露二家を併稱すと雖、之を時尙に係けて當代の中心作家を求むれば、露伴は終に紅葉の敵に非ざるなり。思ふに維新來文明史上の大事實たりし新舊思想

の衝突は、社會の外面的生活卽ち政治經濟界に於て旣に調和を遂げ、其の內面的生活卽ち思想界文藝界に於ても亦漸く相融和せんとす。是を以て從來小說家の描寫の對象たりし新舊衝突の諷刺も、『浮雲』以來鋒鋩漸く鈍り、當時正に形成せられつゝありし明治の新生活の忠實なる描寫之に代るに至れり。紅葉及び硯友社派は恰も此の氣運を代表せるに似たり。斯くて人心漸く調和を感じ、餘裕を生じ、從て文學上の好尙粗笨を離れて精緻に趣き、諷刺のこちたきを避けて寫實の瀟洒なるを喜ぶに至りぬ。然れども其の調和や、未だ思を形而上に馳する程の安靜に到らず。其の餘裕や未だ藝術の權威を認むる程の深厚に達せず。露伴が藝術の愛慕、其の權威の信仰等の思想が、到底當時の民衆に解せられざりし所以、亦恐らくは茲に存す。

蓋し露伴の作は信念の上に立ち、道念の上に立ちて、文藝に對する熱愛を謳ひたる抒情詩なり。之を小說と言ふべくんば一個の理想小說なるべし。而も描く所は徹頭徹尾超絕的なるに非ずして、現實的事象と神祕的理想的事象との渾然融和せる者とす。斯くの如きは小說內容の一進轉步にして、文藝鑒賞の資格ある國民が異日必ず一度味ふべき詩想に屬し、國民思想の調和一層進み、餘裕豐かなるに及べば、必ず這般深甚の意義を有する作物を要求すべきなり。畢竟是等は後來將に起らんとする小說界の一新時期に到る先驅にして、一般時尙に先つて此の詩的思想を鼓吹せし豫言的述作なり。げに此の豫言的特色こそ、露伴の作をして、時尙の如何に係らず、文壇に重きをなさしむる者なりけれ。

紅葉には硯友社一派の諸衞星ありき。露伴は恰も彗星の限なき大空を迪るが如く、孤影茫然として特異の軌道を廻り、決して露伴一派なる者を有せざりき。されば露伴に關する叙述は茲に之を終り、筆を轉じて紅露二家の圈外に立てる二三の小說家に言ひ及ばん。

其の他の作家

『書生氣質』に新小說の端緒を開きし春の屋おぼろは、此の期に於て亦二三の作を出せり。二十二年『國民の友』春期附錄に載せたる「細君」の如きは、寫實的に完璧に近き點に於ては、短篇なりと雖、遙に前者の上に在

りと言ふべし。

當時の小説界に於て、竹の舍主人饗庭篁村は、亦看過すべからざる一方の將たり。篁村は江戸の人、夙に『讀賣』に入り、後『東京朝日』に入り、小説隨筆及び劇評に筆を執る。其の小説の作、多くは短篇にして、八文字屋の戯作に近し。其の『讀賣』『新小説』等に載せたりし者、二十二年『むら竹』と題する叢書として出版し、同年尙『新著百種』に「掘出し物」を出し、『國民の友』に「良夜」を出し、單行本として『當世商人氣質』を公にし、翌年『新作十二番』に「勝閧」をものし、其の他雜誌叢書に載する者少からず。當年の批評家、筆路の輕妙を賞し、描寫の洒脫を讃し、觀察の奇警を美し、紅葉美妙以外、明治文壇に一旗幟を樹つる者と稱へ、遂には篁村宗の目を生ずるに至れり。蓋し、篁村は世人が馬琴春水の外小説家あるを知らず、鯉丈魯文の外戯作者あるを知らざりし明治十年代の文壇に現はれ、八文字屋本を涉獵して深く元祿の昔を味ひたる才筆を以て『讀賣』を江湖に重からしめ、新泉居士太阿居士の名をして斯壇の異彩たらしめし者なり。當時未だ元祿文學の何たるを解せざりし世人は、漫然此の異裝の文章を歡迎したりしが、幾くもなくして文壇元祿を呼ぶ聲漸く起り、美妙紅葉露伴の徒、復興の氣運を鼓吹するに方り、曩に其の眞趣を闡明せられざりし篁村の文章、茲に其の由る所を明にせられて益其の聲價を增し、遂に盛名を一時に馳するに至れり。然り、篁村の價値は是のみ。八文字屋一流の諷刺文を模倣せりといふに止まる。之を稱揚すべくんば模倣の筆の巧妙を稱せんのみ。明治の文壇を飾る作物たるに至つては與り知らざるなり。此の點に於ては『當世商人氣質』は蓋し其の傑作たるべし。總べて商人は地道に稼がん者成功すべしといふ平凡なる思想を八文字屋ぶりに述べたる所、模倣の上乘なり。故に篁村は飽くまで八文字屋ぶりを以て立つべき者にして、決して明治風を試むべきに非ず。若し世潮に連れて寫實小説の筆を執らんとする時は失敗踵を旋さず。彼の『掘出物』の如き、或は篁村の傑作と稱し、或は紅葉の『色懺悔』に勝ると褒する者ありと雖、其の趣向の平凡なる、其の人物の舊型を出でざる、到底新時代の描寫たるに堪へず。

加ふるに文章亦平素の輕妙を缺きて著しく稚氣を帶び、總體の調子其碩風の清楚を棄てて馬琴風の繁縟に陷る。畢竟篁村は舊思想の人、過去を知れる頭腦を以て舊思想の支配せる社會を觀察すべき戯作者にして、現在及び未來を知る眼光を以て新思想の支配せる社會を觀察すべき小說家に非ず。其の諷刺の筆を向くる所は、『浮雲』の如く新舊分子の衝突又は明治の新人物に在らずして、明治の御代に殘存する舊時代の遺物遺習に在り。而して此の特色を最も明瞭に發揮せる者を『むら竹』に收めたる百餘の短篇となす。要するに篁村は、舊文學の殿將、元祿時代諷刺家の面影を今日に示したる者に過ぎず。之を文壇の一異彩とするは可なり。然れども之を激賞して舊文學の筆致よく新時代を寫せりと言ひ、或は美妙紅葉に多く讓らざる小說家なりとなすが如きは、蓋し其の眞を失ふといふべし。

舊文學の系統を引ける作家の中、正直正太夫卽ち齋藤綠雨は著しき特色を有する者なり。正太夫、文才早熟、十三四歲の頃旣に戯文を草し、俳諧を作りて新聞に投書せしが、當時盛名ありし魯文の滑稽と諷刺とを歎美し、其の門に入りて後日諷刺家たるべき素地を養へり。十七年『都新聞』の前身たる『今日新聞』起るや、魯文に從うて入社し、いたく社主小西義敬の愛する所となりき。此の時より綠雨は豪華を喜び、瀟洒を尙ぶ都人士となり、江東みどりの號を以て單純なる人情話を綴り、四六駢儷、詩歌發句を絢ひ交せ、濃艶華麗、七五の馬琴調を恣にせり。後二十三四年の比に至り、正直正太夫の名を以て諷刺家として現はれ『讀賣』などを舞臺として特色ある批評諷刺の奇才を遺憾なく發揮し、同時に小說作家として現はれ『かくれんぼ』『門三味線』『油地獄』の傑作を出し、盛名一時に世に布けり。前者は二十四年頃『文學世界』の第六卷として出で、一小篇に過ぎずと雖、簡淨流麗、精練の致を極め、綠雨作中の代表的逸品なり。中者亦苦心の作にして、最成熟せる感想と筆力とを見るべく、後者は同じく二十四年の作にして、比較的苦心を經ずして成り、而も世評最嘖々たりし者なり。總じて之を見るに、これらの內容は必しも大なる價値ある者に非ず、描寫の對象は下層社會に限られ、取材範圍は江戸の町家東京の狹斜に限られ、人物

は若且那雛妓等に限られ、總べて狹隘にして一種の特色ある部分にのみ其の鋭利なる觀察眼を向けたり。是を以て概ね同工異曲、舊文學の習氣を脱せず。其の精髄は上述何れか一篇に盡きたりといふべし。唯形體卽ち文章に至つては、綠雨の價値の主なる部分にして、或は巧緻烹煉の限を盡し、或は進んで淸淡瀟洒の境に入り、機鋒潑剌として才氣溢るゝが如く、亦一代の文章家たり。

吾人は又森鷗外漁史の名を忘るべからず。鷗外は固と飜譯家又は評論家として重要なる地位を占むべき者なるも、創作家として亦棄つべからず。二十三年『國民の友』に掲げたる「舞姫」『柵草紙』に載せたる「うたかたの記」及び翌年『新著百種』に收めたる「文使」の如きは、着想文章、共に作者が精通する獨逸文學の面影を移して、淸新幽高の趣致に富む。三篇共に天涯客寓の日本青年と、薄命可憐の獨逸少女との關係を描き、同情に富める本邦青年が少女の困厄を救ふに端を發し、熱烈なる愛情を懷ける少女が衷心の感謝を表はすに局を結ぶ。特に『舞姫』『うたかたの記』の二篇は、青年が留學生なる事、少女が藝術に關係ある逆境の兒なる事、少女が青年に對する感謝の念終に發して熱烈なる戀愛に變ずる事等、殆ど其の軌を一にす。脚色斯の如く變化なしと雖、着想は純然たる新時代の者にして、確に明治思想の一面を傳ふるに足る。唯『うたかたの記』『文使』聊か本邦青年の思想生活に緣遠く、寧ろ西洋短篇の飜譯を見るの思あり、且小說よりも寧ろ抒情詩的趣致に富めりと雖、『舞姫』は全く之を擺脫し、心理描寫、性格發揮の一點など、當年寫實小說の間に伍して十分重きをなすに足る。慨むらくは、其の文章、品位餘ありて情熱足らず、委曲餘ありて勢力足らず。然れども情景並び至りて淸楚比ひなき所、一新文體を斯壇に寄與して、後來流行の源泉となりし功、亦沒すべからざる者あり。

上述諸家の成人らしきに對し、矢崎嵯峨の舍（おむろ）は靑春の情感漲り溢れたり。二十一年『大和錦』に小篇「薄命のすゞ子」を掲げ、次いで『都の花』に「初戀」の佳作を出しゝより、旣に美しき夢の如き幼時の追想に無限の美感を懷き、可憐純眞の情趣を描きて幽玄の境に入る者あり。其

の好んで描寫せる女性は、無垢稚嬌、天女の如く、之に配せる男性は陰欝にして一種の悲觀を抱ける狷介の人なりき。彼の北邙散士の名を以て『國民の友』に掲げたる「流轉」の如きも亦此の陰欝なる觀念と純眞なる情緒との發露せる者、當年の傑作として「初戀」と共に懊惱の詩人たる彼れの面目を遺憾なく表せり。其の他『涙の谷』及び『都の花』所載の「腐玉子」「婿選み」等より二十四年『國民の友』に掲げし「夢現境」に至るまで、獨得の作あるに非ず、篇什の豐富なる者あるに非ずと雖、筆意一脈の情熱を帶び、高潔なる觀念を含みて、明晰直截、能く青年の肺腑を刺す。類を以て分たば、露伴と同じく理想小說と呼ぶべく、寫實の野に生じたる一異草として、性格世相の忠實なる描寫以外、情緒發動の一部を描いて、天眞流露、殆ど抒情詩の境に入る。而も其の抒情詩的色彩は、露伴の如く高遠にして理想的なる者に非ずして、熱烈にして哀觀を湛ふる者なり。露伴を以て、陽春白雪の詩を歌ふ者とすれば、彼は卽ち月下相思の詩を賦する者なり。彼は又新體詩抒情文の作家として當時に重きをなせるを併せ見れば、斯かる詩的情緒の特色の由來甚だ遠きを知るべし。

當年の文壇に多少の作を出しゝ小說家には、尙『籔の鶯』の作者、田邊花圃女史、『露子姫』の作者、石橋忍月、其の他宮崎三味、須藤南翠、前田香雪、高橋太華、堀紫山人、渡邊霞亭等あり。或は『國民の友』『都の花』『新小說』『柵草紙』『日本の文華』等の雜誌に、或は『新著百種』『小說群芳』『新作十二番』『聚芳十種』『文學世界』等の叢書に、或は諸新聞に、或は單行本に、皆多少の創作を出せり。又滑稽趣味を以て現はれたる作家には南新二、幸堂得知等あり。戲作者の滑稽方面を傳承して多少其の品格を高めたり。明治の滑稽文學を導く先驅として必しも棄つべきに非ず。

鷗外（飜譯家としての）

終に臨みて飜譯小說の概觀を述ぶべし。曩に新文學の曙光を論ずるや、思軒の英文飜譯と二葉亭の露文飜譯とを以て之に擬しぬ。爾來小說の飜譯は、詩歌戲曲等、他の方面の飜譯と共に徐々として現はれ、森鷗外、內田不知庵、原抱一庵、小金井喜美子、若松賤子等の飜譯家を見るに至れり。

就中鷗外、獨逸文學の紹介者を以て立ち、二十二年以來の飜譯壇を双肩に荷うて二葉亭の後繼となりぬ。

鷗外素と醫家の出、其の獨逸語學に於ける、因る所有るなり。彼は語學の知識を媒介として深く獨文學の精髄に參し、兼て彼の國美學並に文藝批評の精神方法を學び、翫賞の餘、進んで評論に從ひ、更に又筆を飜譯に染めたり。而して譯する所、小說を始として劇詩抒情詩に及び、多くは『國民の友』及び『柵草紙』によりて世に出せり。劇詩抒情詩は之を後節に讓り、特に小說に就て觀察するに、其の原作を選ぶや、リットン、ユーゴー、ツルゲネーフ等一二作家に限らるゝことなく、比較的廣く諸國諸種の作家を採れり。今二十六年の比に至るまでの譯筆を列擧すれば、『戰僧』『みくづ』『綠葉歎』は佛のドーデーより、『黃綬章』『二夜』は獨のハックレンデルより、『惡因緣』『地震』は同クライストより、『浮世の波』は同スチルンより、『瑞西館』は露のトルストイより、『該撒』は同ツルゲネーフより、『新浦島』は米國アルキングより、『洪水』は同ブレットハートより、『玉を抱いて罪あり』は獨のホップマンより、『埋れ木』は同シュビンより、『女丈夫』は同フレンチェルより、『ぬけうり』は露のレルモントルフより來りし者にして、悉く收めて二十五年出版の『水沫集』と三十年出版の『かげ草』との中に在り。集中の作、『埋れ木』を除くの外、皆短篇小品たるに過ぎずと雖、『二夜』『地震』『該撒』等、尺幅尙寶惜すべき者なきに非ず。『埋木』に至りては、藝術家を題材とせる幽趣限なき名作にして、天才煥發、キオリンの精藝時人を驚かしたる二十四歲の青年樂手ゲザ・ファン・ザイレンを主人公となし、之を周るに落魄の記者デリレオ、之が子なる可憐の少女アンネット、身天才あるに非ずして好運よく名利の俗念を滿足するを得たりしピヤノ彈きステルニイ、及び巴里モンマルトル街に住める數多浮浪の伶人文士を以てし、斯くして、かの空想ありて實行なく、自家の才能を過信して生涯何事をもえ遂げざる一種の性格を名殘なく寫し出でぬ。主人公ゲザ誠に斯道の天才、自負自信の念强烈にして、美しき空想を未來に馳せ、胸中滿幅の妙譜、紙に寫さば手に從つて成るべく、不朽の名忽ち一世に高かるべしと思ひ上りぬ。然れ

ども藝術家に通有なる倦怠病（アンニュイ）は、彼の希望をしてはかなき妄想に終らしめたり。彼が神興に乘じて事に從ふや、恰も熱を病める者の如く、數日の間萬事を拋つて之に凝る。されど感興の天馬一たび彼を搖り落さば、想像の糸忽ち斷絶して倦怠身を襲ひ、加ふるに瑕瑾百出、嫌厭の情堪ふべからざるに至る。斯くて此の天才の作は、僅にダンテが『地獄篇』の譜に面影を止めて、他は悉く倦怠病の墓穴に烟の如く消え入りぬ。而も此の曲は彼れの戀人、許嫁、所有寶にも代へ難きアンネットと共に、墮劣なるステルニイに奪はれたれば、傷心の極遂に癡狂となり、空しく行末の成功を夢みながら、一代の天才、あはれ埋れ木の花咲く時に遭はずして老い朽ちぬ。斯くの如きは近代歐洲に於ける著しき現象にして、所謂世紀末の病的期間には、特に其の勢を逞うする者なり。鷗外が閑雅の筆、譯し來りて感興深く、正に是れ、本邦藝苑に起らんとするウェルテリズムの豫言とも見らるべし。

鷗外の譯文は其の得失共に彼が創作の文に似たり。否創作の文體却つて飜譯の筆に出でたり。思ふに彼れの創作は思想形式共に外國文學に學べるを以て、之を二葉亭に比するに、二葉亭は飜譯も猶創作の如く見ゆるに反し、鷗外は創作も猶飜譯なるが如き感あり。運筆悠々として迫らず、悲壯を描くも優麗を寫すも、等しく高雅なる擬古調を以てし、溫藉ありて激越に缺くる處、曩に創作に就て述べし所以の者、又移して茲に言ふべし。然れども鷗外固と深遠の學識を具へ、一定の審美見を抱くを以て、落想着筆一に其の典據に依り、決して一點一畫を濫にせず、立案愼密、注意周到、彼の多作濫作の輩をして走り且僵れしむるの概あり。

當時の飜譯小說には、尙二十六年の『世界文庫』あり。田山花袋はトルストイの『コサアク兵』を、內田不知庵は同『めをと』を、松居松葉はセルバンテスの『鈍機翁』を譯せり。されど概ね抄譯又は梗概譯に過ぎず、特に重きを置くに足らず。

第三節　傳奇小說の興廢

春の屋二葉亭以來、寫實小說の潮流天下に瀰漫し、二十年より二十六年

頃に至るまで、一代の文壇を被うて其の全盛を誇りぬ。特に二十二、二十三兩年は斯界無前の盛觀を呈し、名家の輩出、名作の出版、前後相望み、中にも『色懺悔』『胡蝶』『細君』を始め、『むら竹』『當世商人氣質』『露子姫』『掘出物』『風流佛』『殘菊』『墨染櫻』『流轉』『舞姫』『一口劍』『新作十二番』『對髑髏』『うたかたの記』『夏痩』『伽羅枕』等、此の一期間に於ける名篇の殆ど全部を產出しぬ。勿論是等は、今日より之を見れば、其の質に於て必しも優等なる者に非ずと雖、少くも歷史的價値に於て輕からざる地位を有する者なり。げにや此の二箇年は實に寫實小說の一類のみならず、傳奇小說、韻文、各種の飜譯、亦競うて起り、雜誌叢書も連りに刊行せられ、特に評壇の花新に咲き出でて高等批評の端緒開かれ、總べて文學界の所有方面に於ける活動頗る目覺しき年なりき。寫實小說は、實に此の文壇の順潮に乘じて進步の先頭に立ち、以て一代の文運を支配せるなり。

斯かる間に本邦小說の他の一種たる傳奇小說は如何に成行きしか。曩に馬琴の勢力失墜して元祿文學復興せるより、傳奇的趣味を帶べる總べての小說は、新に勃興し來れる寫實的小說に壓倒せられて、一時其の聲息を潛め、僅に前期の政治小說の系統を引ける鐵腸龍溪南翠等の作、歷史小說の作者たる學海篁村三味等の作によりて其の命脈を繫ぎたりき。南翠は巧に時と推移し、或は政治小說を作り、或は歷史小說をものし、更に進んで寫實小說に指を染め、探偵物に手を下さんとす。前期以來『改進新聞』に據りて俗流に愛讀せられ、此の期に入りて『朧月夜』『照日葵』『雛黃鸝』『こぼれ松葉』等を出して一部讀者に迎へられたり。鐵腸は專門の文學者に非ずと雖、此の期に於て又『南洋の大波瀾』等を出して政治家の空想を小說に寓したりき。龍溪は政治家中の學者にして、既に前期に於て政治思想の發達せんとするを見るや、『經國美談』を作りて之を鼓吹し、此の期に至りて、學術思想弘布の必要を見るや、科學應用の冒險小說たる『浮城物語』を著して科學者の空想を小說に寓したりき。依田學海は漢學者より出でて、小說の批評、演劇の評判に筆を執り、兼て小說脚本の創作を試みし者にして、小說は『楠木』『十津川』等、主として南北朝時代の事蹟を綴りたる歷史小

說なりき。篁村は八文字屋風を本領とするも、時に又歷史物の作『勝閨』の如きあり。されど筆路の輕妙を見る外取り出でて言ふべきなし。三味の『桂姬』『塙團右衞門』等、亦世話物作者の手に成りし時代物たるを免れず。要するに當代の傳奇小說は事件の爲に人物を作る弊に陷り、其の人物は悉く無理なる結構に操らるゝ傀儡の如き者、其の量に於て到底寫實小說に及ばざると共に、其の質に於ても亦紅葉露伴の作に匹すべき者あらざりき。唯一篇の長短に至つては、寫實小說の概ね短小なるに反し、傳奇小說に屬する者は、比較的長大なるが故に、傳奇を揚ぐる者、往々其の雄大の風姿遙に寫實小說の規模狹小なるに勝ると稱す。然れども傳奇物の雄大は、少くも馬琴の域に進まざれば、以て識者を動かすに足らず。內容空虛にして何等人生と相關することなき者、徒に外形の大を以て誇るも、到底寫實小說に加ふる能はざるなり。故に敎養ある社會の同情は大抵後者に注がれ、重なる評論家、卽ち逍遙、鷗外、忍月、不知庵、美妙等、連りに心理的小說を鼓吹せり。勿論是等評家は、皆一方にては寫實小說の作家なりと雖、以て當代敎養ある讀者社會を代表せしむるに故障なきなり。天下は依然寫實小說の天下たるを失はず。

然れども勢窮まれば則ち返る。世の好尙は移りぬ、紅葉一派の寫實小說は漸く倦厭せらるゝに至りぬ。全盛は二十三年に止めて、翌年よりは著しく衰へ、『聚芳十種』『文學世界』『小說百家選』の諸什は片々たる小品に過ぎず。紅露二家さすがに『二人女房』『三人妻』『五重塔』等の名作ありて、斯派の爲に光焰を揚げたりと雖、知名の作家、或は隨筆に隱れ、或は諷刺文に遁れ、或は評論に移り、創作寥々、一般の風潮は遂に前年の繁榮を持續すること能はざりき。思ふに新奇を追ふ性質は、獨り物質界に存するのみならず、藝術界に於ても亦著しき者あり。曩に逍遙が模寫小說を唱へ出でてより、斯派の流行かくの如く盛なりしは、馬琴春水の末葉、一九三馬の末流の陋猥なる戲作に比して、遙に卓越せる品格と價値とを有するに因ること論を俟たずと雖、一には又、舊時代千篇一律の勸懲乃至駄洒落に嫌きて、明治小說の新奇なる色彩を喜べりしならずや。且文學の讀者は、必し

も教養ある識者ならず、彼等の好尚必しも識者の其れと一致するを保せず。勿論識者の指導よく一般讀者の趣味を左右すること少からずと雖、當代の評論家が寫實小說に謳歌せるを見て、直ちに一般讀者が之に對する嗜好を斷ずるは少しく輕卒に過ぎたり。されば當年の批評家卽ち教養ある讀者を代表すべき人々が、尙、寫實小說を捨てざるに際し、旣に其の盛運を經過し去りしを見れば、一般讀者の之に對する倦厭漸く起りしを知るべし。

人心旣に解隙あり、新奇の作物に對する翹望爰に起り、乃ち此の解隙を充し、此の翹望に應ずる小說界の新潮は、從來屛息したる傳奇的方面に起りぬ。好奇の念に投じ寫實小說に嫌きたる人目を一洗せんは、唯傳奇物のみ之を能くすべかりしなり。村上浪六の遊俠小說、黑岩涙香の探偵小說は、卽ち此の要求に應じて現れし者なりき。蓋し當時の寫實小說は假令教養ある讀者に捨てられざりきと雖、其の裡おのづから淵落の素因を藏せざるに非ず。夫れ寫實小說は、固と自然を宗とし、一切の私心を去り、自我を解脫して世相の眞を寫す者なり。されば其の究竟は、實世間を觀察して褒貶なく黜陟なく、所有作者の主觀を排して道遙が所謂沒理想の域に入り、以て世態人情の眞相を披瀝するに在り。故に其の至れるや、自然を尺幅に縮め、造化を壺中に收めて、渾成無瑕、之を探れば愈深く、之を索むれば愈杳かに、恰も彼の道遙が寓言に見えたる「底知らずの湖」にも似たり。然れども、かくの如きは總ての作家に望むべきに非ず。假令觀察に私なしと雖、觀察力其の物の銳鈍、其の力の及ぶ範圍の廣狹は固と天分に出づ。故に其の眼睛に映ずる世相は自己に親しき世相なり。觀察に上る人情は自己に近き人情なり。捉へ得たる材料の上には敢て褒貶の私見を挾まずと雖、材料其の物は旣に主觀的選擇を經たるを如何せん。要するに意識的には沒理想純客觀の描寫を試み得べきも、無意識的には其の根本に於て主觀の影、卽ち作者の采丰を帶びざるを得ず。故に其の下れるや、自己の管見に出でたる一種の世態人情を寫し出づるに止まる。且寫實の手法や、眞を得んとするの極、巧拙共に、往々美の約束を破り、描寫の對象動もすれば其の埒外に逸することあり。斯くの如きは寫實小說の淵落する素因となるべき者

にして、其の傾向の强弱は直ちに作物の價値を高下するに足るべし。當時の寫實小說は正に此の則を以て律せらるべかりしなり。

二十三年逍遙は『讀賣』紙上に「小說三派」を論じて、主事派(固有派)、性情派(折衷派)、人間派の目を設け、當時の小說を評して悉く性情派の初步なる者となし、主事派なる舊作家以外に新旗幟を樹てたるも、性情を活寫するを主としながら、尙之を寫すに方りて偏に事件に依らんとする所、未だ性情派の境を出でずと稱し、人間派に至りては當今の文壇絕て無しと言へり。『柵草紙』の鷗外之を批判して、ハルトマンの類想、個想、小天地想を配當し、性情派を以て正しく個想派なりとせり。げに當代の新作家は、性情派個想派に屬して而も未だ至らざる者なりき。性情の活寫や、世相の觀察や、固より主事派の如く類型的ならずと雖、因て來る根本が狹隘なる小主觀に存するを以て、其の弊や同一範圍內の世相人物を描寫するに止まる。故に當時の小說を讀んで彷彿し得べきは、唯東京の中流乃至下流社會の中、特に作者周圍の一部分に於ける世態人情のみ。加ふるに元祿文學復興の結果、利弊共に之を承け、形より入りて遂に神をも傳へ、動もすれば妖艶なる色慾界を寫して其の實相を得んとし、野の花の如く美しく且自然なる人情の發動を斥けて、一向に彼の魔界の趣味に養はれつゝ、粹よいきよと曲りくねりたる人情の發動を描き、其の極往々美の域を脫して醜猥に陷らんとす。斯かる作物の社會に於ける壽命は決して長かる能はず。寫實小說を擁護し助長したりし識者社會と雖、爰に至りて嫌焉たらざる者幾何ぞ。茲に於てか小說の理想を問ひ觀念を論じ、當代小說の今少し深く且廣からん事を求むる傾向批評家の間に盛に起り、作者に在りても、從來辭句の鍛錬文體の選擇に苦心し、狹隘なる主觀に限られたる小說を以て能事畢れりとなせる者、反省し考慮して恣りに製作に逸らず。既に名を成せる者、將に名を成さんとする者、齊しく默想の裡に沈みて、茲に一般小說界の不振を來しぬ。此の趨勢は彼の恒心なき俗衆の倦み易く厭き易きと相扶けて、大勢遂に寫實小說を見捨てぬ。

此の時に方りて浪六が遊俠小說世に現れぬ。浪六は思軒の下に『報知新

聞』に在り、其の「叢談」に原抱一庵村井弦齋遅塚麗水等と執筆せし後進作家にして、二十四年『三日月』を出版するや、奇矯の筆、善く市井の遊俠三日月次郎吉を寫し、『俠客傳』にも見るべからざる生采の奕々たる者ありしかば、一代の讀書社會は翕然として之に就きぬ。次で『井筒女之助』『奴の小萬』出で、皆愛すべき遊俠を描きて成功したりしかば、後進の浪六一躍して大家の列に入り、先進作家をして一時後へに瞠若たらしめたり。爾來三十六七年の交に至るまで『鬼奴』『破太鼓』『夜嵐』『深見笠』『髯の自休』『安田作兵衞』等、作る所、皆過去の歷史に於ける三日月一流の人物を描いて、江戸時代中流以下の社會に於ける粋と俠との理想を發揮し、其の主人公は、宛ら此の思想の權化の如く、脚色事件、總べて傳奇的色彩を帶び、以て寫實に倦みたる一般の時好に投じぬ。是に於てか、傳奇小說の反動的流行を小說界に見るに至れり。

げに此の反動は、寫實小說の失勢と民心の倦怠とに根ざし、新奇を好む一般傾向に出でたりと雖、特に浪六に至りて其の盛を極めしは別に故あり。

蓋し浪六の作は主事派類想派に屬する點に於て南翠龍溪等の作品に異なる無しと雖、讀者を動かすべき一種の魔力を有する點に於て大に趣を異にす。而して其の魔力たるや、一に小說の主人公の性格と國民性との契合、及び之を描くに恰好なる奇矯の筆致に存す。夫れ三日月等の性格を形作る俠と粋との二特質は、江戸時代國民の間に醞釀し來りし一種の氣象にして、假令往々笑ふべき不自然沒人情の屈曲ありきとするも、既に三百年間中流以下の理想となり、明治の今日に傳へて尙其の胸奧を充せる者なれば、任俠風流の行動直に讀者の肺腑を衝き、加ふるに描寫の筆力亦之に添ふ所ありしがば、讀書社會は茲に新なる形式を以て復活したる俠客傳を得て、歡喜措く能はざりしなり。

然れども浪六に取るべき所唯是のみ。題材と筆力と共に、『三月月』『女之助』に盡きて、爾來唯千篇一律、奇構も奇に慣れては興なく、索然として情味共に失ふ。文章亦舞文弄筆に流れ、蘊蓄なく研究なきの致す所、時に杜撰に過ぎ孟浪に失し、到底紅露一流の精練なる文章に儔すべきに非ず。

内容の空虛は之にも勝り、彼の管見的人生觀を寓せりと非難せられし寫實小說に較ぶるも、尙數等の下に在らんとす。是を以て觀衆の隨喜讃歎するに係らず、識者夙に之を却け、撥鬢小說の名を與へて小說界墮落の一現象とせり。要するに撥鬢小說は主事派類想派の劣等なる者なれば、性情派個想派たる從來の寫實小說を壓して獨り隆盛の域に上る事あらば、小說界は明に後退せるなり。斯かる間に、倦み易き看衆は、內容形式共に變化なきに嫌きて、復浪六に同情せざるに至りぬ。

物滯れば必ず腐る。西南の妖雲去りて國家事なき、最早二十年に垂んとし、十七年朝鮮の變亂は深く國民を刺擊するに足らず、二十三年國會開設の事一時人の耳目を側てしめきと雖、尙太平の氣象海內に充ちたりしかば、民心茲に倦怠の色を現せり。倦怠は延て文壇に及び、文學思潮革新の活動ありてより十年の今日、斯界の意氣又當初の如くなちず。罅隙白出、撥鬢小說を喚起して茲に墮落の端を發き、幾もなくして之を棄つるや、停滯又停滯、墮落は進んで探偵小說の流行を來すに至りぬ。探偵小說は恰も當時劇壇に起りし壯士芝居の如く、疑獄の始末を以て骨子となし之に人情の糸を搦みたる者、欺騙、邪淫、殺人、强盜等、所有犯罪の祕密と、之を偵知する探偵社會の苦心の祕密とを描いて好奇の俗衆に投ずるなり。多くは西洋物の抄譯又は飜案にして、一時の盛榮に乘じ、出づる者甚だ多く、遂に其の叢書すら見るに至りぬ。淚香小史は實に是等作家の代表者なり。

淚香は通俗新聞文學者として成功せる者の一にして、西洋探偵小說を飜するや、唯其の意を取りて自家藥籠中の者となし、俗衆の知識本邦の事情を以て了解し得べき範圍に於て、之を平易精細の文章に綴り出せり。『鐵假面』『非小說』『大金塊』『死美人』『人耶鬼耶』等は、一時讀書界を風靡したる者にして、其の探偵的興味は、讀む者をして卷を措く能はざらしめぬ。然れども其の興味たるや、畢竟探偵的にして、高級なる文學的畛域に甚だ遠き者なるは言を俟たず。

彼も一時此も一時、操守なき俗衆の嗜好は、推移すること走馬燈にも似たり。二十四五年以來不振に陷りし小說界は、卑俗なる浪六淚香の小說に

よりて漸く命脈を維ぎしも、二十六七年に及びては其も亦廢れて今や不振の極に達しぬ。小說不振の我文壇は如何なる者を要求せしか。抑も讀書社會に如何なる好伴侶在りて小說を捨てたりしか。道遙は當時小說不振の因緣を尋ねて、史傳の流行宗敎熱の昂上等を數へたり。げに當年文壇に起りし人物評傳歷史評論と哲學宗敎の問題とは、人心をして小說を離れしむるに力ありしと共に、又小說を離れし人心を收めて此が好伴侶たるに適したりしなり。宗敎界の活動は、かの國粹運動勃興の際に萠し、二十五年宗敎敎育衝突の大問題起るに及んで狂騷を極め、且哲學及び神學の研究漸く盛にして、思想界多事なりき。然れども純文學に對する此の事象の影響は必しも重大なる者に非ず。吾人の注目すべきは卽ち史論評傳の側に在り。思ふに史傳の流行は、二十二三年頃旣に其の萠芽を發し、民友社博文館等の書肆が連りに內外豪傑の傳記を出しゝより始めて、二十四年田口鼎軒が雜誌『史海』を發行せし頃に及んで、斯界の活氣大に加はり、人物の評傳史實の評論相次で出で、論爭一時の問題たりし者少からず。續いて二十六年民友社の諸文士が『十二文豪』を發行せし頃に至り、文壇の嗜好は一轉して之に向ひ、小說に嫌らざりし讀書界は相率ゐて之に歸しぬ。

史傳流行の勢力は一方に於て小說の讀者を奪ひ、作者を屛息せしめつゝある間、他の一方に於ては小說其の者に影響して、爰に新なる小說を喚起しぬ。讀書社會に於ける過去顧望の情感は、新奇を追ふに疲れたる社會の現狀と相緣りて爰に歷史小說の渴望となりぬ。『小說神髓』以來一切の過去を拋つて革新を唱道したる識者社會は、國民文物に對する過去の歷程、卽ち歷史の權威を感じ、劇部に於ける時代物と團菊の演技との遂に除くべからざるが如く、歷史小說亦捨つべきに非ざるを知り、且其の師表とする泰西騷壇に於ても、歷史小說の一派、優に世話小說に對立するを見て茲に自覺を生じ、今更に馬琴の精力に驚き、其の荒唐の過、勸懲の失以外、別に歷史小說家としての價値を認め、更に進んで斯かる過失なき優秀なる歷史小說を現今の文界に得て、以て墮落の極に達したる斯壇を廓淸せんとするに至りぬ。二十六年『讀賣』新聞が賞を懸けて歷史小說を募集せしは、卽

ち此の渇望の一端を表はす者にして、高山樗牛の『瀧口入道』は之に應じて出でし者なりき。其の他遲塚麗水、村井弦齋、塚原澁柿園（後の蓼洲）等の作家は、皆此の氣運に乘じて世に用ひられたり。

然れども當時歴史小說に對する渇望は、唯渇望に止まりて遂に充さるゝに至らざりき。上述諸作家の篇什、唯勸懲の臭味荒唐の弊套を脱せるのみにて、別に從來の主事派的時代物に優る所なく、其の分量を以てするも、成功の度を以てするも、到底紅露一派の敵に非ず。唯澁柿園の筆力稍望を屬するに足る者ありきと雖、麗水弦齋漸次に方向を轉じ、歴史小說勃興の氣運遂に去りぬ。斯壇に於ける成功は暫く之を後の世の大才に俟たざるべからず。

第四節　新體詩及戲曲

新體詩

『新體詩抄』が詩界革新の運動を起してより既に五年の星霜を閲したりと雖、斯界之に續く勇者なくして空しく十五年の故態に停りぬ。小說界の革新を遂げたる『小說神髓』は後れて起りしかども、硯友社一派差し次ぎて崛起し、寫實小說の大旆文壇を風靡し、詩界の寂寥を餘所に見て獨り進歩の道程に上りぬ。思ふに『新體詩抄』の諸篇は、文學史上の位置を以てすれば、正に小說界の『書生氣質』に相當すれども、其の內容實質に至りては、恰も織田純一郎等の飜譯小說政治小說と相若くの觀あり。嚴格に言へば新體詩界の『書生氣質』は未だ起らざりしなり。況んや『浮雲』をや。況んや『夏木立』『二人女房』『風流佛』をや。蓋し『詩抄』の詩篇は、聲調新なりと雖低きを免れず、用語自由なりと雖燕雜なるを避け難く、思想の廣濶は可なれども爲に散文的に陷り、表現の法明瞭なるは可なれども爲に露骨に過ぎたり。されば格調用語の雅醇ならん事にのみ熱中する歌人乃至國學者等の之を嗤笑せしは勿論、一般文藝界に於ても亦其の崇拜者甚多からざりき。曙光を十五年に發して今に其の繼續者なく、唯徒に學童の傳唱して軍歌の代りとするに任せたるは、斯かる事情に基く事少からざるなり。

然れども新時代の思想感情は、到底在來の形式を以て表現する能はざるを以て、新體詩は遂に沒すべからず、果然、此の圓融自在なる形式に充用するに比較的雅醇なる詩語を以てし、一面には、勉めて卑野と蕪雜と散漫と露骨とを避けんと試みたる一派の詩人を輩出せり。

落莫たる詩界は、二十年美妙紅葉九華が『新體詞選』を刊行し、湯淺半月（吉郎）が時々小品を『國民の友』に掲げ、二十一年落合直文「孝女白菊の歌」を『東洋學藝雜誌』に出し、二十二年鷗外等、新聲社の人々が譯詩「於母影」を『國民の友』に載するに及んで漸く面目を改めたり。就中、美妙齋の軍歌は今も兒童の口に謠はれ、「白菊の歌」は井上巽軒の漢詩を飜せる長篇、當時の呼物として忽ち數箇の雜誌に轉載せられ、「於母影」は鷗外喜美子直文器堂等が、獨英諸家及び明の高靑邱の詩を和譯若くは漢譯し、或は原意のみを取り、或は字句韻法をも迪りて譯出せる長短十二篇を集めたる者にて、獨のゲーテ、シェッフェル、ハイネ、ホフマン、レナウ、英のバイロンを主として、其の他二三作家の小篇を交へたり。爾來飜譯創作兩ながら起り、二十三年に入りて作家の輩出少からざりき。

此の方面に於ても『國民の友』は隱然たる保護者なりき。「於母影」と同年、既に可行懷鄕淺水疎影詳鄕等の名を以て、ゲーテ、シルレル等獨逸諸名家の短章を譯せる者、及び美妙齋の創作小篇を收め、翌年更に矢崎北邨散士（嵯峨の舍）、宮崎湖處子、中西梅花道人等の作を收め、斯壇の中心となれり。是より大西操山、戸川殘花、磯貝雲峰等の新作家を出し、『日本評論』『文庫』等の文學雜誌、皆新體詩を以て誌上の飾りとするに至れり。就中美妙湖處子梅花の三者最勉め、恰も當時の詩壇を代表する觀ありき。

美妙は創始の才ある人なり。新小說の作家として、言文一致體の研究家として、又文界評論家として、既に其の才名を成しゝが、今又新體詩の作者、韻文の研究家として現はれたり。二十三年『國民の友』に掲げし「醉沈香」を始め、長短の創作及び飜譯を同誌に出しゝ者少からず。或は瀟洒或は妖艶なる小說的の詩想を詠出し、且つ深く詩形に留意して洗鍊の語句を行りき。湖處子は小說を作り、又美文をものし、常に純潔清新なる抒情

詩的思想を表せり。二十三年世に問ひし『歸省』の如きは、作者が一夏歸省の二週日間の感想錄に過ぎずと雖、理想の清高、情感の純潔、共に靑春の氣象を帶びて、恰も萠え出でたる若草の如く、文章亦英文の脈調を以て和漢の語句を驅使し、想と形と相俟つて優に新散文詩の境に入る。されば新體詩の如きは最力を用ひ、同年以後『國民の友』誌上に其の什を見ざる事稀なり。而して其の作風は勿論『歸省』に類似し、詩材亦田園の趣を帶び、自然の描寫に富み、美妙が寧ろ人事を謳へるに對し、好箇の對照をなせり。梅花道人は樂天詩人なり。飄逸にして奇氣を負ひ、性情流露して天眞覆ふべからざる趣あり。二十四年『國民の友』に出でたる「九十九の嫗」等、前年よりの作夥しく、遂に同年『新體梅花詩集』を刊行するに至れり。此の集固より片々たる小冊子なりと雖『新體詩抄』以來の好詩集にして、且つ一作家の創作をのみ集めたる新體詩集の嚆矢なり。其の他嵯峨の舍は其の小說に於けるが如く、情感の激越を以て優る。西詩飜譯の如きは、口語を用ひて能く詩趣の饒なるを得たり。

上述新作家の用ひし詩形は概ね『新體詩抄』の採りし所に從へりと雖、用語は『詩抄』の詩人が漢語俗語併せ用ひて羈束する所なく、其の弊や蕪雜に陷り乾燥に失し、詩の成立の要素たる言語美を沒却して顧みざらんとせるに反し、著しく雅醇の度を增し、用語を古文學に取り、句調を和歌に學びたりき。勿論嵯峨の舍の如き、言文一致體を詩に試みし者無きに非ざるも、美妙齋の如き散文に於ける言文一致の勇將も、韻文に於ては雅語雅調を主張せる程なれば、一般の風潮は『詩抄』の用意と方向を異にせりき。是れ一は當時復興の勢凄じかりし古文學の影響にも因るなり。

此の時に方りて、一般評論界の活動につれて、新體詩も亦斯壇の問題となり、韻文論詩論は、小說論と共に評家論爭の好題目となりき。而して之に活氣を與へたりし者は亦美妙齋なりき。二十三年末より翌年に亙り、一篇の長論文を『國民の友』に連載し、題して「日本韻文論」といふ。此の論の主とする所は、勿論新韻文の形式に在りて、未だ其の內容に及ばざりきと雖、詩歌研究の端緖之より開け、不知庵忍月鷗外等交々之を論じ、辯

難應酬甚盛なりき。此の論爭や、當時の新體詩に直接影響する所、さまで大ならざりしかども、從來詩歌に對する蹈襲的習慣を破り、大に研究的精神を養ひし一條は沒すべからざる功績なり。

前記作家に引續き、國文家歌人の徒が、世潮につれて筆を新詩形に染めし者少からず。『白菊の歌』の作者落合直文は二十六年『騎馬旅行』の長篇をものし、其の他中村秋香、大和田建樹、佐々木信綱、小中村義象、黑川眞頼等あり。然れども此等皆擬古體長歌體を取り、詞章雅醇を極むれども、詩想格調共に陳腐にして、美妙等が清新に比ぶべくもあらず。

斯かる間に美妙梅花の統を引き、清新の思想聲調を謳ひ出でたる一團の詩人現はれたり。『女學雜誌』及び『文學界』の同人是なり。北村透谷は之が首領にして『透谷全集』收むる所の數篇、概ね二十六年の作に屬す。透谷夙に詩に志あり、二十二年既に『楚囚の詩』といふ長篇をものし、強て七五調に依らざる變調を以て國事犯の新囚を詠じたりしが、事によりて世に出さざりきと雖、詩界に未だ存せざりし新體の者にて、創始の詩才頗る見るべし。爾來『文學界』等に出しゝ者少からざりし中に、「行きたふれ」、「螢」、「双蝶の別れ」、「眠れる蝶」等、片々たる短章に過ぎずと雖、一種の幽韻當代の珍とすべき者あり。若夫れ、長篇『蓬萊曲』に至つては、泰西劇詩の體裁を借りて奔放の詩想を披瀝せし者、三齣八場より成り、長句短句錯綜して必しも七五五七等の節奏に依らず。世を憤り戀人を捨て、尙足らずして己の滅びを願ふ憐れの塵の子が、內界に於ける神人二性の戰に惱みて蓬萊原にあくがれ歩き、危巖削立雪崩大地を動かす靈山の絕巔に攀ぢて大魔王に遭遇し、其の嘲罵に反抗して物皆滅びよと叫び、憤悶遂に死滅を呼び、巖頭身を踴らして千仞の壑に投ず。是れ此の曲の脚色なり。章句散漫にして渾成の詩體に遠く、問甚しく散文的にして全體の詩調を破ることありと雖、其の內容に至りては、想像奔逸情緒熱烈、透谷が多恨の一生と心裡の煩悶とを最よく代表し、二十七歳の夏に於ける悲慘の最期を豫言するものの如し。思ふに斯かる人生問題の煩悶を懷く者、啻に透谷一人のみに非ず。所謂世紀末の思想界、往々かゝる神經質的煩悶を湛ふ。特に當代青

年の一部に於て、泰西哲學思想の傳播と、其の文學思潮の浸潤との結果、從來實利の一方に偏倚せる國民の間に到底見るを得ざりし一種悲痛の觀念を養成したりき。勿論其の苦悶懊惱や、決して深刻偉大なる者に非ずと雖、兎に角從來行はれたる厭世觀と著しく趣を異にせり。『蓬萊曲』は卽ち此の思潮に觸れたる好箇の記念にして、透谷は正しく當代思潮の一部を代表し、將に來るべき横流の先聲をなしゝ者といふべし。『文學界』の詩人には尙、戸川殘花島崎藤村あり。作多からずと雖多望なる前途ほの見えたり。

以上諸家の詩、之を今日に見れば深く言ふに足らずと雖、詩界草創の當時、『詩抄』の後を承け、擬古派者流の間に介し、清新の詩想を歌ひ、幽韵ある趣味を鼓吹したるは、假令其の聲調に於て擬古派に劣る所あるも、詩想發展の上に沒すべからざる功績を殘し、斯壇第二の革新を遂げたりといふべし。此の點に於ては美妙湖處子梅花及び透谷の如きは正に新體詩界の『浮雲』『夏木立』たり。然れども國語の知識猶不十分にして、語格措辭の完きを望み難く、思想に於ても、猶器局狹小、思索に乏しく觀察に粗にして、未だ明治詩壇に誇るべき創作を見ず。飜譯の如きも片々たる斷章のみにて、到底泰西詩宗の面影を偲ぶに足らず。詩界の紅葉露伴未だ出でず。總ての發展を擧げて次期に委ねたり。

戲曲

戲曲の發達は新體詩に比して一層後れ、未だ明治新戲曲の曙光すら見ることを得ざるなり。此の期に於ける斯壇は、將に新曙光を見んとする時代にして、之を新文學の條下に序るは少しく儔を失ふの感あれども、年代の順序上、暫く劇界の遷轉期に在る戲曲を檢せん。

混沌たる當時の戲曲界に一道の光明を與へ、後年起るべき新戲曲の先驅をなしゝは、卽ち坪内逍遙なりき。十七年逍遙はシェークスピヤの、ジェリア・シイザア（ナヂリヤ・シイザア）を浮瑠璃體に飜譯し、『該撒奇談』自由太刀餘波鋭鋒（ナヂリヤ・シイザア）』と題して世に出しぬ。是れ實に西洋戲曲の面影の我文壇に紹介せられし嚆矢にして、明治の戲曲界は此の時を以て過渡時代に入りにき。是より先、依田學海小永井少舟等の『新評戲曲十種』等ありしも、皆單に文章の評釋にして、戲

曲としての研究に非ず。『歌舞伎新報』の如き劇部雜誌出でしも、梨園の消息演技の筋書を載するのみなりき。『該撒奇談』出でし頃、劇壇の刷新及び改良の事朝野の注目する所となり、演劇の改良を唱ふる者漸く多く、遂に十九年演劇改良會の成立を見るに至れり。改良論や固より劇の全部に關し、劇場俳優技術等を議する事少からざるも、特に脚本改良に重きを置けるを以て、將來の戲曲脚本に影響する所頗る夥しかりき。

維新の變動は社會組織を一新すると共に、演劇の觀客と嗜好とに著しき變化を與へたり。從來の觀客は專ら中流以下に屬し、從て劇其の物の社會的地位甚低かりき。然るに維新以來、從前の觀客たりし中流以下の士分の人は、風雲に際會して顯官に上り、紳士となり、一躍上流の列に入りしより、演劇も亦上流社會の娯樂となり上りぬ。且泰西交通の結果、彼國に於ける劇部の消息のいたく我國と異なるを知りしかば、當時比較的進歩せる思想を有せる彼等新觀劇家は、在來の演劇に不滿の點少からず。茲に於て、か改良論は先づ是等新觀劇家の口より唱へられぬ。然らば則ち彼等は如何に改良せんと欲したりしか。思ふに彼等は維新當初の思潮を形作りし社會の有力分子にて、從て概ね實利思想を以て滿ちたる人士なりしかば、自然の傾向より、荒唐を斥けて實歴を尙び、夢を喜ばずして現を重んずるを以て、演劇に對する嗜好も著しく實歴的となり、夢幻的なる在來の劇の如きは、最好まざる所なりき。而も彼等は社會の上に大勢力を有する人士なりしを以て、忽に社會の嗜好を一變し、爲に從來中流以下の好尙にのみ媚び來りし座主俳優及び作者をして、營業の必要より其の改良論に聽くに至らしめぬ。劇壇の改良刷新是に始まる。

改良は總ての方面に亙り、劇場の構造より始め、百般の機械的設備は勿論、技藝の上にも及びぬ。就中脚本に關しては、座主守田勘彌、俳優市川團十郎、作者古河默阿彌、相提携して先づ寫實的傾向を史劇に加へ、特に默阿彌、團十郎の長所を看、時流の赴く所を察し、從來得意の世話物を棄てて、一種の考古的史劇を作しぬ。所謂活歴物是なり。當時改良論者の說く所は、舊劇脚色の滅裂、趣向の陋猥なるを難ずるに在りしは勿論、殊に

時代物の荒唐無稽、甚しく史上の事實に戻れるを非とするに在りしかば、活歴物は最もよく此の嗜好に投じ、二十一二年の比盛りに行はれたりき。而して、此等改良論者の中最有力なる者は、紳士社會の學者派とも言ふべき人人にして、就中末松青萍、藤田鳴鶴、外山丶山等は具體的の改良意見を公にし、作者にては依田學海、川尻寶岑最熱心に此の運動に與りぬ。今當時の改良意見を綜合して其の主張を檢するに、大約次の二條に攝するを得。一は卽ち舊劇の陋猥と殘忍とを除きて高尙優雅となさんとする一種の理想論にして、他は卽ち脚色人物の本より衣裳臺詞の末に至るまで、勉めて事實に模せんとする一種の寫實論なり。前者は舊劇一面の弊を說き得て中れり。然れども論者往々極端に走せて、道德と美術との交涉につきての見解を誤る。後者も亦舊劇の他面の弊を衝いて妥當なり。然れども是亦極端に馳せて往々國劇特有の美點を閑却し、總べての樂劇的要素を除き、脚色事件の空想に出づる者をも斥けんとするに至れり。

改良論には斯かる缺點あるを免れざりきと雖、兎に角上述二面より着手せんとし、青萍主唱の下に前に記し丶演劇改良會を組織せり。會員には前掲二三子の外、矢田部尙今、矢野龍溪、福地櫻痴等、其の他洋行歸りの學者連を網羅し、賛成員には朝野の名士を集め、會の目的として舊來の陋習を改良し好劇を實演せしむる事、脚本著作を榮譽ある事業たらしむる事、構造完全なる一演技場を建築する事の三條を標榜したりき。次で岡野紫水等新に演藝矯風會を設け、二十二年日本演藝協會と改名し、文藝委員には學海半峰逍遙美妙默阿彌篁村思軒鴎外紅葉寶岑南翠等、文壇の名士を網羅し、技藝委員には俳優樂家等百般の技藝家の優者を收め、以て新脚本を創作又は選擇し、之を場に上せて演劇の品位を高うせんとし、創作は篁村南翠主として是に當り、篁村は『朝日』に南翠は『改進』に掲げたり。

此の時に方り、森鴎外評論家として立ち、一定の審美見を以て演劇を談じ、併せて當時の改良論を評しぬ。彼は『柵草紙』に於て、或は演藝協會の演說に於て、其の意見を發表し、改良論者が劇場構造の末に走り極端なる模實の弊に陷らんとするを警め、從來の作者が座主俳優に迎合し、俗衆

の嗜好に阿附するを難じて、戯曲は本演技は末なる所以を說き、深く戯曲演藝の根本問題に論及せり。此等の論議は、逍遙が劇に向つて人情描寫の自然ならん事を要求せしと等しく、當代斯壇に對する好箇の警醒にして、後來必ず實現せらるべき新思想の萠芽なりき。惜いかな、當時の好尙を距ること餘りに遠かりき。

改良論の聲大にして呼ぶこと疾き、上述の如かりしも、其の實效は遂に擧らざりき。協會の規模徒に大に、名聲徒に高きも、選んで以て場に上すを得し新作は僅に宮崎三昧の作一篇に止まり、劇部と新學者との間に於ける鴻溝は容易に除くべからず。會合遂に中絕して、贏ち得たる結果は、劇の社會的地位の向上と活歷の流行と劇場の改良との瑣末事に過ぎざりき。されば歌舞伎座の大劇場は、歐風を參酌して宏壯なる建築新に成り、團十郎之に據りて頻りに活歷を演じ、且つ俳優の社會的地位は劇其の物の地位と共に進み、川原乞食一躍して演藝家と稱せらるゝに至りしかども、根本的重大事は依然舊態を存せりき。

斯の不振の作劇界に在りて、最も新作に勉めたりしは學海なり。學海は學者派の評論家にして且つ作家たる者、夙に舊劇の卑猥殘忍背實を厭ひ、嘗て『吉野拾遺名歌譽』を作りて粉本を示し、卷尾に附記して曰く、「此の戯曲は、男女の情態を描きて情義二ながら得しむるを主となし、傍ら弓馬衣冠の故實を示し、又言語を述ぶるに、雅にして耳に遠からず、俗にして野鄙猥褻に入らざるを旨とす。又殺伐殘刻なる形を示さず、又悲痛哀歎に過ぎて衰弱狼狽の狀を現さず、哀むと雖勇壯奮烈の意を寓し、武勇を示すと雖酷薄粗暴の所爲を見する事なし」と。當時遍く行はれし理想論と寫實論との奇しき混和なりと言ふべし。彼は此の主義を以て、二十二年又『文覺上人勸進帳』と『拾遺後日連枝楠』とを作れり。共に寶岑との合作にして、前者は全篇盛衰記に據り、特に勸進帳と院宣との二齣は純然たる正史なり。此の年場に上り、座附作者に非ずして作を場に入れたるを以て稱讃せられたり。されど尙外題を『那智瀧誓文覺』と改め、竹柴其水作と署せざるべからざりき。後者は『名歌譽』の後日にして、史實を重んずる事前

者に等し。學海と寶岑との外、尙二三の新作を出しゝ者あれども、皆注目に價せず。各劇場は依然舊作者の似而非脚本を演じ、東京の河竹默阿彌、竹柴其水、大阪の勝能進、同諺造等、古院本新小說或は講釋種の一節を取りて飜飯補綴せるのみにて、毫も劇曲の約束に從はざる陋作のみ行はれたり。

二十四年の比、學海の說益〻極端なる考古主義に傾き、團十郎亦默阿彌の史劇に活歷を標幟せし時、櫻痴居士往年政論の筆を止めて梨園に投じ、團十郎と協力して史劇の創作と之が上場に勉めぬ。是より先き、團十郎と學海とは、所見の骨髓に於て一致せしも、學海の直截急激なる、實行の上に於て遂に藝壇に容れられざりしが、櫻痴は急激なる改革の到底行はれ難きを見て漸進の穩なるに從ひ、一旦團十郎と意氣相投ずるや、能く梨園の關門を破り、歌舞伎座の立作者として其の所見を實行するに至りぬ。是實に明治の演劇脚本史上に於ける一變動にして、文壇と藝壇との調和に一步を進めし功績沒すべからず。且其の史劇や、新作にても改作にても、舊來の不自然背實を除き、多少泰西史劇の趣を參酌し、以て默阿彌の史劇に一轉進を與へたり。爾來二十六七年に至るまで、劇界は宛ら櫻痴團十郎の史劇時代たるの觀あり。新作改作多かる中に、『春日局』『關原譽凱歌』『大久保彥左衞門』『日蓮記』『大森彥七』等最名を得たり。然れども櫻痴が劇場內部に容れられしは、彼れの革新意見の全部が行はれしによるに非ずして、新脚本を舊劇に調和するに勉め、團十郎の活歷的腹藝的趣味に迎合せんことを計りしに因るなり。されば一方に於て不自然背實の名の下に舊劇の夢幻的妙所を除き、他の一方に於ては未だ十分なる性情劇的新脚本を上場することを能はず。爰に一種の沒趣味なる折衷劇を生じたり。是に於てか障害は二方面より起りて、櫻痴の努力と團十郎の活歷とを失敗に歸せしめぬ。

二方面よりの障害とは、卽ち舊劇に慣れたる觀客の不評と、新思想を抱ける評論家の非難と是なり。當時猶觀客の多大數を占めたる俗衆は、舊劇の夢幻的美觀に慣れて、いたく櫻痴の改作を喜ばず、彼等歡樂の中心を奪はれしを見て、團十郎の活歷を斥けぬ。又彼の識者社會の櫻痴に期待する

所甚大なりしも、其の爲す所未だ新劇の美を發揮するに足らず、新作も改作も往々默阿彌に若かざらんとするを見て、ふたく失望しぬ。卽ち觀衆は彼が破壞的方面に、評論家は其の建設的方面に、各少からざる不滿を懷けるなり。果然舊劇崇拜の潮流は社會を動かして、折衷史劇に對する反動をなし、二十年以來の改良論の精神も全く行はれざるに至りぬ。是に於てか、文壇の先覺坪內逍遙夢幻劇論を『早稻田文學』に揭げ、性格劇の新標準によりて史劇を論じ、評壇新に波瀾を揚げたり。時恰も二十六年以後二年間に當る。此の論は劇界の『小說神髓』といふべく、曩日の改良論以外、一新思潮を文壇に導きし者なれば、其の內容及び之に伴うて起れる新脚本は、之を次期に說かんとす。

終に臨みて此の期に於ける戲曲の飜譯を記さゞるべからず。此の方面に於ける活動は、固より小說に於けるが如くならざるも、猶二三の西劇の、鷗外と其の弟にして劇評家たる三木竹二との手に譯せられたる者ありき。二十二年『讀賣』に出でし「調高矣洋絃一曲」と、同年『柵草紙』に出でし「折薔薇」と是なり。共に『水沫集』に收む。前者はカルデロンの『ザラメヤ村長』後者はレッシングの『エミリヤ、ガロチイ』にして、飜譯に取りし用意は、原文に忠實ならんよりは寧ろ邦語の調に近からんことを求め、其の語句の如きは勉めて劇曲慣用の語勢語彙に從はんと試みたり。然れども是等譯筆の劇壇に殘しゝ影響は、小說の飜譯の如く大ならず。舞臺に上ること固より是なく、之に續く飜譯も亦出づることなかりき。

第三期の文學

明治二十八年——同三十七年

第五章　新文學の勃興（其の二）

第一節　文運興隆の因緣

思想界の進運につれ、文學思潮革新の事成り、茲に新文學の活動を起してより殆ど十年、明治二十七八年の交に至りて思想界は再び一大轉進をなすべき時機に際會せり。勿論思想界の事は一晨一夕忽然面目を改むべき者に非ず。其の由て來る所甚遠く、其の根ざす所甚深し。十年の間、冥々の裡、徐に發展し來りし斯界の芳蕾、會〻二十七八年に於ける國家的大事件に遭遇して茲に煥然たる美觀を現じたるなり。

日清戰爭は本邦文明史上の一大現象なり。思想界に第二の革新を促したる動機、國民の自覺を普遍ならしめ信念を確固ならしめたる勢力なり。げにや自覺は國民思想の至寶にして、精神的活動の生氣は常に其の裡より湧く。蓋し第二期初頭の盛觀は、專ら國粹主義の勃興に伴へる國民自覺の賜なりき。而も當時國粹思想の影響せる所は社會の全般に非ず。從て其の自覺も亦範圍の狹きを免れざりき。然るに日清戰爭の影響は、殆ど社會の隅より隅に亙り、津々浦々、貴きも賤きもおしなべて新なる自覺を喚起したり。且つ自覺に伴ふ國民の信念は、前期に在りてはなほ多少不安なりしに反し、今や確固不動の者となれり。自覺の賚賜なるべき精神界活動の、前期に比して一層の隆盛を來したるは亦宜ならずや。

而して此の精神的活動の根柢は、言ふまでもなく一般學術界の進步に在り。二十年以來、博物窮理の諸科學より地理歷史宗教哲學に至るまで、日に月に面目を改め、研究的精神は學界の全般に亙り、不斷の飛躍長足の進步、精神的生活の狀態を一新せり。斯くして醞釀し來りし斯界の盛運、一朝國民の大自覺に遭ふ。華彩燦たる發展を遂げざらんと欲するも得べからざるなり。

明治思想界の國家思想の發動によりて動かされしこと前後二回なり。而も第一期なるは、國內に於ける歐化思想に反動して起りし者なりしが、新

に起りし第二回のは、國外に對して國民の存在を自覺するに起りしなり。前者は理論又は主義よりして起りしが、後者は國家の運命に關する嚴肅なる事實と、國民の力量を證明せる嚴格なる實驗とよりして起りき。是に於てか從來海内に跼蹐したりし眼を轉じて廣く世界に注ぎ、世界に於ける我大日本の地位を觀察し、此の國に賦與せられたる至高至大の天職を意識し初めたり。斯の自覺斯の自信は所有方面の活動を促し、思想界に空前の偉觀を與へたり。元良外山諸學者が國家的色彩を帶べる宗教上の新信仰を提唱したるが如き、井上元良高山木村等同志の士が新神道或は日本主義を唱道し、國家至上主義現世主義を標榜したるが如き、皆此の國民的意識の發現の一端なり。されば等しく國家主義と言ふとも、二十年代の國粹主義とは大に其の面目を異にし、悉く世界的觀察より出でて、將に飛躍せんとする國民の意氣を表示せる者なりき。

思想界の活動既に斯くの如くなれば、社會萬般の事象一として進歩せざるなき、固より言ふを俟たず。況んや精神的活動の一として、思想界の消息に密接なる關係を有する文藝界の現象に於てをや。且つ文藝評論の進歩と共に、之が根據たるべき美學美論の發達を來し、曩に鷗外等二三の評家がハルトマン等に立脚して評論の筆を執りし頃は、文壇未だ普く此の知識を享受するに至らず、唯彼等評家が論爭に資するのみにて、未だ一般作品に影響するに及ばざりしが、二十七年の比に至りては、新知識を有する作家評家相續いで現れ、嚴正なる美學の規矩を應用して詩歌小說の批評を試る者漸く多く、從て作家の間に思索的傾向を生じたり。是に於てか戰勝後の文壇は著しく活氣を呈し、二十八年より二十九年に亙る斯界の盛觀は、前期二十二年より二十三年に亙る其れにも增して花々しかりき。

今や筆を新にして戰後文學の盛況を詳說せんとするに方り、前期末葉の衰へたる文壇を承けし戰爭當時の文學を一瞥するの要を見る　所謂戰時の文學は此の兩期の推移する中間に在ればなり。夫れ戰爭の文學に及ぼす直接影響は、由來悲觀的の者なり。されば二十四五年頃より漸次衰へ來りし創作界は、茲に至りて其の衰を極め、小說界に在りては、紅葉の『隣の女』

『冷熱』、露伴の『有福詩人』、浪六の『安田作兵衞』、樗牛の『瀧口入道』、脚本に在りては櫻痴の『日蓮記』等の外、見るに足るべき者殆ど無かりき。之に反して戰爭を題目とせる新體詩小說脚本、及び戰記畫報等踵を接して起り、小說には鏡花、天外、水蔭、篁村、松葉、南翠を始め、弦齋、湖處子、澁柿、櫻痴等の諸作、脚本には松葉の『昇旭朝鮮太平記』等、新體詩には外山丶山の『我海軍』『旅順口のヒロー可兒大尉』、殘花の『靈鷹高千穗』を始め、佐々木信綱、湖處子、半月等の諸作、數へ來れば枚擧に暇あらず。然れども是等の文學は果して戰時の文學として誇るに足る者なりしか。あらず。當時の戰爭文學は悉く一場の際物に過ぎざりき。戰爭熱の昂上する所、欝結して詩歌小說となりたる者なれば、描寫諷詠する所、天眞流露、往々至情の聲をなす。然れども戰爭文學は固と其の性質に於て優秀なる文學たり難き要素を具ふ。戰爭文學は歲時と方處とに狹隘なる制限を有する特殊差別の文學にして、彼の古今東西に通じて誤らず悖らざる平等普遍の文學に非ず。一時の好尙に投ずるのみにして、長く其の價値を保つこと難し。況んや二十七八年の戰爭文學の如き、强ひて時好に迎合せんとする膚淺沒趣味の者むしろ多きを占めたるに於てをや。評壇之に命ずるに際物の名を以てしたるは極めて恰當の稱呼なりき。

然れども斯くの如き大戰爭の思想界に及ぼす影響を考察すれば、國民の精神的活動の一時に雲蒸し來るに伴ひ、文學界の新旗幟亦動かんとするを看取すべし。卽ち思想界を通じて文學界に及ぼせる戰爭の間接影響は、其の直接影響の悲觀的なるに反し、甚だ樂觀的なり。戰後文壇の現象は、啻に特殊文學の繁榮のみに非ずして、普く諸般の文學の興隆なり。思ふに二十七年の沈衰は、落滅に近き其れに非ずして、將に大に起らんとする前の其れなりき。戰捷の報連りに至るや、膨脹的國民、世界の日本、東洋の經綸、淸韓の輔導等の言辭は、天啓の如く國民の胸裡に閃き、二十年この方蓄積し來りし潛勢一時に勃發して、或は繪畫協會を組織せる新進畫家の出現となり、白馬會を開ける洋畫新派の運動となり、或は彫刻鑄金の術、陶磁染織の技の進步となり、或は洋樂の振興演奏會の成功となり、更に進ん

で文學の興隆となりぬ。小說は一轉進をなし、新體詩戲曲は全く面目を新にし、俳句と和歌とは維新以來の舊風を打破して明治の新風を起し、紅紫燦爛無前の盛觀を呈したりき。以下次を追うて其の詳細を述べん。

第二節　俳句の革新

新文學思潮の革新運動は今や本邦文壇の最短詩に及びぬ。新思潮の赴く所、あらゆる舊文學を革新せずんば止まず。既に小說を一新し、新體詩を起し、戲曲の面目を改め、今や進んで舊俳諧と舊和歌とを打破せんと試み初めぬ。就中俳壇の運動特に目覺しく、一時文學界を聳動したりき。

然れども斯界の革新は洵に後れたり。小說新體詩等は、十年以前既に革新の緒に就きしに係らず、俳諧に在りては今日始めて其の氣運に向へるなり。其の根本に於て相一致する二者の運動が、其の發現の年代を異にすること十年に及べるは何の故ぞや。之を解かんには、革新の原動力たる新文學思潮其の物の性質と俳諧其の物の特性とを檢せざるべからず。

思ふに新思潮の根本は明に泰西の文學思潮、否寧ろ泰西文學其の物に在り。革新の運動に與りし詩人文士は、一として泰西の文學を味はざるなく、其の創作せる文學は一として泰西文學玩味の餘に出でざるなし。故に本邦文學の中、先づ革新の鋭鋒にかけられたる者は、模範の泰西に存する者、卽ち我邦と泰西とに共存する種類なりき。逍遙四迷が小說に目を注げる、演劇改良の主張者が脚本に手を下せる、外山丶山等が新體詩を起して從來の和歌に代へんとしたる、何れか泰西の粉本に其の革新思想の萠芽を養はれしに非ざる。是を以て俳句の如き、泰西諸國に其の類例を見るべからざる一種の短詩は、範を取るべき者固より存せず、西洋審美學の尺度も之に適用すべき方法を解せられざりしかば、革新家の勢力範圍外として長く取殘され、或は短小取るに足らずとして一概に斥けられたり。

而已ならず、俳句其の物の性質にも亦彼等革新家の手を下すべからざる者あり。蓋し俳句は世界に於ける最小の詩形にして、其の含める意義と其の現す趣味とは全く特異の者なり。勿論用語は平易なり。吟咏の對象は卑

近なり。平民文學の名洵に空しからずと雖、滔々たる非文學的駄俳句を棄てて、眞に文學の稱を價すべき佳作を取れば、十七音の小篇よく深大の意義を湛へて、間々寸鐵人の詩想を穿つ者あり。且其の着想に於て、詩材の配合に於て、詩想表示の方法に於て、はた語格修辭に於て、他の諸種文學に決して見るべからざる一種の特徴あり。殊に其の全體に磅礴する趣味は俳句獨得の者にして、門外漢のたやすく窺ふべきに非ず。蕉門の寂しをり の如きは其の一例たるべく、此の傾向一歩を進むれば宗教的の色彩を帶び、俳道に遊ぶ者は此の趣味の門に入るによりて解脱の境に至るを得べし。此の點に於ては、泰西の如何なる文學も之に比ぶべき者あらず。又泰西の如何なる詩人評家も之が詩想と趣味とを正當に解する事難し。故に輓近本邦の短詩を味うて之を譯出する泰西詩文の士少からずと雖、手を俳句に下せる者に至りては失敗せざる者稀なり。或は句を解して意を誤り、或は意を解して趣を失ふ。思ふに俳句の趣味は恰も禪宗の如く又文人畫の如く、純東洋的にして、西洋美學の則を以て律すべからざる一種の東洋詩美なり。

曾に西人のみならず、本邦文藝の士と雖、或は鑑識を謬り或は謎語として之を斥く。されば明治二十年頃の革新家が遂に指を此の方面に染むるに至らざりしは、其の思想の泰西より得たりしよりすれば寧ろ當然なりといふべきか。

然らば舊俳の内部より之が革新を計る者あらざりしか。彼等宗匠商賣の門流にも亦二三新知識を有する者なきに非ずと雖、一度其の門に入るや、依然舊俳の渦中に陷り、遂には皆純然たる宗匠商賣の繼承者となりにき。故に當時の俳句は依然第一章に述べたる狀態に在り、永機幹雄等所謂宗匠商賣の輩、徒に正風の虚名を呼號して祖翁の精神蕩然と空しく、穿ちを求めて理窟に陷り、風情を求めて晦澁に流れ、要するに詩の何たるを知らず、詩境と非詩境の別を悟らず。相率ゐて非文學の畛域に赴けり。而も其の流を追うて俗俳を弄ぶ者、三都を始め諸國に滿ち、宗匠の門に集りて社中を成し、月に幾卷の集を作り、發句聯句に點を乞ひ、謝禮馳走をなし、人花景物を置き、圍棋雙六同樣なる消閑の遊藝となす者、所として存せざるな

し。俳諧の墮落殆ど極れり。『俳諧古選』總論に、「作者年々に多く風格日々に乖き、門戸競ひ開けて多岐羊を失す、所謂盛極つて衰兆す」といへるは、明和以前の俳壇を評せし言葉ながら、移して以て明治の舊俳を評すべし、

俳諧の革新は二十年頃の文學革新家に望むべからざると共に、舊俳の門にも亦望むべからず。斯界若し革新すべくんば、之を別種の新人物に望まざるべからず。果然革新の曉鐘は、夙に泰西の文學思潮に浴し、而も自國文學を研鑽して俳諧固有の趣味を解し、且つ舊俳以外に立ちて其の門に入らざりし新俳人によりて撞き出されたり。正岡子規、尾崎紅葉の徒、卽ち之が巨擘なり。

既に述べし如く、俳諧革新の標準は之を泰西に求むべからず、而も一代俳諧の墮落救ふべからざる者ありきとすれば、新俳人の取るべき道、唯標準を過去に求め、現代非文學的傾向を打破して之を文學の地位に進むるに在るのみ。されば當時舊俳の門を避けて新風を起さんとし、或は文學として價値ある俳諧を創めんとせる新作家は、期せずして古人の作に就き、其の批判の標準など、從來俗俳の徒が稱ふる傳說的の其れを取らず、自己の新見識を以て之が妍醜を分ち、新に妙句名吟を其の間に求めて、之を研究の材、創作の師となせり。或は談林を採り、或は蕉風を採り、或は蕪翁を取り、其の宗とする所にこそ差あれ、天保以後の俗俳を斥けて天明以前の古俳に活眼を開きしは蓋し一なり。

古俳復活の先鋒たる子規と紅葉とは、其の年齡を同くし、其の學校を同くし、共に大學國文科に入り、共に半途退學し、而も等しく俳諧に指を染めたり。且つ子規が其の著『獺祭書屋俳句帖抄』に言ふ所によれば、彼が俳事を始めたるは十八年の頃なるが如く、硯友社員の紅葉追憶談によれば、紅葉の俳諧も亦子規と同年『我樂多文庫』と共に始まりしが如く、而も二者共に、舊俳と何等門流の關係なくして直に古俳の趣致を得んとしたりき。然れども二人相互の間には何等の交通なくして、各獨立の發展をなし、其の俳に入るの動機と師宗とする作家とを異にす。『俳句帖抄』に依れば、子規が身を俳句に投ずるに至りしは全く『俳句分類』の編纂に因す。曰く『俳

句分類』の研究が、昔の連歌時代より始つて、貞德派の無趣味なる滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を見とめながら、尙五里霧中に迷うて居る有樣であつたが、春の日曠野などと漸く佳境に入り始めて、猿蓑を繙いた時には一句一句皆面白いやうに思はれた。これが俳句に於ける進歩の第一歩であつた」と。時に二十四年なり。知るべし、子規の俳に入りしは古俳句の歷史的研究に基し、其の宗とせし所は『猿蓑』を中心とする蕉風の一派に在るを。紅葉は卽ち之に異なり、其の俳句は素と文才の餘技にして、狂句川柳に近き諧謔の調を弄するに止りしが、旣にして小說に於ける西鶴崇拜は延いて俳諧に及び、遂には西鶴の屬する梅翁一派を宗として之に趣き、未だ『猿蓑』以下に及ばざりき。時正に二十三年なり。知るべし、紅葉の俳諧は西鶴模倣に始り、宗とする所は談林の一派に在るを。斯くて同時に起りし二作家、一は直ちに談林に復歸し、他は一歩進んで蕉風に適從しぬ。

爾來紅葉は硯友社一派を率ゐて紫吟社を結び、子規は所謂日本派を率ゐて新聞『日本』に據り、兩々歩武を進めて流風世に布けり。此の間紅葉は談林の奇調より漸く平淡の調に入り、子規は元祿より一進して天明の俳風を追ひ、以て二十八年の盛時に及べり。兩派の赴く所同じからずと雖、之を復興俳諧といふ大旆の下に一團と見るを得べくんば、吾等は江戸時代文學史に於ける梅翁以來蕉村に至る前後百年間の俳諧史が、さながら最近五六年の間に縮寫せられたるを覺ゆるなり。されば兩派時を同うして立てりと雖、之を歷史的發達の跡に見ば、紅葉派は卽ち俳諧復興の先驅にして、子規派は卽ち之が主力なりといふべし。

紅葉が俳諧は諧謔の奇調を以て始り、小波（漣山人）思案、眉山、水蔭等、紫吟社の一派、頻りに談林風又は虛栗集風の發句を吐きぬ。時恰も小說勃興の機運に際會し、硯友社の聲望江湖に布ける折なりしかば、其の俳風も亦青年文客を動かして一時の流行を作りぬ。舊派は驚いて之を排斥し、書生俳諧と冷罵しぬ。旣にして文學の進運、小說をして戲作の境を脫せしめ、紅葉が作風亦滑稽諧謔の戲作者風を擺脫するに及んで、其の俳諧もお

のづから楮餘の戯筆たる境界より出でて眞面目なる文學作品に入り、華麗より一轉して平淡に移り、想も調も漸く談林を離れぬ。時に二十七八年の交なり。然れども新に起せる俳調は、談林の其れの如く青年俳客を動かすに足らざりき。凝り性なる江戸氣質に、洒脫を求むる餘り、平淡益平淡となりて、遂に主觀的醇化の極に達し、從て其の趣味著しく個人的となりしかば、文壇多數に容れられて一世の流行をなすべき性質を失ひ了んぬ。蓋し紅葉が俳諧は決して明治文壇を飾るに足るべき者に非ず。之を創作せし事實は決して文學者としての紅葉の價値を增す所以に非ず。彼が『太陽』『秋の聲』等の雜誌、及び紀行文『煙霞療養』の中に收めたる吟什の如きは、決して小說の手を停めて之に從事すべき程の者に非ざるなり。

紅葉に次ぐ紫吟社中の作家を大江小波卽ち漣山人となす。紅葉門下にては鏡花風葉最優る。此の派作家の特徵を擧ぐれば、趣向に時間と事件とを含める小說的のものを喜び、多少複雜なる人事を取らんとする傾向ありといふべし。

俳壇革新の先驅たりし談林復興の一派は、普遍的傳播をなすに至らずして其の勢力を失ひしに際し、蕉風復活の子規一派、革新の主力として文壇に現れたり。正岡子規は伊豫松山の人、若うして東都に遊學し、高等中學に在る頃、恰も紅葉が同窓の人々と文社を結びしが如く、同鄕の內藤鳴雪、竹村黃塔、五百木瓢亭、新海非風、藤野古白等と文會を組み文集を編めり。二十四年大學國文科に在り、始めて俳句分類に志し、古來の俳諧を歷史的に研究して元祿の絕調に及び、茲に斯道に於ける活眼を開きて爾來一身を俳事に委ねたり。翌年の初「燈火十二ヶ月」「男女句合十二ヶ月」を始め、連りに一題十二ヶ月の俳句を作りしは卽ち此の頃の事にて、調未だ整はず、句尙幼しと雖、縱橫の俳才欝勃の活氣おのづから其の裡に現はる。同年又俳論を『日本』に投じ、遂に大學の業を抛つて日本新聞社に入り、文苑の一隅に俳欄を設けて同人の句を載するに至りしかば、新聲始めて斯壇に上りぬ。爾來東西に旅して句作に耽り、遂に『猿蓑』に私淑して俳句の寂を悟り、蕉翁が自然觀察に眼を開きて古池の吟を得たりし如く、客觀寫生の

一門を立てて、俳句の領域を擴張したりき。『はて知らずの記』『高尾紀行』等に出でたる者は卽ち當時の作にして、以て其の格調を窺ふべし。

斯かる格調は當代の俳壇に見るべからざりき。舊俳の俗調は勿論、談林復興の一派と雖、此の淸新に遭ひては一嚏を輸せざるを得ず。而して子規と步調を一にせる者には前記鳴雪瓢亭等あり、之に加はりし者には佐藤肋骨、藤井紫影、夏目漱石等あり、來り學べる者には高濱虛子、河東碧梧桐、佐藤紅綠等ありて、新俳風漸く起り、二十七年『小日本』を發兌して句を江湖に募るや、應募者連りに出で、勢力愈張る。加之一方にては、子規俳話俳論を公にして益此の運動を進めたり。されば今、新派の句品を詳論するに先ち、暫く子規が俳論の主旨を略述せん。

曩に硯友社の俳家は非文學の極に達せる當代俗俳を斥けて談林を取りしが、子規は談林の格調思想を以て尙非文學的なりとなし、『虛栗集』を以て尙幼稚なりとなし、『曠野』『猿蓑』に至りて始めて文學として推稱すべき俳諧を認めたり。彼の俳話は此の論を以て始まり、爾來論述する所少からず。

就中新俳宣傳の上に最力ありしは、卽ち二十六年に出でたる『芭蕉雜談』を以て始となす。こは實に明治の新思想を以て俳諧を論じたる嚆矢といふべく、芭蕉を藉り來りて宗匠者流の沒詩眼を指摘し、進んで新詩眼の標準を示したる者なり。曰く、芭蕉の人格は偉大なり。五十年の短生涯、一能く一代の崇拜を博して俳道の宗と仰がれ、恰も宗敎の祖師の如く後世に神視せられたり。然れども人格の偉大は直ちに文學者としての偉大を證する料とならず。其の俳諧を以て完全無缺超批評の靈物となしゝは、卽ち憐むべき舊俳者流の無識に出づと。乃ち斷案を下して曰く、彼が俳句一千餘首、過半は惡句駄句にして、古來靈句として傳へられたるが中にも、宗匠者流が金科玉條とせる「古池や」「道のべの」「枯枝に」等は、一として凡句惡句ならざるはなし。彼等が此等の句を尊ぶは、批評眼の明なるありてするに非ず、唯文學上何等の價値なき傳說によりて之を神視するのみと、例句を擧げて縱橫に批判し、以て二百年來の盲目的信仰を破りぬ。次に新に芭蕉の眞價を闡明せんとし、新審美見を以て集中の名句を精査し、芭蕉の芭蕉

たる所以を發揮せり。曰く、本邦詩歌に雄渾豪宕の致を缺けるや久し。此の間に介し、獨り豪壯の氣を藏め、雄渾の筆を揮ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を叙し、直ちに萬葉を追ひ實朝に及かんとせる者は卽ち芭蕉なり。試に「夏草」「最上川」「荒海」「大井川」「野分」等の諸吟を見るに、老健雄邁、殆ど空前絶後なり。而も彼れの技倆は之に止まらず、或は自然或は纖巧、或は華麗或は幽玄、其の他奇拔滑稽蘊雅、行く所として可ならざるなく、格調亦必しも一格に拘せず、凡百の姿態普く包容して滯るなし。芭蕉の偉大なる所は卽ち爰に存すと。是れ子規の芭蕉論の概略なり。

芭蕉論は當時に在りては實に空谷の跫音破天荒の論評なりき。其の直接の目的は千載誤られたる芭蕉の眞價を發揮するに在りきと雖、其の結果は舊俳折伏と新俳顯揚との二者となりて現れたり。勿論子規の說は多く獨斷に傾き、且つ連俳の第一句たる發句を評するに獨立せる一個の文學に對する標準を以てし、而も其の批評は彼自らの趣味見識に依據して疑はざる嫌ありと雖、彼れの趣味は明治の新趣味に養はれ、彼れの見識は明治の新思潮に養はれたる者なり。『芭蕉雜談』一篇、小なりと雖、俳壇革新の曉鐘として長へに耳傾けらるべし。此の點に於て之が俳史に於ける地位は『小說神髓』の小說史に於けるに似たり。子規が宗匠者流の神聖視せる幽玄主義寂栞主義を打破して寫生風を發揚せし態度は、卽ち逍遙が馬琴一流の勸懲主義を排斥して心理主義を皷吹せし態度なりき。『雜談』及び其の他の俳論を收めたる『獺祭書屋俳話』一部、永く明治文壇の珍たるべし。

子規の古俳研究は、步を進めて安永天明の中興俳傑に及び、『猿蓑』の高古を喜んで他を知らざりし彼は、是に於てか蕪村等豐麗の趣味を解するに至りぬ。二十七年より翌年に亙る彼が俳論と創作とは、卽ち此の間遷移の消息を表す者にして、作句に著しく妖艶雄健等積極的趣味を帶び來れり。當時蕪村の俳壇に於ける價値未だ世に知られず、畫人の名のみ獨り高うして、其の句集の如き、殆ど坊間に存せざりしが、子規等類題集中蕪村の句の散在せるを見て其の異彩に驚き、乃ち故紙堆裡に一寫本を搜索し得て始めて其の全豹を窺ひ、之を研究する益〻深うして之を評價する益〻高く、遂に

漢語を含める一種詰屈の異調はいたく『日本』の俳句に影響を與へたり。此の變遷は子規一人に止まらず、延いては普く彼の一派に及び、『小日本』の募集に應ずる者、『小日本』廢刊して『日本』の俳欄に投稿する者、亦悉く之に倣ひ、相率ゐて夜半亭の格調を追へり。此の時に方りて、斯派の俳風天下に布き、新思潮に養はれたる青年、競うて子規の麾下に趨りぬ。世に稱して日本派と言ふ。『日本』に據りて立てるを以てなり。

日本派俳句の內容は爾來、又多少の變遷をなしたりき。『俳句帖抄』に依れば、子規が蕪村の眞相を解して眞の蕪村調を創り出でしは、二十九年『新花摘』を讀めるよりなりきと。然り、子規及び日本派の俳人は、蕪村に得る所多かり。然れども、思想と聲調と、必しも蕪村の模倣に終らず。思想に明治の特色を帶び、聲調に長短拘る所なき異格を加ふ。此の傾向の極端に發達して宛然當時の風潮を代表する者を虛子碧梧桐の二人となす。二人は鄕貫を同うし、修學の徑路を同うし、俳句に入りて其の步武を一にし、各〻特色ある思想聲調を以て斯壇の急先鋒となりにき。思ふに碧梧桐は冷靜に事物を觀察し、虛子は熱情を以て事物に同感す。從て前者は客觀に傾き、後者は主觀に傾き、一は寫實的、他は理想的なり。碧梧桐は寫實に傾くを以て常に印象の明瞭ならんことを求む。十七字の短詩形の中に印象の明瞭なる詩想を盛らんとするが故に、其の描寫の對象は範圍極めて小なり。虛子は然らず。彼は理想に傾くを以て、或は主觀を詠じ或は複雜なる人事時間を含める事物を描く。故に彼の句は印象の明瞭碧梧桐に及ばずと雖、餘韻あり、時間の延長あり、間〻大景臺を描かんと試みぬ。

斯くの如きは子規が認めて以て古人以外の新調となし、蕪村に出でて一步を進めたりとなせる者なり。蓋し二人の爲せし所、悉く粉本を蕪村に求むべく、蕪村の企畫を紹ぎ來りて之を極度に發展せしめたるなりき。而して此の事實は、思想よりも意匠よりも、句法聲調に於て一層甚しきを見る。彼等は先づ五七五の格を破り、十九字二十一字の句を敢てし、漢語漢文の句法を用ひ、虛字を省きて實字を充てたり。且つ句切れに於て從來見るべからざる新工夫あり。極端に走るや、虛栗集にも求むべからざる奔放自在

の異調を取り、一時評壇の物議を招けり。斯かる詰屈の調破格の調は、動もすれば韻文の美を失うて散漫無味の語句とならんとす。要するに永續すべからざる一時の變象なり。

是等の點に於て鳴雪の俳風は虛碧二人と反對に立てり。鳴雪は弱冠の青年のみなる日本派に於ける唯一の老俳人にして、子規に取りては同鄕の先輩たり。彼は思想に於ては純客觀の事物にして餘韻の長きを喜び、形式に於ては五七五の正調を固守して虛碧の變調を斥く。彼は又用語は雅言を好みて虛碧の漢語を取らず、詩材は過去社會の事物を用ひ、總べて優美典麗若くは幽寂清雅の趣を愛す。

其の他當時日本派に重きをなしゝ者には、東京に佐藤紅綠石井露月あり。伊豫に村上霽月柳原極堂あり。熊本に夏目漱石あり。就中、紅綠は碧梧桐に似て、而も變化の才あり、露月は漢語調を好むこと虛碧に同じくして而も藻思多面なり。霽月夙に蕪村調の眞の得、極堂は巧緻清新の作をものし、漱石は斬新警拔の句を吐く。共に一方の雄なり。以下、下村牛伴福田把栗坂本四方太等數ふるに暇あらず。

此の時に方りて俳運大に起り、舊俳家角田竹冷は戸川殘花と共に秋聲會を起し（二十八年）紫吟社雪人派を包容して新俳の一部と舊俳の一角との大連合を企て、雜誌『俳諧秋の聲』を發刊して機關となし、帝國文學會の佐々醒雪大野洒竹等、筑波會を立てて（二十九年）俳句を『帝國文學』に掲げたり。筑波會の俳人は、論評の精透なるに比して作句未だ熟せず。秋聲會は數十の會員を擁し、新舊調和の標榜を掲げたれども、新派の粹と舊派の粹とを招致すること能はずして、唯准新派准舊派の多少趣味を同うする者のみを集むるに止まりぬ。何れにしても俳社俳人の增加夥しく、俳書俳誌の發刊亦盛に、新聞雜誌は競うて俳句を載せたり。當時都下新聞十六種の中、之を載せざる者六種に過ぎず、雜誌にては、苟も文學にたづさはる者、一として之を收錄せざるなし。

然れども日本派以外の俳人俳社は、其の活動常に受動的に出づ。彼等は日本派が一切の異趣味一切の異色を拒否して、只管自派擁護に勉むる反撥

的排他的態度に、其の競爭心を激發せられて是に至りしのみ。故に其の活動や概ね末頼もしからず。加ふるに彼等が俳句研究に於ける熱心は到底日本派に及ばず。彼等が俳句を作るは、閑人の閑事業の如く、日本派の之に於ける、純然たる文學者の態度を以てし、研鑽擁護至らざる所なし。是を以て二者が斯壇に於ける進歩は、頃刻にして著しく懸絶し、日本派獨り其の進歩を續けたり。三十年に入りては紫吟社振はず、雪人派潜み、秋聲會亦衰へて『秋の聲』も倒れたり。之に反して日本派の傳播、各地方に亙り、極堂松山に俳誌『ほとゝぎす』を發刊し、爾來俳會の起る者各地相次ぎ、根岸子規庵の會衆益〻多きを加へ、翌年遂に一派の選集『新俳句』を刊行し、次で『ほとゝぎす』を東京に移して虚子之に當るに至り、斯派の勢力牢として拔くべからざるに至りぬ。

斯かる間に日本派の俳句は、内容に於ても少からざる進歩をなし、二十九年に於ける變調漸く捨てられて平正の常調に復し、奇想を弄すること少くして着眼を平淡の境に求め、絢爛の趣致滅じて淡泊の情趣加はらんとす。

而して蕪村の研究益〻歩武を進め、子規は「俳人蕪村」を『日本』に連載して、縱横剖析、俳人としての蕪村を天下に紹介し、更に鳴雪等と『蕪村句集』を研鑽講評して、之を『ほとゝぎす』に連載したりき。是に於てか、斯派俳向の趣致傾向、格調句法、乃至文學上の地位、社會の批判、大體に一定の境に達し、俳壇の優者として一般に認めらるゝに至れり。故に吾人は『新俳句』の刊行『ほとゝぎす』の東遷を以て、俳句革新の事業の略完成せる時期と見做し、乃ち筆を三十一年以後に進むるを停め、顧みて明治俳句の高潮たる日本派の作を檢し、古人以外明治の特色の如何なる者を含めるかを究めんとす。

三十二年の初、子規『ほとゝぎす』に論じて曰く、文明が簡單より複雜に、粗大より精緻に、散漫より緊密に趣くと共に、美術も亦同一の傾向を取りて進み、俳句亦從つて此の迹を追ふ。多様と變化とは進歩の階段なり。明治俳句の進歩も亦此の中に攝せらる。明治俳句に古人以外の特色ありとすれば、其は卽ち古人より一層複雜精緻緊密なるに在り。元祿は天明に進

めり。天明は更に進みて明治となる。新興の特色は、常に純粹なる新分子を含む所に存せずして、概ね複雜精緻緊密の度を增す所に在り。碧梧桐の「强力の清水濁して去りにけり」は、蕪村の「二人して掬べば濁る清水かな」に比し、虛子の「繪踏して生殘りたる女かな」は、蕪村の「御手討の夫婦なりしを更衣」に比して一層時間的複雜を加へ、印象の明瞭ならんことを勉めたる碧梧桐等の句は、概ね描寫の精緻を見るべく、一句充實勉めて冗漫の嫌なからん事を期せる虛子等の句は、句調の緊密遠く古人の外に出でたり。若し夫れ明治俳句の新趣味に至りては、當時小說界にも現はれし如く、濃厚に非ず高遠に非ず、むしろ淡泊平易、元祿天明に發達するを得ざりし一種の新俳味なり。此の俳味や、實に三十年以後の發達に屬し、虛子の「宿借さぬ蠶の村や行き過ぎし」の句に見ゆる如く、蕪村の「牡丹ある寺行き過ぎし恨かな」と辭りしに似ず、又「宿借さぬ火影や雪の家續き」とて其の光景を述べしに異なり、唯前村後村の間、中途に在りて步むを言ふのみ。此の間の趣味は新俳人にして始めて味ふを得べし。

俳句革新の運動は一段落を告げぬ。乃ち顧みて其の主唱者たる子規に就て再說する所あらしめよ。子規旣に蕪村調に入りしより、其の作句絢爛の域を過ぎて平淡の境に入り、彼れの所謂新趣味は最早く彼れ其の人の句に現れたり。『俳句帖抄』に曰く、『新花摘』を讀むに、蕪村の頭を惱ましして修正したる句は概ね好句ならず。又自慢の惹を洩せる句も餘り好き句に非ず。最感服する句は多く一題七八句の中に在る極めて無造作に成りきと思はる句なり。蕪村の大才を以て尙且かくの如くなるを見て、俳句の如何なる者なるかを始めて悟りぬと。子規の句が平易淡泊の趣を得たりしは、蓋し之より後なりしならん。「大凧に近よる鳶もなかりけり」「夏川や中流にして顧る」「椎の木を切り倒しけり秋の空」「夕烏一羽後れてしぐれけり」「水仙の莟に星の露を孕む」などの如きは此の期に屬するものか。然れども子規の俳才は一格に拘泥するが如き小なる者に非ず。一派の俳人、虛碧を始め、一として一時の僻調に走らざるなき中に立ちて、總べての格調を容れて餘裕綽々、常に進步の先頭に立ちて一派を指導したるは卽ち子規なりき。彼

は多樣の變化を一身に集め、思想聲調行く所として可ならざるなし。二十六年『日本』に掲げし「古人調十二ヶ月」、及び二十九年同紙に出しゝ「俳句二十四體」の如き、子規自身も其の杜撰なるを言へりと雖、とにかく變化の才を見るべし。思ふに、多數を率ゐて一派の指導者たらん者は、常に此の種の才なかるべからず。而も其の蕪村に悟入するに方つてや、變化の裡おのづから子規獨得の俳風を生じ、遂に獨立して其の新趣味を宣傳するに至れり。而して彼の俳才は啻に俳句に止まらず、聯句にも現はれ、夙く二十五年以來時々試みし者少からず。然れども是れ固と彼れの餘技、深く究むるの要なし。

子規は又小說に指を染め、夙に「月の都」を草して『小日本』に掲げ、三十年又新小說に「花枕」を出し、又新體詩を試み、二十九年以來『日本人』『ほとゝぎす』等に載せたり。然れども是亦楮餘のすさび、鬱勃たる詩想の十七字詩の中に收むべからざる者あるに方りて是等の長詩を試みしに過ぎず。唯短歌に至りては、三十一年『日本』紙上之が革新に着手せし者にて、子規に取りて甚だ眞面目の事業なれば、重ねて後節に說くべし。

文學者としての子規はかくの如く多方面なり。而も其の事業の最赫灼たるは、言ふまでもなく俳句復興の一事に在り。彼は俳句を墮落の深淵に救うて文學の境域に引き上げたり。詩歌の何たるを解せざる非文學者の輩に弄ばれし俳句をして、學識ある文學者、趣味卓越なる詩人の手に移らしめたり。此の點に於て、彼の事業は頗る小說界に於ける逍遙紅葉等の事業に似たり。若し古今俳史の上に其の儔を求むべくんば蓋し蕪村か。蕪翁後百年にして其の遺業を起しゝ者は蕪村にて、蕪村以後百年にして俳句を暗黑の中に救ひし者は卽ち子規なり。然れども一派の俳人を率ゐ、一流の俳風を以て世を動かしゝを以てすれば、孤獨なる蕪村の如きに比すべきに非ず。して、むしろ蕪翁其の人に比すべし。其の俳才の大なる其の俳徒の普遍なる、はた多數の子弟をして各其の才を盡さしめたる、略其の面目を寫せり。加ふるに子規が梅室蒼虬等俗俳の勢力を排斥して審美眼を發句の上に開きしは、頗る芭蕉が貞門檀林の勢力を打破して自然美の上に活眼を開きしに

相似たり。然れども是は俳史上の位置、俳人としての彼等を比較せしのみ。其の性格に於ては必しも相同じからず。子規は熱烈の人なり。俳壇の革新に着手して以來、之を畢生の事業として身命を獻じて悔いず。斯壇擁護の爲には如何なる外敵も排擊殲滅せずんば已まず。常に陣頭に立ちて一派の爲に長城となれり。師弟の道全く其の面目を改めたる今日に方り、文壇稀有の佳話を殘せる者、主として彼れの性格に出づ。子規の句集は『俳句帖抄』と題し、三十五年に至りて上卷を公にせり。二十五年より二十九年までの作を收む。續卷は之を公にするに至らずして止みにき。

第三節　和歌の革新

歌壇革新の思潮は夙く國學復興の際に萌し、國文教育家落合直文等の運動に其の泉源を有す。彼は二十五年淺香社を結びて文章和歌及新體詩を研究し、門下教を受くる者少からざりしが、特に盛なるは卽ち和歌の研究なりき。然れども彼れの歌は固と御歌所一派の辱弱に反抗し、桂園末流の卑俗を排斥して起りし者にて、卽ち純乎たる復古なり。勿論彼れの創作は必しも議論に伴はず、歌格常に古調たるを得ざりきと雖、とにかく純日本想を以て古歌の粹を明治聖代に發揮せんと志したりき。彼は猶紅葉の元祿小說に於けるが如く、子規の元祿俳句に於けるが如く、近代俗惡の文學を捨てて直ちに古文學の靈泉に汲まんとする者、門流を率ゐて能く後進を導きたるも亦二家と蹟を同うす。而も復興の文學は常に多少の新采あり。淺香社の和歌亦然らざるべからず。假令社主萩の家は泰西詩歌の思想に緣遠き人なりきとするも、新思潮の文學界に於ける勢力至らぬ隈もなく、四圍の物象皆新思想によりて進める今日に方り、鷗外等『柵草紙』の徒と交り、紅葉子規等の目覺しき革新運動を目にするに及んでは、其の和歌に對する態度も亦漸く變せざるべからず。彼れが門下を敎ふるに、和歌は時代の進運に伴ふべしとの主義を以てするに至りしは、卽ち此の時に在り。

當時歌壇を支配せる潮流は言ふまでもなく舊派の其れなりき。俳諧の宗匠が天下に遍きが如く、歌の師匠も亦津々浦々到る所に存し、詩歌の何た

るを知らず、詩美の何たるを解せず、漫然「心に思ふ事を見る物聞く物につけて言ひ出せる」者卽ち和歌なりと考ふる固陋無識の徒が、恣りに子弟を取り詠草を集め、賻を收めて點を加へ、其の俗了せる事、點取俳諧者流と擇ぶ所なかりき。是を以て所謂歌人なる者、多士濟々、其の多きに堪へず。所有國學者は卽ち歌人なり。所有公卿は悉く歌人なり。廟堂の有司亦多く歌人なり。而して皆流を競ひ派を立て、或は會を組み社を結び、各〻類を以て集り、門を開きて風を布く。當時斯界の中心たる御歌所には、高崎正風、小出粲、植松有經、大口鯛二等あり。其の他鈴木重嶺、阪正臣、黑川眞頼、稅所敦于、本居豐穎等、或は某園或は何廼舍と稱する者頗る多かりき。然れども彼等は、其の流派の如何に係らず、畢竟桂園の末輩に非ざれば則ち四大人の糟粕に止り、想形共に陳套相襲ひ、千年の舊型を墨守して詩歌に對する根本的誤謬を悟らず、歌詞を制し、嫌忌を定め、範裡に籠居して井蛙の見を固持したりき。獨り海上胤平の和歌は、一種の異彩を此の間に放ち、其の萬葉模倣の作、頗る豪健の趣を帶べり。然れども彼れの議論と製作とは、萬葉集の外に一歩も出づる能はず、唯賀茂眞淵が百年以前になしたりし驚歎を再びせしに過ぎずして、其の製作の如きも固より橘曙覽に比ぶべくもあらざりき。特に詩歌に對する根本思想に至りては、依然傳來の誤謬を繼承し、從つて當代歌壇に何等の事蹟を殘さざりき。

新思潮を餘所に見て、歌界の狀態が今日に至るまで其の舊樣を存する事、斯くの如くなりしは何故ぞ。和歌革新の獨り大に後れたりしは何故ぞ。思ふに和歌は三千年の傳統を有する本邦最古の文學にして、前代以來小說以下の平民文學に對し、貴族文學堂上文學として立ち、因襲の久しき。革新を以て破壞と考ふる傾あり、新思潮の奔流も之に加ふるに由なかりき。否之に加ふる能はざりしに非ず、革新の手を下す價値なしとて之を拋棄せるなりき。蓋し新體詩の創始者は、其の精神に於ては卽ち和歌の革新家なり。彼等は泰西詩歌の精神を本邦詩歌に加へんとするに方り、和歌なる者は到底複雜清新なる新詩想を容るゝ能はずとなし、乃ち去つて新體詩を起しゝなり。故に斯道の先覺は夙く十年前に存し、詩歌に對する觀念の更新も亦

既に成就せられたりき。然れども之を和歌其の物に及ぼし、短詩としての發達を促しゝ者未だ之あらず。即ち和歌は長く新思潮に見捨てられたるなりき。されば御歌所一派の歌は依然斯壇の牛耳を取り、『國光』『明治會叢誌』等、保守主義の雜誌に其の吟咏を載せ、堂上的の和歌尙跋扈せり。淺香社は實に斯かる時に現はれたるなり。

淺香社は歌壇革新の先驅をなせり。萩の家の歌を敎ふるや、舊型に依らず、舊樣を追はず、歌題の如きも新を取り陳を避け、其の新しきも唯大體の着想の方向を示すのみにて、極めて自由なる態度を取り、學弟をして各、其の才を盡さしむ。『萩の家遺稿』收むる所の日課歌題を見るに、從來の月並の題と其の趣を異にし、着眼斬新にして題目奇拔、材料豐富にして吟咏の對境甚しく廣濶となれり。是を以て創作も亦おのづから舊套を脫して、淸新掬すべき者少からず。而も彼れの和歌に對する愛著は無限にして、其の熱心や殆ど獻身的なり。「我が歌をあはれと思ふ人ひとり見出でゝ後に死なんとぞ思ふ」と述べしは、實に彼が素懷なるべし。彼は猶紅葉子規等の如く、自己の文學を以て其の生命となしたりしなり。彼が斯界革新の先驅となり、其の事業を果すべき幾多靑年の歌人を養成し得たる、洵に故なきに非ず。然れども萩の家の思想は其の根柢に固有思想の牢乎たる者あり。飽くまで新思想を容れて着想聲調に大膽なる更新を加ふるに至らざりき。かの「夢に見し女神の跡を慕ひ來てけさ我見たり白百合の花」の如き作は、蓋し、彼れの本領に非ず。萩の家の歌は、猶其の新體詩「孝女白菊歌」等の、動もすれば七五調の長歌たらんとする形跡あるが如く、全然舊樣を擺脫する能はざりき。彼はげに最妥當なる意義に於て過渡の歌人と稱すべく、革新の事業は渾て之を其の門下に附囑しけり。

今や文運興隆の機熟し、各種の文學競うて其の面目を改め、俳諧革新の事業も亦着々成功しぬ。和歌界のみ豈獨り舊態を存すべけんや。曩に和歌を以て改良するに足らずとなし、之を捨てて新體詩を創めたりしも、詩人の胸裡に存する詩想は必しも長大の詩形を俟つて發露すべき者と限らず。或は三十一字詩に表はすを以て最適切なりとし、或は十七字詩に表はすを

以て最妥當なりとなす。詩想は無限なり。豈和歌に盛るべき恰好の者無からんや。況や新詩想の興起、詩材の增加、詩語の擴張特に著しき今日に於てをや。是を以て新體詩起るも和歌は爲に倒るべきに非ず、兩々相並びて別個の發達をなすべき充分の餘地あるなり。

淺香社中の青年歌人は、萩の家の鼓吹の下に斯壇に新風を導かんと努力しぬ。與謝野鐵幹、金子薫園の徒、卽ち是なり。就中鐵幹、年少の鋭氣を以て新調を鼓し、革新の先頭に立ちて健鬪最力めたり。

鐵幹は京都の人、萩の家に學びて和歌新體詩に一新調を出し、覇氣旺にして常に豪健の風を喜べり。二十八年征清の役中、韓國京城に在り。病んで重きや、歌うて曰く、「韓にしていかでか死なん我死なばをのこの歌ぞ復すたれなむ」と。以て從來の孱弱なる和歌に反抗し、男子の歌を以て任せる彼が意氣を想見すべし。二十九年長短各種の詩歌を集めて『東西南北』を出し、續いて三十年『天地玄黃』を刊行するや、一種の特調を帶べる短歌及び新體詩は、其の想形の粗放稚拙にして圓熟渾成に至らざるに係らず、いたく文壇の注意を惹き、佐々木信綱と共に最有望なる青年歌人と目せられたり。彼れの新體詩は別に之を論ずべし。今特に短歌に就て之を見るに、萩の家の詩風を承けて、溫藉の情、清新の致、掬すべき者亦なきに非ざれども、是等はむしろ其の特調に非ず。所謂鐵幹調は、年少の客氣、世を憤り俗を恨める慷慨の歌、若くは、太刀、虎、鷲等の語を連ねて豪快の情景を叙べし作に於て最善く現る。蓋し鐵幹、古今集以後の纖弱と優美とを嫌ひ、萬葉集の雄壯と剛健とを喜び、乃ち粗豪の一風を立てて斯壇の沈滯を破り、從來新體詩に壓倒せられて評論界の問題とならざりし和歌をして、復好箇研究の對境たらしむるに至れり、然れども彼れの萬葉を學べるは、雅樸高古の詩想、莊重なる五七の詩形に非ずして、單に其の雄壯の姿致のみ。唯夫れ雄壯ならんとす。故に往々衒氣あり、强ひて粗豪の語を連ねて佚宕を粧ひ、眞情の流露却て見るべからず。之を要するに、鐵幹の和歌は、革新の急先鋒たりし歷史的價値に於て重ずべき者にして、之に取るべき所は、卽ち才氣縱橫、大膽なる詩風を試みたる點に存するのみ。

鐵幹と流派を異にし、詩風を異にしながら、同時に新作家として評壇の注意を惹きし青年歌人を竹柏園主人佐々木信綱となす。二十一年大學古典科を出で、爾來竹柏會を立てて和歌を門生に敎へ、『日本歌學全書』『歌の栞』等、斯道に關する編纂出版をなして其の弘布に益する事少からず。二十九年其の詠草を『めざまし草』に出すや、漸く世の注目を惹き、聲調の流麗なるを以て稱せられたりき。彼れの和歌は鐵幹の覇氣なき代りに其の俗氣なく、鐵幹の衒氣なき代りに其の意氣なし。唯かの舊時代の發達に屬する和歌を以て新時代の事物に調和せんとし、多少清新の趣致を得んと勉むるに至つては、亦新歌人たるを失はず。試みに『めざまし草』所載の歌を檢するに、

星一つみ空に高くきらめきて空しき谷に木枯の吹く。

鐘の聲さ霧に消えて天地に到りわたれる夜の色かな。

藥賣る家の門べをたゝく子が髮ふきみだすさ夜嵐かな。

等、從來歌人に比して想像の範圍廣く、彼等に見るべからざる清新の趣致あり。其の調の流麗暢達なるは、十年來專門の宗匠としての竹柏園が獨得の壇場にして、鐵幹の遠く及ばざる所なり。然れども、竹柏園は用語に於て保守的の主張を有し、新事物新思想を詠ずるに、總べて雅語を以てせんとするが故に、弊や流れて牽强となり、往々笑ふべき滑稽に陷る。思ふに彼れの長所は宛轉たる聲調と千篇立ろに成る達腕とに在り。而も短所亦茲に存し、動もすれば平弱無力の凡調を出し、詩趣索然として空しきあり。歌壇革新に對する態度も、頗る穩和にして、新派と言はんよりむしろ新舊調和派と稱するの妥當なるを見る。從て新文學界に於ける勢力も、亦おのづから鐵幹等の下に在るを免れず。

此の時に方りて、正岡子規は俳句革新の餘勢を振うて和歌革新に着手しぬ。三十一年の初『日本』に掲げし「歌人に與ふる書」は、卽ち子規が斯壇に討つて出でたる名乘の聲にして、續いて「百中十首」の創作を同紙に掲げ、爾來竹の里人の名を以て一種の新調を詠み出でぬ。

緣先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺の綠手水鉢を掩ふ。

病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりて尙み病て臥す。
立並ぶ榛も槻も若葉して日の照る朝を四十雀なく。

の如きは、當時の歌壇に見るべからざる異彩を帶べり。而も其の異彩は鐵幹信綱と趣を異にし、調子歌題の上よりもむしろ一首に磅礴する趣味の上に存す。思ふに子規の和歌を讀みて先づ感ずるは、俳趣の掩ふべからざるるに在り。本邦の文壇短歌ありてより、歷代の歌人によりて養成せられたる和歌の趣味は、遂に特立して一種固有の者となり、漸々發展して茲に文壇一方の趣味を代表するに至れり。竹の里人の歌歌は、卽ち之に加味するに俳句の趣味を以てせるなり。此の特色や、漢語を含めるを指して言ふに非ず。漢語は鐵幹も之を用ひたりき。又間々萬葉の古調を交ふるを言ふに非ず。萬葉調は海上胤平も之を用ひたりき。用語句法の末に在らずして根本の趣味に於て存するなり。げに此の事は俳人にして和歌にたづさはらん者の、必ず然るべき傾向にして、芭蕉蕪村の徒が指を之に染めたりしならんには、夙に斯の風體を得たりしならん。而も前人之を成さず、竹の里人乃ち本邦文壇に於ける和歌趣味と俳句趣味との調和者として之が創始の譽を負うたり。

俳趣味はげに竹の里人の異彩なり。而も尙第二の特色として、調のしまりて一點のたるみなきを擧ぐべし。彼は從來の和歌の一大通弊として調のたるめるを指摘し、斯かる歌を以て調といふのはぬ歌となし、語の配置、句の連續に於て冗漫弛廢の病なくして、飽くまで緊張せるを尙ぶ。竹の里人は此の點より古來の和歌を通觀して萬葉集の卓逸せるを喜び、其の以後に於ては源實朝を推し、田安宗武を擧げ、井手曙覽を稱し、更に備前の歌人平賀元義を暗黑の中に救へり。斯くして彼は從來歌人の纖弱にして弛廢せる聲調、陳腐蹈襲の思想を排斥し、溯つて萬葉集の剛健にして緊張せる聲調を取り、自然及び人事に對する新しき著眼より得來れる詩想、若くは彼れの既に得たる俳想より形作れる新歌想を詠み出でたりき。

三十二年以後の作歌も、大體に於て前條所說に異ならずと雖、唯萬葉崇拜の度の益〻加はり、啻に剛健の趣緊張の調のみならず。延いて句法用語を

模し、更に長歌旋頭歌等の形體を模し、進んで思想をも學ばんとするに至れり。然れども之既に賀茂眞淵等に見たりし如く、萬葉崇拜の極、皮相に走りし一時の變象にして、直ちに以て竹の里人の本領となし難し。其の歌想漸く神に入れる頃の作『曇』五首、『雨中庭前の松を見て作る』十首、『風』八首、『星』九首等の如き、重厚勁健の古萬葉調を以て明治の新詩想を詠じ、詩味津々として清新の氣盡きざる者あり。且つ一題數首乃至數十首をもの して各其の趣を得たるは、固と俳句にて養ひし手腕なるべしと雖、亦彼れの詩想の富瞻なるを見るに足る。唯事彼れが晩年に屬し、一臥起たざりし病牀の執筆なるが故に、其の詩材題目概ね病室乃至庭前の小範圍に限られ、動もすれば同一の歌想を繰り返さんとする嫌あるを恨とす。

竹の里人が『日本』紙上歌論創作を載せしより、麾下に集まりし者に、香取秀眞、伊藤左千夫、長塚節等あり。三十二年春根岸短歌會を起し、作歌は常に『日本』『ほとゝぎす』『心の花』等に載せ、歌論亦之に伴ひ、頻りに革新の說を唱へたり。

竹の里人の期する所は、蓋し短歌革新の事業を成就するに在りしならん。然れども其の運動の文壇に及ぼしゝ影響は、到底俳句に於けるが如く雄大なる能はざりき。思ふに是れ、當時和歌界の革新は、既に萩の家竹柏園の徒によりて其の幾分をなされ、加ふるに革新の大勢力たるべき青年好文の徒は、多少貴族的女流的なる和歌よりも、平民的男子的なる俳句に趣く傾向ありしを以てなるべし。況んや竹の里人の病漸く篤く、意氣復當年の如くならず、論壇筆を振ふ事既に絕えたるをや。

三十二年、鐵幹新詩社を結びて翌年雜誌『明星』を發刊し、和歌を主として新體詩俳句其の他一般文學を收錄し、以て自家一流の和歌を弘布するに勉め、遂に所謂明星派の一團を形作りぬ。次に根岸派は、又三十六年に機關雜誌『馬酔木』を發刊して斯派宣傳に勉めしが、其の青年の間に於ける勢力は、遂に『明星』に及ばざりき。

茲に暫く和歌に關する筆を擱き、飜つて上述の運動が文壇に殘せる結果を列擧すれば、從來單に志を述ぶる要具となし、又は風を移し俗を推す方

便となされし和歌を、一箇の美術品として取扱ふに至りし事、其の一なり。花鳥風月に限られし歌想著しく擴張せられ、蘆庵景樹等が夢想だも及ばざりし無數の題材新に入り來りし事、其の二なり。古來歌人の最得意となし枕詞掛詞及び緣語の類、漸く其の姿を隱し、勉めて虛字を去りて實字を充つる傾向の生じたる事、其の三なり。古來制定せられたる歌詞の小範圍を脫して、新思想を述ぶるに足るべき總ての言語を用ふるに至りし事、其の四なり。從來の和歌を評する者、概ね作者の感想の仔細に表現せられたるか否かに標準を置きしに反し、藝術の本義よりして該作物が讀者に與ふる詩的效果に就て論ずるに至りし事、其の五なり。其の他新現象一にして足らずと雖、とにかく、一時新文學界に顧られざりし和歌が、再び新文人の手に保育せらるゝに至りしは、複雜なる詩想中、又此の可憐なる小詩形に寓すべき恰當の者存するが故なるべし。然れども、革新の事業は今尙試驗の際に屬し、當時の斯壇未だ明治の特調を見る能はざりき。

第六章　文學の轉進

第一節　小說　其の一

一　觀念小說

前期末葉に方り甚しく沈衰せる小說界は、文運興隆の機に乘じ、俄然として頭角を揚げぬ。累年蓄積し來りし潛勢力、爰に勃發して桃李一時に花咲き、而も前期の小說に比して一段の進步をなしぬ。小說專門の雜誌『文藝倶樂部』は二十八年新に發刊せられ、創刊の『太陽』亦小說に盡し、『國民の友』の小說に對する推挽も從前に劣らず、其の他諸新聞殊に『讀賣』『國會』『朝日』等、競うて小說を載せ、單行本の新刊益多きを加へたり。飜つて作家を見れば、紅葉露伴等前期の大家復び振ひ、柳浪眉山等、未だ大名をなさざりし者著しく發達し、加ふるに鏡花一葉宙外天外等、新進の作家踵を接して起り、各特有の詩想を鼓して斯壇の一方に雄視せり。二十九

年に入りては、此の傾向益甚しく、專門雜誌『新小說』新に發刊せられ、創作出づる者愈盛なりき。而して此の間最早く其の萠芽を露し、小說界大轉進の陣頭に立ちし者は、卽ち觀念小說の一派なりき。

曩に論ぜし如く、第二期に於ける淺薄なる寫實小說は長く文壇の聲譽を繫ぐ能はず、代つて起りし歷史小說は成功の域に至らずして衰へ、撥鬢小說は粗笨淺薄、在來の寫實小說にも過ぎたり。小說內容の進步は、二十五年以來全然停止せりと言ふべかりき。是に於てか意義內容の一層深刻なるを求むる傾向文壇に生じ、之に應ずる新進作家相次いで寫實小說の部內に出でぬ。彼等の作たるや、之を在來の寫實小說に較ぶれば、結構單純にして篇章亦短小なりと雖、其の心理描寫の精緻なる、其の性格表出の刻劃なるに至つては、遙に從來の者に勝り、而も概ね一定の觀念若しくは傾向の上に立ち、人物の性格心理の發展、主として之に出づ。故に是等の人物の性格及び心理は、從來の小說に於けるよりも更に複雜、更に微妙にして、其の發展の如きも因果關係一層確然たり。作家が斯かる描寫を試みんとするや、特殊の人物を取り、特殊の舞臺を取り、以て特殊の思想觀念を寓し、特殊の心理現象を描き、所謂寫實以外に或物を捉へんとせり。事二十八年に起り、世に稱して觀念小說といふ。眉山の『裏表』鏡花の『夜行巡査』『外科室』等の如きは、卽ち此の種の小說の代表的製作なり。

川上眉山は硯友社中の才筆と稱へられしも、前期に於て未だ名をなす能はざりしが、二十八年に至りて、從來の纖麗妖冶の筆に加ふるに一種深刻の觀察着想を以てし、いたく在來の寫實と趣を異にし初めぬ。『太陽』に出せる「書記官」は、實に此の傾向の萠芽にして、『國民の友』附錄に揭げたる「うらおもて」は卽ち之が精華なり。「書記官」は、純潔の處女が父の名利の爲に一身の貞操を犧牲に供する一種悲慘なる社會現象に着想せし者にして、世間往々存する、名利の繫累を利用して處女の純潔を弄ぶ惡むべき行爲を提げ來り、之を描くに一箇淸新なる具象的作品の形を以てせるなり。次に「うらおもて」は、同じく社會の罪惡に着想し、德行家として知られし者が冷酷なる世人に其の慈善心を醜弄せられ、遂に財產を蕩盡し、はて

は社會に突き放さるゝに至りて始めて社會の無情なるに驚き、熟々世相を觀察して我利私慾の世となし、遂に自らも盗賊となれる順序を描き、以て社會を痛罵せるなり。斯くの如き趣向は從來の小說に見るべからざりき。大詩才にして筆を此の方面に向け、複雜なる心理變化の割析を試みる事あらば、沈痛深刻人の肺腑を穿つべき異彩出色の作を得べし。然れども作者、理想を表すに專にして事件甚だ自然に遠く、社會觀を體現するに急にして心理變化の順序甚だ分明ならず。僅かに其の一端に觸れしのみにて、未だ優秀なる藝術となし得ざりしを憾とす。唯小說題材を一新せし功績小ならずといふべし。

斯くして眉山は觀念小說作家の一代表者となりぬ。然れども此の作風を文壇に捲き起して之が陣頭に花々しく戰ひし者は、卽ち紅葉門下の新進作家泉鏡花なりき。眉山の如きはむしろ後れて此の風を學びしが如し。鏡花は二十六年紅葉の門に入り、夙に峻峭の筆を以て『讀賣』に異彩を放ちしが、二十八年春、先づ「夜行巡査」續いて「外科室」を『文藝倶樂部』に

掲ぐるに及び、彼れの名は俄然として評壇の論題となりにき。

帝都の夜を守る一巡査あり、職務に忠實なる事類なく、夜行巡査の職務を行ふに一點の懈怠なく、又一點の假借なく、宛然たる職務の權化なりき。然れども彼も亦木石の無情漢ならず。熱情を傾けたる一箇の愛婦を有せり。其の冷々氷の如くなるは、職務の觀念强烈にして凡百の私情暫く屏息するのみ。偶〻愛婦の父泥酔し、彼の女に扶けられて夜を歸り、彼を嘲罵誹譏して兩者の愛を割かんとす。巡査は默々として酔漢の後に從へり。忽然酔漢誤つて濠に陷りぬ。巡査は身を躍らして續いて濠に入りぬ。彼は人民保護の職掌を行はんが爲に、惡むべき戀の妨害者をも救はんとするなり。憫むべし、氷の如き濠水は此の職務の權化をして長へに逝かしめぬ。斯くの如きは「夜行巡査」の大旨なり。蓋し鏡花義務の觀念を寫さんと欲し、戀愛の私情に對する此の觀念の勝利を描き、以て人生悲劇的の一方面を深刻に體現せんとす。故に巡査が職務に忠なればなるだけ、其の情熱の高ければ高きだけ、戀愛の妨害の大なれば大なるだけ、作者の成功は其れだけ光

榮ある者となりぬべし。此の篇固より渾成の名什に非ざれども、其の題材着想、全然創始に出で、筆致亦幽峭にして詩趣に富み、洵に小說一轉の機を示せりといふべし。「外科室」の醫學士と伯爵婦人との間、亦這般斷腸悲慘の趣を盡し、遂にわりなき戀に一身を獻ずるに至る所、更に人生の恨事を體現せり。

二小說出でて鏡花の名文壇に普く、奇峭の想、俊爽の氣、沈痛の筆、相俟つて人生の或物を描出せんとする彼れの作は、敎養ある讀書社會に多大の歡迎を受けたり。同年の「鐘聲夜半錄」、二十九年の「琵琶傳」「化銀杏」「海城發電」の如きは、皆此の系統を引ける者、構想益〻慘憺、筆法益〻瑰奇、「化銀杏」に至りて特に此の傾向を示せり。然れども物一度新傾向を帶ぶるや、往々極端に走り、從て其の弊に陷る。鏡花亦此の弊竇を承け、着想奇に過ぎて怪に流れ、筆力玄に過ぎて趣を失ひ、其の極不自然背人情の域に落ち、人物の如き、往々常識を超え常情を離れたる奇癖の怪物となる。故に其の事の悲慘なる、讀者の胸を刳る者あるに係らず、惻々として人を動かす事なく、特に主人公の悲劇的沒落以外、屢〻殺人の慘事を仕組みたれば、中には却て不快の感を起す事なきにあらず。

吾人は鏡花眉山の二人を以て小說界に於ける新傾向の唱首となせり。爾來或は社會の罪を寫さんとし、或は人生の目的としての戀を描かんとし、其の他の倫理上心理上の種々の觀念或は概念を捉へ來りて之を作品の上に體現せんと試みたる小說續々出で來れり。批評家は概ね之を觀念小說と呼べども、尙時には概念小說と稱し、或は其の傾向より名けて深刻小說悲慘小說とも言ひ、又は心理描寫を主とする點よりして漠然心理小說とも言へり。然れども心理小說は觀念小說深刻小說などよりも範圍廣く、所謂觀念小說は小說全體の心理的傾向の一部なり。一部先づ起りて種々の部類之に繼ぎ、遂に各種の心理小說競ひ起るに至る。此の現象は獨り小說界に存するのみならず、文藝界の全部を通じて現はれたり。國民の自覺、學術の進歩と共に、從來比較的淺薄なりし思想界の比較的深厚となるや、文藝界に於ても一種深刻幽玄の新思潮起り、世態人情の幾微を捉へて直ちに人の靈

界に觸れんとす。特に小説に於ては、或は作者自ら泰西小説に接し、或は小説の理想觀念などを論せる批評家の論議に鑑み、從來の小説の輕浮單調に對して漸く不滿足を感せるが上に、社會生活の現狀は人をして人生の嚴肅なる方面を經驗せしめたりしかば、愈益此の傾向を助長せるなり。

觀念小説に次いで現れたるは、卽ち廣津柳浪の深刻小説悲慘小説なり。彼は前期に在りて、既に人生の幾微を寫すに長じたりしが、今や新興の氣運に乘じ、二十八年「黑蜥蜴」「變目傳」を出し、其の他翌年に亙りて「白百合」「龜さん」等を出し、愈其の本領を發揮し來れり。就中「黑蜥蜴」は、隻眼痘面の醜婦にして而も貞實至孝なる大工の嫁が、貞操の爲に無慈悲酒亂の舅を黑蜥蜴にて毒殺し、己亦自殺すといふ悲慘なる脚色、「變目傳」は、侏儒變目の醜貌に生れて而も心尋常の情を解する心身不調和の男が、性格境遇の否なるに激成せられて遂に殺人の大罪を犯すに至る凄慘の事象を描き、其の他概ね、之に類せる病的人物の憫むべき忌むへき運命を叙せり。此等の作出でて柳浪の名大に揚り、鏡花等と共に新派と稱せられたり。

柳浪は概ね筆を人生の暗黑面に着け、性格と肉體と境遇との關係より凄絶なる破綻を來すに至る徑路をば、極めて痛切に寫し出さんとせり。其の主人公が常に肉體上精神上の不具者、若くは强度の神經質なるが如き、はた其の大破綻の結末が概ね殺人自殺等鮮血を以て染めなされしが如きは、卽ち此の目的を達せんが爲に外ならず。鏡花を以て之に比するに、彼に在りては觀念或は概念といふべき者全篇を支配するも、此に在りては必しも然らず、唯世相の悲慘なる一面を深刻に描き出さんとするを見るのみ。彼は又理想に馳せて超人間の不自然界に入ることありと雖、此は決して然らず、人生一部の寫實として特殊の場合に於ける心理自然の徑路を寫せり。而も人の靈界に觸れて其の消息を描き出でんとせるは、二者等しく新派の小説家たるを失はず。唯惜む、柳浪の小説往々殘酷に流れて不快の感を惹起するを。

觀念小説深刻小説一たび出でて文壇爲に活氣を生じ、讀書社會は其の新奇の色彩に眩して頻りに之を謳歌せり。然れども、少しく思慮ある批評家

は、潑剌たる新彩の裡に潜める幾多の缺點を見て屢〻之を難せり。蓋し是等小說の失とすべきは、主に、規模小にして觀察概ね主觀に偏し、從て不自然病的に陷ること多きに在り。是を以て一時の革命的現象として心理的傾向を小說界に殘しつゝも、漸次勢力を文壇に失へり。

吾人は叙述の順序として當時續々起りし心理小說の新進作家を擧げ、觀念小說悲慘小說以外如何なる發展をなしゝかを論ずべき場合に立向へり。されど上述三作家の作風も、亦之と同時に、多少の推移發展をなせるを以て、便宜上暫く他を差措いて三作家其の後の作を見ん。

眉山が「裏表」以後の作にありては、二十九年作「松風」翌年作「朧富士」と「絃聲」と、稍見るに足る。「松風」は詩人は狂に類すといふ思想を體現せる者と見るべく、「朧富士」は葛藤ある戀愛と悲慘なる運命とを叙して、女子心理狀態の一方面を描き、「絃聲」は人心の奥妙を寫すに夜半おのづから起る絃聲を以てせる幽玄の作なり。是等の作、聲譽固より前年の作に及ばずと雖、觀念小說の矯激なくして心理小說の自然的なる分子著しく加はり、作風の推移鮮少に非ず、唯其の筆力未だ眉山の名を高うするに足らざるを恨となす。

鏡花は怪奇に過ぐると人情に遠きとの故を以て、一時評壇の非難を受け、爲に二十九年の主たる作「一の卷」より「六の卷」に亙る長篇を『文藝倶樂部』に掲げし時も、苦心の作なるに係らず、世の視聽を惹くこと少かりき。然れども鏡花の鏡花たる所は、幽玄神祕の詩的風韻に在りて、寫實的筆力の精細に存せず。鬼才益〻幻怪を逞うして「龍潭譚」となり、「照葉狂言」となり、「風流蝶花形」となり、「化鳥」となり、「清心庵」となり、「髯題目」となり、三十一年に入りて更に「辰巳巷談」「笈草紙」「梟物語」等となり、一方より性に違ひ情に悖るとの貶評、邪路に入れりとの警策を受けながら、兎に角才筆斥くべからざる者ありき。

「龍潭譚」は薄暮一幼童の魔に魅せられて夢幻に入るを描き、「風流蝶花形」は怪蝶を材として遊女の咀死を寫し、共に凄婉の致に富む。「化鳥」は落魄の佳人半狂して夫の形見の一塊肉を抱き、世を恨み人を罵りて己れ獨り天

女なりと言ふに至れる悲痛の物語、「清心庵」は貴人に嫁せし美女が幼馴染の少年に邂逅して其の零落に同情し、遂に相共に一草蘆に止りて家に歸らずといふ奇矯の筋、共に幽玄の詩趣を認むべし。「髯題目」と「辰巳巷談」とは、一は藝人の末路、他は女郎の末路を描きて斬新又凄涼、「梟物語」は眞宗寺院の內部を寫して怪奇なる人物性格を集め、幽玄蒼涼人をして悚然たらしむ。而して作家が是等の趣向を筆にするや、獨得の省筆法を以て含蓄餘韻あらんことを求め、隱約の消息を讀者の想像に一任す。是を以て彼れの小說を讀むや、先づ神祕的の想髓と脚色とに魅せられ、文字の怪奇と詞章の凄愴とは、之を助けて恰も幽界に赴くが如き思あらしめ、次いで此の省筆に遭ふや、益想像を逞うして夢幻の怪境に走せしめらる。蓋し鏡花は人情世態の幾微を寫す作家に非ずして、神祕界の消息を穿たんとする作家なり。彼れの立脚地は正に茲に在りといふべし。

然れども斯る特色を發揮して渾成の域に至らんには非常の修養を要す。鏡花の筆力惜むらくは未だ圓熟せず、堂に上りて未だ室に入らず、其の人物と事件とは、一面に於て現實を超えて幽怪の畛に入ると共に、他面に於て未だ超自然の神祕界に觸れず、徒に結構の不可思議と詞章の幽玄とを弄して思想の神祕を裝はんとす。故に形式に於て多少の成功を見ると雖、內容に於て意外の空虛に驚く。彼れの讀者を魅する所以の者は、主として脚色の不可思議なるによりて催起せらるゝ探偵的の好奇心と、詩味津々たる描寫の往々幽玄の高調に達する箇處あるが爲に惹起せらるゝ感情の昂上との二者に在るべし。思ふに鏡花の作、全體としては散漫の失あると共に、局部に於て緊密周匝、及ぶべからざる者あり。是に於てか作者の名復び揚り、模倣する者少からず。盛名當年の如くならざれども、筆力の發展決して尠少に非ず。又以て後進作家の冠冕たるを失はず。

悲慘小說の名家柳浪は、其の深刻の筆鋒を以て心中物を作り初めぬ。二十九年『文藝倶樂部』に出でし「今戸心中」『新小說』に出でし「河內屋」、『小說六佳選』に出でし「淺瀨の波」の如き是なり。皆情海に浮沈する男女の複雜なる關係と葛藤ある戀愛とを描き、結ぶに悲慘なる情死の現象を以

てし、卽ち元祿の昔、巢林子の靈筆に詩化せられし心中を取り來りて一篇の主眼となし、之に戯曲的結構と心理の解剖とを經緯せりき。就中「河內屋」は當年の傑作にして、所有柳浪の長所を集めたりと稱せらる。げに寫實小說心理小說在りてより、此の作程人情世態の自然なる現象を描ける者少く、人物の氣禀性質に應じ、其の境遇の上に凡百の色彩を與ふる狀況も明瞭に描かれ、特に對話の如きは作者獨得の筆力巧妙を極む。げに此の作は當に柳浪をして名を當代に高からしめしのみならず、明治の文壇に重きを爲すに至らしめし傑作なり。

爾來柳浪は「信濃屋」「段々染」「異り種」等、創作少からず、皆深刻の觀察を恣にし、陰森の氣に滿つ。げに柳浪獨得の壇場は、卽ち人の思ひ至らぬ疾痛すべき人生問題を捉へ、一種の深刻なる詩題を自然界より擇み出して、之を讀者に提供する手腕に在り。此の特質は『殘菊』以來の者にして、慘憺の境遇と悲痛の運命とに醞弄せらるゝ情的人物を描いて、其の心理の苦悶を叙する所、人の腸を九回せしむ。唯描寫の筆力惜むらくは之に伴はす。對話を行るの巧妙なる、當代を曠うするに係らず、心情流動の迹を寫すや、往々說明の疎筆を以て匆々叙し去らんとす。讀者が斯かる文章を讀みて、尙無限の妙味と一種の魔力とを感ずるは、題材結構其の物が極めて奇拔にして、讀者の想像をして、文筆の形似を脫して直ちに事象の中心に突入せしむるが故なり。彼れの長所は結構の戯曲的發展に在ると共に、對話を以て始終すべき戯曲的形體に在り。此の點に於て三十年『太陽』に揭げし「畜生腹」の如きは、最よく作者の特色を現せる者といふべし。「畜生腹」は「河內屋」と共に柳浪一代の傑作にして、畜生腹の一婦人、苦惱の餘、惡婆の勸誘に應じて一兒を暗に送りしより、悔恨と恐怖とに身を悶え心を勞し、夫の疑惑と惡婆の强迫とに挾まれて、懊惱憂苦、遂に夫婦の間長へに疎隔するに至りし始末を寫し、通篇讀者の感興を緊張して一點の弛みを與へず、凄慘の氣人に迫りて卒讀に堪へ難し。作者嘗て曰く、深夜燈下に非ざれば小說の作をなす能はずと。其の能く凄婉なる脚色と筆致とを得來るは、孤燈暗影の下に思を凝せばか。然れども事利あれば必ず弊を伴

ふ。柳浪の如きも往々慘酷に過ぎ殘忍に流れ、刺激强烈に過ぎて間〻不快の感を起す。此の傾向は彼を驅りて精神上肉體上の不具者を寫さしめ、然らざるも下流の社會に想を構へ、延いて殺人自殺心中等、衝動の强烈なる結末を取らしめたり。之を以て彼れの作には詩想の高尙脫俗なる者なく、寫す所の戀愛概ね汚濁の中の者たり。

同年の作の可なる者には、尙「あにき」「靑大將」「七騎落」あり。手腕漸く熟して强ひて悲慘を求めず、作風漸く中正に赴き、歩一歩老成の領域に近きつゝあり。三十一年「羽拔鳥」(『新著月刊』)「女仕入」(『新小說』)等を出すに及んで益〻此の歩趨を取り、前者は從來の悲慘小說に比して、結構性格の自然なる、結末の光明的なる點に於て大なる差異を現し、後者は多少悲慘小說當年の面影を存すと雖、心理自然の徑路を描いて一糸亂れず、好箇戲曲的發展をなせり。此の種の心理小說は、當時の小說界を風靡せる者にして、柳浪實に此の間に重きをなし、多作縱橫、彫琢を用ひずして直ちに稿を脫する所、亦異才なりといふべし。

斯くの如く新潮流の弘布に最力ありし三子者の作風は、一時極端に走りて其の反動を受くるに至りしかば、飜つて多少の變更推移を其の間になし、概ね中正折衷の風に赴けり。獨り鏡花は寫實を離れて幻怪の境に入りしも、柳浪は其の心理小說益〻自然的となり、比年大に奮ふ。而して三子者皆明治寫實小說の祖門たる硯友社に出でしを見れば、斯壇の進歩に對する該社の因緣蓋し淺からず。況んや江見水蔭大に振ひ、小栗風葉新に起りて之に貢獻する所ありしをや。此の時に方りて後進作家踵を接して起り、文壇之を歡迎するの聲高く、二十九年創刊の『新小說』『世界の日本』翌年創刊の『新著月刊』等、皆之を標榜せり。既に新進作家あり。乃ち之に對して從來の作家を先進作家又は老大家と呼び、二者是非の論喧しく、反動又反動、後進奇峭の氣は先進老熟の風に宥和せられて、極端に奔逸すること漸次少かりき。此の先後新舊融和の潮流は、夙く女作家一葉に萠し、早稻田專門學校出身の諸作家に至りて其の勢を逞うせり。以下序次を追うて是等新進作家を叙すべし。

二　心理小說

觀念小說深刻小說の天下を風靡するに方り、筆は露伴を學びて氣骨ある西鶴風を取り、想は心理的主觀的の最新思潮に出でたる一新作家の、忽焉として文壇に現れ、佳作連出、盛名一時に世に布けるありき。樋口一葉女史是なり。一葉は東京の人、二十五年始めて筆を小說に執り、爾來二十九年、其の病歿に至るまで、文壇に於ける生命僅に四歲、而も其の間作る處二十餘篇皆傳ふるに足る。歿後蒐輯發刊せられし『一葉全集』に就て見るに、其の處女作は「闇櫻」にして、二十五年の中に得たりし短篇總て七種ありと雖、世に公にせられしは『都の花』に出でし「埋れ木」などや嚆矢なるべき。其の後『文學界』『文藝倶樂部』等に揭げし者數篇あるも、未だ作家の名を高うするに至らざりしが、二十八年一代の傑作「たけくらべ」『文學界』に出で、續いて「行く雲」『太陽』に、「濁江」『文藝倶樂部』に、「十三夜」『閨秀小說』に出で、翌年「わかれ道」『國民の友』に、「われから」『文藝倶樂部』に出づるに及び、才筆忽ち文壇を動かすに至りぬ。

「たけくらべ」は楊臺近き大音寺前、一體の風俗餘所と變りて少年少女のませかた恐しき市井に人となり、春は櫻の賑ひ秋は仁和賀の折々に、迭にくらべ來し振分髮の間にも、情、意氣地、戀無常、種々の世相の幼きながらに見らるべき情味ある舞臺に筆を着け、全盛の華魁を姉に持てる十四の少女美登利を主人公となし、界隈種々の少年少女を之に配し、以て美登利の快活勝氣なる性格を彫浮め、此の如き氣象者のいつか物恥かしく人懷かしくなるに至れる心理變化の微妙を躍動せしめたり。「濁江」は場末新開地の銘酒屋菊の井の出女お力が、嘘のありたけ串戲に其の日を送る中、怨の刄にかゝりてお寺の山の人魂と化するに至りし筋を叙し、遺傳と、境遇と、閱歷と、相倚りて成る人生の複雜なる徑路を描きて筆力最深刻、平和快活の大海の下、奔激悲慘の暗流あるを示し、絃歌嬉笑の裡、悲壯の涙の潛むを寫して筆鋒熱烈を極む。「十三夜」は貧乏士族の娘お關が夫の虐待に堪へ兼ねて夜私に親里に趣きしに、殘し置きし一子の愛やら物堅き父が訓戒やらに思ひ返して歸る途中、十三夜の月影に、處女なりし昔思をかけたりし

男の、車夫とまでなり下りしに遇ひ、浮世に辛きは一人と思ふなとて相別れ去るといふ筋、憂きは互の世に思ふ事多き世相の一部を描破して凄婉痛惻人を動かす。其の他「行く雲」「別れ道」「われから」等、皆人情の幾微に觸れ、世相の凄慘を表せり。斯くの如くにして一葉の名は文壇賞讃の中心となり、或は誠の詩人といふ稱を贈るを惜まずと言ひ、或は當今の小說界は一葉時代なりと呼ぶに至りき。かゝる過大の讃美は、勿論才華一時に煥發せる强烈の光彩に眩惑して冷靜なる鑒識を誤りしに出でしならめど、亦是れ從來觀念小說悲慘小說の奇怪慘酷に嫌惡の情を生じたりし時に際し、自然溫藉にして而も意義の深刻なるを失はざる新小說を得たりしに因らずんばあらず。尙其の全集に就きて觀察せん。

一葉の見たる社會は、冷酷無情個人の發達を抑壓する惡地惡の者なりき。まゝならぬ憂世とかこつは一葉の社會觀よりすればむしろ穩和に過ぐ。社會は個人と對立して屈せざる者に非ずして、個人の上に駕して之を埋沒せんとする者なり。「行く雲」の中に「二葉の新芽に雪霜の降りかゝりて是でも伸びるかと押へるやうな仕方」と言へるは、正に社會の個人に對する態度を說けるなり。社會果して斯の如しとすれば、此の間に生を享けし者、醉生夢死の徒に非ざるよりは如何で平穩無事なるを得べき。苟も一節あらん者、誰か社會の冷酷無情に萬斛の憤涙を濺ぎ、之に抗し之に逆ひ、當つて摧けざらん。一葉の小說に於ける人物は卽ち是なり。

斯かる性格を以てこの惡地惡の社會に處せんには、忽ち起るは衝突なり、葛藤なり熱涙なり。續いて起るは悲むへき大破綻、恐るべき大破壞なり。然らば則ち之に繼いで來るべき結末は何ぞや。正に是れ一葉の小說の主眼とする所、全集二十餘篇は卽ち此の間の消息を描かんと試みたるものに外ならず。思ふに古來の文學にして此の消息に觸るゝ者、概ね自殺若しくは遁世を以て其の結末となせり。然れども是等は、一葉の小說の結末たらんには餘りに淺薄、餘りに古風なり。深刻の思潮文界に橫溢せし當時に在りては、一種沈痛なる人生觀を生じ、萬斛の憤涙を揮ひ盡せる後に於ける異常の諦めを生せり。一葉が甚深の同情を以て氣骨ある筆を揮ひしは、卽ち

此の恐ろしき諦めを生ずるに至る消息にして、詩人として成功せし所亦茲に在り。而して男女人物の中、全幅の同情を傾倒せしは勿論女性に在りとす。蓋し弱きにつれなき冷酷の社會は、人の中の最弱き女性に向つて特に其の横暴を逞うす。持つて生れし一ふしあらん女の、涙を揮ひ盡して所有强情我慢に恐しき決心を示すに至るはむしろ憫むべからずや。一葉は卽ち是等無告の女性の爲に萬丈の氣焰を吐ける者、明治文壇に在りて、當代の女性を描くことかくの如く痛切なるあらず。紅葉等の寫實家が創れる女性の如きは、之に比すれば尙未だ淺薄なるを免れず。

吾人は一葉の小說を通觀して略其の特質を盡しぬ。顧みて之を思ふ、全集二十餘篇悉く同一人生觀の上に立ち、同一性格を描けり。女史の小說は大自然を描かんが爲に人生の種々相を寫せるに非ずして、一家の人生觀を表現せんが爲に其の特殊相を寫せるかの觀あり。換言すれば各篇其の結構を異にするに係らず、畢竟同一問題に就ての實例の蒐集に過ぎず。是を以て主觀の基彩は全作品に亙り、篇中の人物動もすれば作者其の人の影子たらんとし、而も其の影子や、作者の人生觀の明晰直截なるだけ、所謂寫實派の其れに比して甚しく明瞭著大なり。故に其の筆に上る所、狹隘なる社會に限らるゝ代りに、描寫の深き、奥底に徹し、單調なる性格に限らるゝ代りに、刻劃の生采、躍動の妙を極む。此の點に於て一葉の思想筆意は所謂深刻小說に似て其の奇怪と慘酷と無く、却て同情の人を動かす者あり。且夫れ一葉の自然を重んじ背實を忌むこと必しも所謂寫實家に劣らず。女史は卽ち寫實家の心を以て深刻小說を作る者、從來の寫實派と觀念小說一派との最善き調和者折衷家なり。

一葉は小說に師事する所なかりしかど、私淑せるは蓋し露伴に在りき。人物の性格の如きは頗る露伴のに類似し、特に「埋木」の主人公の如きは全く露伴固有の人物なり。從て文章亦露伴を學べる者少からず。蓋し一葉の文、初め西鶴を師としたりしが、西鶴を脫して一家をなせる露伴を見るに及び、更に之を私淑するに至りしなり。「埋木」の如きは元祿の大家を模倣せる跡沒すべからざると共に、頗る露伴の初期の文章に類す。然れども

「濁江」「十三夜」に至つては既に獨立して一新體を創始し、精練にして才氣縱横、雅俗の言語句法を驅使するの妙一世に秀づ。特に「たけくらべ」の一篇は、文情清婉文氣練熟、洵に渾成の名什たり。且つ從來等閑視せられし小説中の敍景分子著しく增加し、特に「行く雲」の末段「たけくらべ」十回に於ける情景雙敍の一節の如きは、清新簡淨にして趣味溢るゝが如し。不幸にして詩想文章其の才を盡すに至らずして病に伏し、一臥遂に立たざりき。年僅かに二十五歳。大橋乙羽齋藤緑雨等『一葉全集』を編纂發行し、以て記念となす。

一葉文壇に出でし比、女流文學者の筆を小説に染むる者一時に輩出しぬ。從來女流文學とし言へば、和歌に限られたりしが、文運の興隆以來、往々小説飜譯新體詩等に及べり。三宅花圃の小説に於ける、若松賤子、小金井喜美子の飜譯に於ける、夙に才筆の目ありしが、是に至りて一葉を出し、北田薄氷を出し、田澤稻舟を出し、大塚楠緒子を出し、二十八年末遂に一部『閨秀小説』の出版を見るに至れり。收むる所の作家は上掲數人を合せて總べて十二、就中花圃は曩に「露のよすが」を『太陽』に、今は「萩桔梗」を『閨秀小説』に出し、共に無垢の娘心、可憐なる處女の情を寫して溫藉の姿致を極む。作者は當時に於ても、又其の前後に於ても、作品多からずと雖、さすが女流小説家の先輩として、老練の筆ぶり一葉と共に當代閨秀の首班たるに足り、一葉の悲觀的厭世的なるに對し、樂觀的光明的の觀察に富めり。げに二人の特質は好箇の對照にして、一葉の社會の缺陷を指摘するや、秋霜烈日の嚴しさを以て之を冷罵し、花圃は其の缺陷を認むるも、裡に又一點の調和を求め、春風滋雨の溫さを以て之を謳歌せんとす。一は人生の暗側を寫し、他は其の明側を描き、一は文章の奇拔を以て勝り、他は其の溫和を以て優る。故に二者の觀たる社會は等しく不調和缺陷の集合なりきと雖、人物の性格は大に差あり、從て個人對社會の葛藤は、其の終結に於て甚しき相違あり。「露のよすが」の露子姫、何一つ不足なき身ながら、與はらぬ容色に赤繩結び難く、千行の紅涙强ひて抑へて唯醜草の疾く枯れよと祈るは、好箇人生の悲劇、一葉をして材を此に取らしめば、正

に一個世のすね者を描き出でしならん。而も花圃の露子姫は無情なる子爵の筆意に倣うて靜に富士を畫く餘裕と和平とあり、末段一點の光明を示して慰藉する所少からず。「萩桔梗」の浪子亦失戀の恨を懷いて、傷まず狂はず、疇昔一時の夢を忘れて和平の局を結べり。斯くの如く二作家の人生觀は根柢より異なりと雖、各、人生の一面を寫して雙璧の價値ありといふべし。薄氷と稻舟とは之に次ぐ作家にして、前者の作は、「鬼千疋」「黑眼鏡」等あり。結構着想共に人生の悲觀に出で、而も這裡女作家の溫藉を見る。後者は「白薔薇」等の作あり。筆熟せずと雖、才氣おのづから現る。山田美妙齋に配して二三の合作ありしが、二十九年一葉に先ちて歿しぬ。大塚楠緒子亦才筆の名ありき。

心理描寫の潮流は、一方に於て江見水蔭と田山花袋との散文詩的小說を出しぬ。二人は共に深刻なる寫實、高遠なる理想の筆を缺けりと雖、其の代りに津々たる詩趣に富み、縹渺たる詩韻を藏すること群作家に超え、鏡花の怪奇柳浪の悲慘一葉の沈痛以外、別に一異彩を新作家の間に放てり。

水蔭は漣山人と同じく獨逸協會學校に出で、硯友社初期以來の社中たり。所作概ね小說なれども、夙に脚本に指を染め、且つ艶筆を以て鳴れる社中、比較的氣骨ある文章を作し、同人間の異色と稱せらる。早く『中央新聞』に入りて小說をものし、戰爭酣なるや、數多の軍事小說を出しぬ。然れども第二期に在りては特に注目すべき作なかりしが、二十八年、短篇集『水車』を刊し、「女房殺し」を『文藝倶樂部』に出し、二十九年「炭燒の烟」「泥水淸水」「絕壁」等を出すに及び、詩想の頗る見るべき者ありて忽ち文壇の注目を惹き、就中『水車』の中なる「兜の星影」「斷橋」「溫泉」「狂詩人」等、及び「女房殺し」「炭燒の烟」の二篇は其の傑作と稱せられたり。而して彼れの文章は多樣多變、或は雅俗折衷、或は言文一致、或は對話體、或は獨語體、行く處として可ならざるなしと雖、其の長所は蓋し言文一致の談話體に在るべし。

水蔭の小說は、世相を描き人情を寫す小說としては成功の域に遠き者なりと雖、之を詩篇として見る時は、優に散文詩の境に入る。彼は硯友社中

獨り理想小說を以て任じ、從て其の詩題は多く理想界に生活する人物、卽ち藝術家に關し、然らざるも之に類似せる抒情詩的題目を選べり。彼れの好める人物は畫師詩人巡禮漁夫山樵旅客等にして、從て都門塵俗の風よりもむしろ山海林野の趣を愛す。「炭燒の烟」に於ける炭燒男の愚直にして一圖なる性格及び行爲、「絕壁」の主人公たる詩人が身世の不遇と戀愛の失敗との爲に破壞し盡されたる半生の生活の如き、共に作者が着想の傾向を覗ふに足る好例といふべし。「女房殺し」は當時一葉の「濁江」と並稱せられ、可憐の賤女に同情して所謂社會の罪を鳴らし、人生の迂餘曲折を盡して深刻小說の畛域に入り、文章亦精練にして緊張せる所、以て當代傑作の一に數ふべきも、是實に水蔭作中の異色にして、以て他の篇を推すべからず。彼は飽くまで理想界に遊ぶ人物を描くを特長となす。而も其の藝術家を描くや、必しも露伴と趣を一にせず。露伴の藝術家は一向專念にして、意志强健道念高潔なり。水蔭のは之に反し、信念堅固ならずして世間の毀譽に惑ひ、道念確固ならずして或は墮落の淵に陷る。斯くの如きは水蔭が理想として描き出しゝ詩人に非ずして、正に世間の詩人に粉本を取りて其の憫むべき運命を寫さんと試みたるなるべしと雖、要するに理想派の小說家として未だ至らざる所少からざるなり。

飜つて之を詞藻の方面より見るに、水蔭は詩人としても亦未だ至れる者に非ず。其の文辭精練を缺き、其の章句推敲を缺き、速筆一過復顧みざる趣あり。「女房殺し」はさすがに清婉の氣難ずべき所少しと雖、其の他の諸什可惜詩想を傳ふるに足るべき十分の詩筆なきを憾となす。

花袋は二十七年頃に現はれし新進にして、二十八年作「山家水」「水車小屋」「小桃源」翌年の「無名草」「忘れ水」等、皆幽婉純清、無韻の抒情詩なり。描く所概ね靑春の純潔なる戀愛にして、之を織りなすに優美なる山色水光を以てし、之を行るに詩趣饒き雅俗折衷體の文章を以てし、情景錯綜する所限なき韻致を含む。花袋の戀を描くや、其の成立の因緣順序を細寫せんとはせず。直ちに成立以後の心狀に及び、思內に溢れて而も言ひがてにする年少初戀の情、又は獨り片戀を胸に懷きて人知れず煩悶する狀を寫

せり。之を嵯峨の舍が描ける青春の戀に比するに、其の純潔なる點相似たり。其の煩悶の態相似たり。其の人物の性情相似たり。然れども、情感の熱烈なるに於ては花袋到底嵯峨の舍に及ばざると共に、着想の自然にして描寫の妥當なるは花袋固より嵯峨の舍に超えたり。蓋し花袋に取るべき所は、一篇を掩ふ詩的情緒に在り。之を外にしては彼れの小說は稚氣滿幅、脚色單純にして篇章概ね短く、從つて世相描寫の小說たるに尙甚だ遠し。「忘れ水」の如きは、彼れの所有特色を代表すべき好作例といふべし。要するに花袋の作より大なる敎訓を得、深き戀愛を味ふこと難しと雖、淸く美しき戀を味うて靑春の慰藉となすに足るべし。

硯友社の後進作家として鏡花に接踵して起りし者を小栗風葉となす。風葉は紅葉の門人にして、二十九年「寢白粉」「龜甲鶴」を出すに及んで、忽ち評壇の注目を惹きぬ。「寢白粉」は人情自然の徑路を描いて着筆亦輕妙、紅葉の面影を模し得て才藻見るべき者あり。唯着想奇矯、强ひて人生特殊の一方面を描き出でんとせしが爲め、一時評壇の非難を招きたりき。思ふに斯かる紛糾せる逆境の戀を描きしは、從來の趣向の單調を破らんが爲に葛藤烈しき者を求めたると、葛藤を個人と人倫との衝突に取りて悲劇の效果を大ならしめんと企てたるとに由る。かくの如きは、企畫必しも非ならずと雖、取材の奇を弄するに過ぐるを誡むべしとなす。「龜甲鶴」の著想、かゝる弊なくして、詩趣に富み、才氣を見るべし。然れども彼れの發展は尙未來に在り、後章に說くべし。

紅葉門下にして當時世に出でし者には、尙柳川春葉、德田秋聲等ありと雖、未だ特に說くべき者なし。醋つて硯友社作家の全體に就きて其の作風を見るに、概ね逸氣奔放所有試驗企畫を敢行して常に小說界新潮の先頭となりにき。かの中和自然なる折衷的手腕は、遂に早稻田派作家に俟たざるべからざりき。

新作家勃興の氣運熟するや、坪內逍遙の指導せる早稻田專門學校文學部は、多數の創作家を輩出せり。就中小說の作家としては後藤宙外、水谷不倒、島村抱月、三木天遊、繁野天來、伊原靑々園等あり。『早稻田文學』を

始め『文藝倶樂部』『新小說』等に其の作を掲げ、遂に三十年自家の經營に成る小說雜誌『新著月刊』を發刊するに至り、新進の鋭氣旺盛なること、恰も前期初頭に於ける硯友社の如くなりき。是に於てか評壇此の二者を對比論評する者多く、所謂早稲田派は小說界に於ける一大勢力となり、硯友社と角逐して新進の文壇を二分するの觀ありき。且彼等は概ね相當の學識素養ありて、一方に於て批評家たる能力を有したりければ、硯友社の才人等が默々として語らざるに反し、『早稲田文學』を中堅として諸種の刊行物に、逍遙流の記實的論評又は精到平正の議論を掲げ、以て重きを評壇になせり。

批評家としての彼等を論せんは暫く措き、創作家としての方面より見れば、彼等の先頭は宙外不倒の二人なるべし。宙外の現れしは、蓋し二十八年作「ありのすさび」の『早稲田文學』に掲げられし時に始まる。落魄の實業家、家庭の圓滿を破りて懊惱遂に發狂し、妻亦煩悶病を發して死すといふ節を叙し、煩瑣に流れ說明に過ぐるの弊ありと雖、人情分析の筆幾微に入り、心理變化の描寫精緻を極む。次いで「闇のうつゝ」を『新小說』に掲げぬ。敎育もなく節操も辨へぬ勝氣一方の孤女が、零落せる家道を恢復せんとする努力と、之が手段を否認する世間の道德との衝突の爲に蹉跌相次ぎ、遂に醐然志を世に絶ち山に遁るといふを脚色となし、心理の描寫前者に劣る所あるも、文章精練、情景並び至れりと稱せらる。次いで三十一年「思ひざめ」「亂れ心」「白露」等の佳作を出し、多く心理の精微なる消息に描き入る。

宙外の作、概して平正淡雅、春野分け行く流水の如し。心理の幾微を捉へんとして、好んで神經質の人物を描き、又好んで自殺や情死などの結末を取ること、或は柳浪の如く、或は鏡花の如くなるも、心理を描いては柳浪一葉の如く刻劃ならず。神經質の人物を寫しては鏡花柳浪の如く甚しからず。自殺情死を筆にしては柳浪の如く悲慘ならず。然れども人情の委曲を盡して精緻老熟群を拔き、所謂心理小說の陣頭に立ちて一葉柳浪に接踵し、新作家としては、鏡花の觀念小說と共に斯界の二潮流を代表せり。唯

其の缺點は、描寫精細に過ぎて煩瑣冗漫に流るゝに在り。蓋し宙外、一方に於ては戲謔滑脫と注意周到との資質を逍遙より受け、他の一方に於ては深刻悲慘と葛藤煩悶との趣味を新思潮より受け、二者融合して此の折衷の風を生せしなり。故に彼れの作は客觀的寫實の門より出でて而も純然たる其の者にあらず。むしろ主觀的心理的ならんとす。是彼が特質の第一なり。次に宙外の特質と認むべきは田園的色彩と家庭的趣味と是なり。田園的色彩は當時の小說にはむしろ缺乏せるところ、知名の作家概ね東京の人たるを以て、取材の範圍都會を出でず。會、田園を寫すも觀察皮相に止まりて情景眞に入らず。宙外は此の點に於て確に孤尊の價あり。此の事實に附帶して考ふべきは叙景の筆力なり。そも小說中の自然の描寫は、逍遙紅葉等より甚しく疎外せられ、露伴一葉に至りて稍注目せられしも、未だ宙外入神の筆に及ばず。「ありのすさび」の萩の湖の曉色を叙せる條、「闇のうつゝ」の末段野中の荒祠を寫せるあたり、妙趣眞に掬すべし。家庭的趣味の饒多なるは彼れの特徵として總べての作に亙り、從て敎訓的なる點少からず。

思ふに彼や青年新進と稱せらるゝも、年齡既に長ず。其の作の平淡にして老熟せる、啻に其の資質と敎育とのみに因るに非ざるが如し。

不倒の現れしは少しく後れたり。二十九年「枯野の眞葛」等を『早稻田文學』に載せ、『新小說』發刊に際し、第一號に「錆刀」「薄唇」二篇を掲ぐるに及び、作家としての目定まり、續いて『新著月刊』等に數篇の作品を掲げたり。總じて之を言へば、其の想に神韻なく、其の筆に精彩なく、爲に往々陳腐平凡などの酷評を受くと雖、平淡自然の境地に一脈人生の幾微を寓せる所、亦趣なしとせず。蓋し不倒素と江戸文學の研鑽家にして、深く巢林子八文字屋に私淑し、逍遙よりも長せる齒を以て始めて小說壇に現はれ、後進作家なれども、もはや青年に非ず。故に其の趣向往々江戸文學の面影を存し、「錆刀」の如きは多少近松の戲曲を想起せらるゝ所あり。其の文章の深刻なる事象を寫すに適せずして、むしろ輕快諧謔の作に宜しきは、亦私淑する所に出づるか。かの青春激越の調に乏しきが如きは、思ふに宙外と轍を同じうする者なるべし。

二子に踵を接して起りしを抱月となす。三十年作「女をと浪」、翌年作「月暈日暈」、共に哀深き夫婦心中の物語なり。着想筆力特に目を側てしむる者なしと雖、布置整然、細心なる注意全篇に行き亙りて弛廢する所なきを取るべしとなす。同年の「墨繪草紙」も亦此の特長を發揮して佳作ならずとせず。蓋し抱月は同門作家中最學識ある者、特に美學及び修辭學を以て本領となし、最理論的の頭腦を有し、從て批評家としては夙に儕輩に拔んで、穩健中正を以て名あり。是を以て彼が創作おのづから此の事實を反映し、甚しき光なき代りに甚しき瑕なく、哀れに情深き所ありて、奔放激越の趣なし。

天遊と天來とはむしろ新體詩家として知られ、小說の作は甚だ多からずと雖、共に詩的空想に富めるを珍となす。青々園は滑稽の作に富む。而して滑稽の存する所、言語形式の皮相に非ずして、意義內容の裡に立入り、おのづから大人を笑はしむるに足り、文章亦圓熟せり。

要するに彼等の創作は、概ね着想穩健、筆意平淡にして、其の長所は細心周到なるに在り。短所は熱烈なる情緒を缺くに在り。之を硯友社の新作家に比するに、同じく寫實の海に生ひ立ち、新潮流に養はれし者ながら、硯友社派は宛も逆捲く瀧津瀨の如く、逸氣奔放想像の馳するに從ひ、情熱の之くに任すの趣あり。早稻田派は淀みなき野川水の如く、溫雅自然の姿態を盡さんとす。而も一身を創作に獻じ、終生小說家として立たんとするに至つては、早稻田派は遂に硯友派に一歩を輸せざるべからず。思ふに後者は批評家たり學者たる能はざる人々なるに反し、前者は兩方面を兼ぬるを以て、會一方に專なるを得ざりしか。果然抱月美學者となり、宙外『新小說』の批評家となり、不倒江戸時代文學史家となり、青々園劇評家となり、他諸人亦漸く創作壇に遠ざかりぬ。

新進の心理小說家は略之を說き盡しぬ。乃ち去りて先進作家の心理小說を述べんとするに當り、新進中の別味たる小杉天外の諷刺小說を附記せんとす。而も天外を說かんには、先づ其の前續者にして且師たる綠雨より叙ぶるを便となす。

前期の批評家諷刺家として、「小說評註」「荊鞭」の筆者として、其の名高かりし正直正太夫は、此の期に入りて綠雨の名を以て諷刺の才を小說に試みたり。二十八年『國民の友』に出しゝ「覗面」、翌年『太陽』に出しゝ「雨蛙」の如き卽是なり。前者は意志薄弱の書生、世間の所謂女房等を譏刺し、後者は自惚と沒常識との化身ともいふべき所謂文學者輩を嘲罵せる者にして、諷世嘲俗、冷笑骨を穿ち、熱罵髓に入り、筆鋒銳利、警句應酬に暇あらず。其の文章も亦奇絕妙絕、特に前者の如きは一氣奔放の走り書、文體修辭共に珍奇類なく、而も辭句洗鍊、當代に卓越せり。げに此の二篇は、綠雨の特質を最よく表せる者にして、諷刺小說中の珍品たり。

天外は綠雨の門に入り、鬼才が諷諧の筆を傳へて夙に文壇に現はれたり。二十四年『國會』新聞に「改良若且那」の短篇を揭げし以來、二十八年「奇病」二十九年「卒都婆記」「改良若殿」三十年「ひとり者」「珈琲店」其の他數多の創作を出し、宙外等と共に新作家の名を恣にせり。就中「奇病」は國會議員を刺り、「卒都婆記」は所謂社會主義論者を諷し、「改良若殿」は痴愚の華族を中心として世上百般の俗物を罵倒し、總べて筆路輕妙、譏刺奇峭にして、共に當代の佳作たり。

げに天外の作は、深刻沈痛の域に遠く、性格心理の描寫亦其の能に非ず。加ふるに筆意頗る同情を缺く。然れども從來諷刺といへば、魯文一流の淺薄幼稚なる者のみ行はれしに方り、事象を平坦自然の境に取り、人物と社會との所有缺陷に向つて銳利なる諷嘲を投ずる所、靈犀奇警、人を魅するあるが如きは、洵に斯壇の進步といふべし。げに彼が滑稽は、動もすれば審美上何等の價値なき所謂落ちに近からんとす。然れども、從來滑稽といへば、瓜生政和南新二等の如く、强ひて笑を求め、道化を盡し、以て匹夫匹婦を笑はしむるに過ぎざるに方り、社會や人物を觀察するに常に皮一重の裏に及び、美しく賢しき外觀の裏に潛める汚く愚かなる好笑的材料を求め、之を暴露し來りて乃ち哄然大笑するが如きは、以て識者の頤を解くに足り、多少諷滑の體を得たりといふべし。彼は文才の縱橫なると諷嘲の奇辣なるとの點に於て、到底綠雨の敵に非ず。然れども天外の筆、綠雨の神

經質なるに比して甚だ膺揚に、綠雨の腥氣毒焰を吹くが如くなるに反して溫藉輕妙の致あり、綠雨の世上一切の者を嘲り盡さんとするに反し、專ら譏刺の筆鋒を虛僞と醜陋と愚劣とに向けたり。要するに天外は新文壇寫實の園に生ひ立ちし一種の異草にして、滑稽諷刺の花は此の時始めて新粧を凝し出でたりといふべく、綠雨の尙舊文學の面影を存して過渡の地位に立てるに異なり、全く明治の新時代に入れりといふべきなり。

當時の作家には、尙ほ遲塚麗水、三宅靑軒、松居松葉、前田曙山、太田玉茗、藤本藤蔭、黑田天外等あり。多少の新作ありといへども、特に擧ぐべきものなし。

紅葉門下の才筆濟々たるに對し、露伴門下は甚だ多からず。中谷無涯は二十九年始めて現はれ、少しく後れて田村松魚、藤本夕颯の二人現はれ、多少狂熱を帶べる彩筆を揮ひしも、惜いかな、鏡花風葉の如き發展をなさざりき。

三　先進作家の心理小說

曩に後進作家の勃興するや、其の直接の刺擊に勵まされ、又評壇後進を揚げて先進を抑ふる者あるに激せられ、前期に名を爲しゝ先進作家復び奮ひ起てり。而も其の作風大に前期と面目を異にし、悉く心理的寫實小說の新彩を帶びて現れたり。露伴以下紅葉に至るまで、一として然らざるはなし。

『五重塔』以來暫く雌伏したりし露伴は、二十六年『風流微塵藏』の大篇に着手し、初篇「笹舟」を『國會』に揭げ初め、續いて「菊の濱松」「獨寢」及び「雲の袖」の諸篇を出し、無前の大篇として文壇の呼物となりぬ。然れども『微塵藏』は未だ其の局を結ばず、且つ局面廣大事象複雜なれども、既出の分のみを以てすれば、各篇唯一二人物の連鎖あるのみにて、全く別の舞臺を現じ、其の間に有機的結合の見るべきなきを以て、大局の歸趣茫として知るべからず。唯其の部分的に現はれたる巧妙なる描寫に至りては、さすがに天來の趣あり、人事の表裏を寫して痛切に、人情の秘奧を描破して靈犀なりといふべし。

此の篇出でて褒貶の聲交々起りたりと雖、大體に於て『五重塔』以來、現實の觀察に入りて一段の進歩をなせりといふに一致せるが如し。思ふに露伴の作風は明かに一變せり。然れども彼が本領たる散文抒情詩の幽玄を離れて現實描寫の精緻に入りし者、果して彼れが爲に慶すべきか。之を人物に見るに、人それ〳〵の性格を描いて躍動の趣あり、心理變化洵に自然的發展の妙を盡せり。然れども是等の人物、詮ずれば皆同一性格にして、悉く作者自身に粉本を取れる者なるに似たり。彼等は概ね酸いも甘いも嚙み分け、人情世態を洞觀するに過ぎ、動もすれば作者の人生觀を時所に應じて述出すべき傀儡とならんとす。されば人生の奥祕、人情の幾微、多くは說明に過ぎて讀者想像の餘地を奪ふ。作中人物が滔々數千言、人情哲學を講ずる所、此の作者に非ざれば望むこと能はざるも、其の間又讀者をして嫌厭せしむる者なきに非ず。蓋し此の篇或は作者胸中の蘊蓄を披瀝せる人生哲學たるを得べしと雖、美術品としての成功は、かの抒情詩的高調に達せる『五重塔』等に比して、未だ優れりと言ふを得ず。故に本期に於て露伴の露伴たる所以の作を求むべくんば、『微塵藏』よりはむしろ「新浦島」を取らんのみ。

「新浦島」は二十八年『國會』に連載せる者にして、浦島傳說の上に想を構へたる一部の抒情詩的小說なり。後纒めて三十五年刊の『露伴叢書』に收む。浦島太郎龍宮に趣きてより、其の家を承けし同次郎の子孫相傳へて百世、明治の聖代に至りて一個俊秀の詩才浦島次郎を生じぬ。少時鄕を去りて京に遊び、天成の詩才忽に當世の寵兒となり、邊海の漁子榮華と戀愛とに身を沒して鄕を忘るゝこと十數年。偶〻戀に敗れ榮華に敗れて茲に悵然望鄕の念を生じ、飄然として悟れば漁夫の生活なつかしく、二十五歳の壯年復父母の膝下に歸りぬ。歸れば老親世を讓らんとて傳來の玉手箱を渡しに、異寶奇瑞を現じて父母一夜に登仙せしかば、次郎始めて仙緣あるを知り、天界俄にゆかしく、九轉の大丹を煉りて仙道を得んとの大願を起しぬ。而も仙道成らず、憤りて魔道を修し、一向專念大地震動して遂に通力を得、或は驪山の靈泉に浴し、或は蘭陵の美酒を味ひ、飛行自在の身とな

りしが、一夜終に化石して靜に生死の外にありきといふ。是れ「新浦島」の梗概なり。通觀すれば前半は現實の分子多きを占むるも、後半は全然超絶界に入り、詩情段一段昂進して最後の大發揚に至る。此の結構は「對髑髏」以來作者常套の手法なり。

此の篇の骨子は、浦島傳說に唐土神仙譚の附會して構成せられたる悟道の寓話より得來りし者にて、斯道に入るべき三階段を示せる寓話を取りて、直ちに理想的生活に進むべき四階段を表せしに似たり。物質的榮華の生活は清淡自然の生活に若かず。清淡自然の生活は超絶的神仙の生活に若かざるを說けるは、かの寓意的仙譚なり。學と詩と富と戀とは未だ以て人を解脫せしむるに足らず。一切世間の欲を絶ちて身を一竿に托するも亦然り。凡界を離れて神仙の間に遊ぶも亦然り。生死の外なる寂靜の境に入るに至つて始めて眞の解脫を得べしとなせるは卽ち露伴の「新浦島」なり。兩者の間多少傳說の發展あり、形式に大差なきも意義は全く更新して時代の色彩を帶べり。思ふに浦島傳說は、本邦の傳說中最發展せる者の一にして、萬葉集風土記の古より「新浦島」に至るまでの發展は、他の傳說に見ざる所なり。

之を小說として見るに、其の超絶的なるは遙に從來の作に過ぎ、理想的なるは更に甚し。されど其は現實を超絶せる一場の仙譚的空想に出で、著しく冷靜の調を帶びたり。『五重塔』以前の作を以て之に比するに、彼には人生に執着する熱情あり。此には人生を達觀せる理性あり。現實以外奔放なる空想の行く所を恣にせる態度、兩者其の軌を一にすと雖、通篇の趣味傾向に著しき差あり。此の新傾向は疑もなく『微塵藏』以來の變象にして、篇中各人物の人生觀、人情觀、女性觀、はた社會觀等、滔々揮灑し去る所、一に作者が凡百の人事に對する平生の達觀悟入に出でたり。

「新浦島」を以て作者の本色を現はしゝ者とすれば、二十九年『讀賣』に掲げし「髯男」は、彼が作中の異色として注目するに足るべし。武田勝頼の家臣笠井高英といへる髯男が覆滅せる主家を擁護せんとする苦衷を描き、義あり情ある甲州武士の面目を發揮せる歷史小說にして、文章瑰麗奔放、

『風流佛』以後の名文と稱せられたり。

既に述べしが如く、露伴の作には常に作家の影を宿せり。彼れの小說を讀む毎に其の人格の這裡に躍動するを覺ゆ。蓋し露伴は江戸兒の粹。覇氣稜々たると共に又よく物に凝る。而も藝術に對する熱愛未だ曾て衰ふることなく、從つて讀書の嗜好極めて高く、其の造詣蘊蓄常に創作に表はる。此の點に於ては其の風尙頗る紅葉と相似たり。然れども露伴は固と深く人生を洞觀し、瞑想沈思其の眞諦に觸れんとする人なり。此の性格は彼を驅つて深く佛典に參せしめ、老莊に入らしめ、延いて悟道の人たらしめんとす。且つ彼は神祕を認め、神仙を究め、佛力を信じ、神籤易卜を拒まず。總べて信念の固き、道念の高き、當代作家に多く見る能はず。淺薄なる寫實の風天下を吹き荒める時、獨り高遠なる詩的哲學的情想を小說に寓せたりしは、一に此の性格より來る。此の點に於てはいたく紅葉と趣を異にす。且つ露伴の文を行る、逸氣奔放千言立ろに成り、而も絢爛瑰麗の致を極むること頗る紅葉の遲筆に反す。彼が作は忠實なる實世間の描寫、乃至奇警深刻なる實社會の觀察に出づるよりも、むしろ人生に對する沈思瞑想より來る。されば露伴の如きは、景仰すべき人にして模倣すべき人に非ず。時流に超然たるべき人にして門下を養ふべき人に非ず。是れ紅葉門下の多士濟々たるに反し、露伴の門遂に俊髦を見る能はざる所以なり。

言文一致體の主唱者として、「夏木立」「胡蝶」の作者として、盛名一時に鳴りし美妙齋は、二十四年以來消息を小說壇に立ち、新體詩の作家としてのみ聞えたりしが、此の頃に至り再び起つて小說壇に現はれ、前の盛名固より望むべからずと雖、尙健筆多作、當年の意氣を存し、文界をして此の才人の健在を慶せしめぬ。

二十八年の「お千代」「鰻旦那」翌年の「若白髮」は、趣向の平凡なるに係らず、獨得の言文一致、當年の嫌味を脫して瀟洒圓熟の境に入る。此の三篇は、共に評壇の一問題たりし狹斜小說にして、寫實の手腕益精妙に、進んで心理の細寫に及べり。此の點に於て美妙齋亦新潮流の影響を受け、柳浪の深刻なしと雖、精細或は之に過ぎたり。爾來數篇の歷史小說及び狹

斜小說を經て、三十年「閻魔地藏」「可憐狂」を出すに及んで、或は寫實の筆力を以て、或は文章の妙を以て多少文壇を動かし、特に「可憐狂」は、律義一徹の老父が至誠、自墮落の娘を悔悟せしむる筋を描き、評壇佳作の目ありき。

げに美妙齋の作は筆力を以て優る。惜むらくは同情を缺き、小說家として願はしき熱血を具へず。故に筆鋒愈〻鋭利にして觀察愈〻皮相に走り、描寫益〻巧にして讀者の肺腑に入ること益〻少し。好んで狹斜の巷を描き、特殊の通と穿ちとを衒うて、脂粉の氣輕佻の風厭ふべき者あるは、彼が第一の缺點にして、所謂內容のいや味は總べての作物に滿ちたり。加ふるに當時多作に過ぎしかば、筆漸く荒み、想亦漸く型に入り、好作家遂に唯文章家の名を止めしのみ。

硯友社の小說家にして少年文學に名を得たりし漣山人は『日本昔噺』『日本御伽噺』『幼年讀本』等を編し、雜誌『幼年世界』『少年世界』等を發行して、益〻其の本領を進むる傍、時に小說を出して特長たる輕快の筆を揮へり。

二十八年、小說界の潮流が人生の深刻なる方面に向ふや、山人『昭君怨』を作し、清淨無垢の華族の處女が、破產せる父子爵の犧牲となりて高利貸の新平民に嫁ぐ悲慘の運命を寫し、續いて出でし『燒火箸』等も亦現社會に對する諷刺的筆致を見るべし。然れども山人の本色は飽くまで平易圓熟なる文藻を以て無邪氣なる情緒を描くに在り。二十八年『國民の友』に出しゝ「菫日記」の如きは、正に其の代表的作物なるべし。「菫日記」は鷗外の「舞姫」に似て、獨逸留學中の一學生と薄命可憐なる金髮少女との情事に關する詩趣橫溢の着想を自叙日記體にものせる短篇にして、文情淸高、塵俗の氣なく、詞章亦言文一致の妙を盡せり。

前期の寫實小說家にして、文學一轉の今日、多少の述作を出して世人の記憶を新にせる者には、嵯峨の舍、抱一庵、篁村、採菊、思案、忍月、湖處子、三味、雪後（花痩）、乙羽等あり。就中嵯峨の舍は例の言文一致益〻圓熟し、短篇集『文の庫』『古反古』を始め、各雜誌に揭げし作少からず。抱一庵は思軒と共に『報知新聞』に在り、露國文學の飜譯に名ありしが、創

作に於ても多少の績を殘せり。篁村は老練妥平の筆致例の如く、三昧は傳奇小說の外世話物に筆を染め、文章は漢文流の奇氣を帶びたり。雪後と乙羽とは硯友社員にして、共に短篇を諸雜誌に揭げ、才筆の譽ありしが不幸にして早世せり。

上來先進作家を列叙して今や紅葉を餘すのみとなりぬ。紅葉は今期に入りて連りに外國文學の飜案物を出し、創作に用ひし圓熟渾成の彩筆を以て之を飜案に試みたり。之より先、紅葉は「臙舟」「夏小袖」等、既に此の種の者に指を染めたりしが、二十七年以後に至りて著しく之に傾き、創作却て兩三篇に止まるに至りぬ。卽ち二十七年の『隣の女』、二十八年の『不言不語』、二十九年の『冷熱』の如き、當時有名の作は、皆飜案に屬せり。

就中「不言不語」は紅葉が傑作の一にして、又是等飜案の代表たる者なり。『讀賣』に出づ。新參の小間使環が、目見えの當時より疑團晴れざりし笠原夫人の憔悴煩悶嗟嘆の原因、不言不語の胸中を探求せんと苦慮する筋を經となし、主人の弟民之介が環に對する戀語りを緯となし、遂に事變の偶發より一家に潛める祕密が隱約の間に推測せらるゝに至る始末を、環の自叙體に描ける小說にして、一篇の生命は、讀者が此の祕密の伏在せる家庭に對する不安の念と探求の心とを繫いで最後の大破綻に導く所に存す。されば其の祕密の闡明せらるゝに及びて感興頓に去るは、亦免れ難き缺點となるべし。唯末段、夫人が懺悔の爲、罪滅しの爲、病兒を救うて自ら犧牲となる所、慘憺たる悲劇的結局ながら尙一道の光明を見る。民之介環の情話は素と一挿話に過ぎずと雖、陰森の氣充滿ちたる大筋に對照して、其の凄慘に過ぐるを調節し、兩々步趨を共にして大團圓に向ひ、悲劇の終結を彩るに愛の成立を以てするなど、有機的結合の頗る周密なる者あり。然れども、全體の趣向及び人物は、到底本邦の者に非ず。又紅葉の筆致に適應せる者に非ず。而も尙多數の愛讀者を有ちしは、其の探偵的趣向の人の好奇心を繫げると、其の文章の洗錬完璧に近きとの致す所なり。

然れども文運興隆文學一轉の盛時に際し、紅葉の製作はかゝる飜案物に止まり、然らざるも『四の緒』の如き飜譯物、『片靨』『名曲クレーツエロワ』

『笛吹川』等の合作物に過ぎざりしかば、批評家は漸く彼が健在を疑ひ、中には想泉涸れたりとまで罵る者あるに至りぬ。偶〻『讀賣』に載せし創作「青葡萄」は、門人某が青葡萄を味うて不測の大病に罹りし一夜の出來事を叙べしに過ぎざりしかば、悲觀的批評益〻其の度を高めたり。是に於てか紅葉奮然と立ち、二十九年「多情多恨」を『讀賣』に載するに方り、宣して曰く、是れ俳諧に非ず、雜報に非ず、飜案に非ず、合作に非ず。實に快腕一揮の創作なりと。乃ち連載數月に亙り、前後兩篇五百五十頁の長篇をものせり。

「多情多恨」は、甚しき神經質の男が最愛の妻を失ひて追慕の情に堪へず、懊惱日を重ねて薄らがず、寂寥の感屢〻身を襲ふ狀態を描き、以て失戀者の情緒を委曲に精寫せし者にて、打見たる所波瀾なく奇巧なく變化なし。其の人物を以てすれば、主なるは主人公鷲見と、親友葉山、其の妻お種との三人に止まり、舞臺を以てすれば鷲見葉山二家の間を出でず。事件を以てすれば鷲見が悲歎懊惱を反覆するに過ぎず。時日を以てすれば百五十日にだも滿たず。人物の寡少と脚色の單純とは、明治小說の新傾向なりと雖、かくの如く甚しき者未だ多からず。而も四十六回五百頁の長篇をなせるなれば、從來の小說の刺擊强烈なるに慣れたる人をして、或は冗漫と感せしめ、或は無趣味と感せしめ、或は鷲見の如き性格は我國民に存せずとさへ斷ぜしめぬ。然れども「多情多恨」の描かんとする所は、依戀の情緒其の物なり。寫さんとする所は、此の情緒の最微妙なる作用なり。粗大なる想像、淺薄なる同情を以てしては、往〻看過せらるべき最微極細の消息をも隈なく具象化するは、卽ち此の小說の極意なり。吾人は旣に粗大なる感情の描寫、强烈なるそれ、及び深刻なるそれを見たり。未だ此の小說が描ける如き平淡微妙なる者を見ざるなり。又人物の性格に就ても、吾人は旣に幾多の英雄を見、幾多の才子佳人を見、はた夥多の片輪者を見たり。未だ此の小說の人物の如く平凡にして而も面目躍如たる者を見ざるなり。變人と言はれし理化敎師鷲見の性格固より善く、溫良貞淑の家婦お種も亦よく、洒脫にして俠氣あり怜悧にして情理具はる實業家葉山最善し。若し夫れ一

篇の結末の何等段落を劃すべき事件なく、唯怏々の思を殘して之を閉ぢるが如きは、新傾向の一要素にして、其の妙趣を解せんには多少の新教養あるを要す。之を要するに、「多情多恨」は平淡自然、寫實小說家としての紅葉の特質を最明瞭に發揮せる者なり。觀念小說以來、新進作家競うて深刻の想を凝し、先進諸家亦之に動かさるゝに際し、獨り平淡の境地を選びしは、頗る彼が立脚地を見るに足る。彼が此の小說を草するや、曰く、「世間の小說は珍味なり、我家の小說は米の飯なり」と。斯の間の消息を道破して餘ありといふべし。

斯の小說は精練なる言文一致體にて書かれたり。是より先、美妙齋が盛に此の體を用ひし頃は未だ之に倣はざりしが、一たび「隣の女」に成功するや、「青葡萄」「冷熱」等にも之を取り、遂に「多情多恨」の大篇に之を用ひぬ。さすがは詞章の大家、一たび振へば優に美妙齋嵯峨の舍の諸先輩を凌駕し、恰も雅俗折衷體に一流を出しゝが如く、言文一致の最醇化せられたる一體を創め、洗錬平淡、よく斯文の儀表となり、第一期以來の言文一致體も茲に始めて稚氣を脫し、衒氣を離れたる新文章となりぬ。

「多情多恨」の終を告ぐるや、紅葉は更に他の雄篇「金色夜叉」に着手し、三十年一月より『讀賣』に連載せり。高等中學の秀才間貫一、己が寄寓せる鳴澤家の一女お宮に婿たるべく定められ、相愛して歡樂の未來を夢想せしに、美色に誇り富貴を冀ふ婦女通有の缺點は、お宮をして富貴の奴隸となりて貫一を棄てしめぬ。貫一、憤怨深く骨髓に徹し、決然宮と袂を分つ。之を此の小說の序幕たる前編の梗概となす。斯くて傷心の貫一は絕望の餘りに自殺すべきか、はた白刄を宮の胸に擬すべきか。あらず、彼が金に見易へられたる無念は、空しく自殺せんには餘りに强烈なり。彼が怨恨は平凡なる復讐を敢てせんには餘りに深刻なり。彼は人の賴むべからず世の依るべからざるを悟り、乃ち總身の欲を金に集めて世と戰はんと思ひ定め、遂にかの極惡非道の高利貸と爲り了りぬ。かくて貫一は男らしき復讐を加へ、前の失望と怨恨とを霽し得て、然る後正に死ぬべしと慰めたりしも、其の情を矯め己を抑げて魔道を行ふ痛苦と、之よりも遙に大なる失戀の痛

苦とは交々身を責めて、肉痩せ色疲れ、形神共に破れて面を蔽へる陰日に黯きを加へぬ。中編は卽ち此の始末を叙す。宮は貫一に別れてより始めて心の奥に潜める切なる戀を覺りぬ。げに宮は胸中最奥の眞要求を知らざりき。其の心裡には二個の要求ありき。愛と富と是なり。而して二者の一致せざるに臨みてや、一時盲進して富に就きぬ。而も其の富を得了りし時、始めて自己の眞要求は戀人と共に此の富を樂しむに在りしを悟りぬ。今にして悔いぬ。二者共に得んこと難き時、其の孰れを取るべきかを知るの晩かりしを。別れて四年、會貫一に邂逅して心火洞然と燃え上り、赤繩一度斷せしも又繫かるべき時のなからずやはと感じ、遂には彼の人の恨解くべくんば此の富棄つるに惜しからずと思ひなりぬ。斯かる間に貫一は蝟集せる所有誘惑を却け、初一念を徹せずんば止まじと決せり。是後編の大概なり。顧みれば起稿以來正に三年を經、三編四百五十頁に上り、而も尙完結に遠し。貫一の痛苦と宮の煩悶とは如何に發展せんとすらん。

吾人をして紀年の都合上茲に暫く梗概叙述を中止し、顧みて之が評論に移らしめよ。「金色夜叉」の出づるや、着想に空前の異彩あると、脚色の劇的變化と活動とを具ふると、主人公が教養と地位とありて而も青春の情に滿ちたると、詞章の精練絢爛なる時文體なるとは、教育ある中等社會に於ける青年男女の讀者をして悉く之に心醉せしめぬ。先づ著想に就て言はんか。新思潮起りてより露伴鏡花等の作世に行はれしも、露伴の理想小說は膏粱の美味却て重ぬるに厭き、鏡花柳浪等は事物を極端の場合、暗黑の一面に取れるを以て、好奇一時の念を釣り得べきも、永く同情を繫ぎ難かりき。況んやかの狹斜小說に於てをや。是に於てか、小說の內容は益深かれ、理想は實の上に立てる者なれ、取材は中等社會に於てせよ、舞臺と人物とは尙少しく高潔なれとの要求は、讀書社會に普かりき。「金色夜叉」は卽ちこの幾分を滿さんと試みし者なりき。貫一と宮との戀愛、淸き事花袋の小說に見るが如くにして、而も斯くの如く幼稚ならず。貫一が痛憤と無念との反動として夜叉の家業に身を墮しゝは、多少一葉の「われから」に似たりと雖、而もかくの如く單純ならず。特に宮が罪の自覺によりて激烈なる

煩悶に陷るが如きは從來の小說に多く見ざる所なり。思ふに紅葉の才藻よく世運と推移し、泰西小說に於ける造詣亦漸く深く、其の影響の創作に現はるゝこと少からず。罪の自覺に懊む宮と、之を宥恕せざる貫一とは「不言不語」の笠原夫婦に淵源を求むべく、貫一が境遇の大變化は正しく泰西大家の作に其の粉本を求むべきなり。

次に脚色を見んか、この小說は啻に情緒を描けるのみならず、尙事件を寫せり。「多情多恨」の徹頭徹尾情緒の小說なりしに反し、頗る劇的變化と活動とに富み、波瀾の起伏遙に從來の作品に超えたり。後年小說の戲曲化の流行するや、紅葉の小說にして舞臺に上りしは、實に之を以て嚆矢となす。進んで其の文章を見んか、前期以來の西鶴流雅俗折衷體に非ず、「多情多恨」に光彩を放ちし言文一致體に非ず、推敲烹煉の餘に成りたる時文體にして、細寫委曲を極む。

斯くの如きは「金色夜叉」が新敎育の下に立てる青年男女にもてはやされし所以なり。之を「多情多恨」に比するに、總ての點に於て著しき對照を見る。瀟洒に對する濃艶、平淡に對する絢爛、單調に對する變化、沈靜に對する活動、皆是全體に亙る差異なり。二者各得る所あり。軒輊容易にすべきに非ざれども、苦心の度を以てすれば「多情多恨」恐らくは「金色夜叉」の上にあらん。蓋し前者にありて成功の域に達せんは、凡筆の能くすべきに非ずと雖、紅葉の才筆を以てすれば、後者の成功難きに非ざるべし。前者を以て紅葉の所謂米の飯とすれば、後者は所謂滋味なるを免れず。作者自身も亦後者は快心の作に非ずと稱す。且つ其の文章に於ても、作者自身之を『穎才新誌』的なりとして擯け、言文一致を尙んで之を理想的の地位に進めんと企てたりといふ。要するに「金色夜叉」は紅葉の傑作なりと雖、決して其の本領に非ず。得意の作はむしろ「多情多恨」にあらん。

第二節　新體詩

『國民の友』及び『文學界』の詩人が、七五調の短篇を以て新體詩界を領せし時に方りては、斯道の發展は小說界に比して甚しく遜色ありしが、明

治二十九年以來、俄然として長足の進歩をなし、面目頓に一變するに至れり。

是より先、國家的大戰爭ありしや、事に文筆に從ふ者競うて之を謳ひ、『拔刀隊の歌』以來絶えて久しき軍歌再び世に出で、戰爭中の事物を詠める新體詩は、斯道にたづさはる所有文人に試みられたり。然れども、是等戰爭詩歌は、例の如く一時的傾向を帶び、逸作亦遂に出づることなく、影響從つて殘ることなくして其の跡を絶ち、七五調の擬古的短詩再び詩界を領しぬ。思ふに此の潮流の來るや實に久し。遠くは新聲社の詩人より、『國民の友』の詩人を經て『文學界』の諸詩人に至るまで、古語の智識の深淺、之を驅使するの巧拙、措辭の手腕の熟否に多少の等差ありと雖、概して用語聲調に於ける擬古派たるを失はざりき。今や此の作風益發展して詩壇の大勢力となり、遂に『帝國文學』に現はれたる文科大學の詩人に繼承せられ、詩想の清新を加へ、詩形の長大を致すと共に、用語の雅醇なる、聲調の流麗なる、遙に湖處子殘花等從來詩人の作に抽んでたり。

此の時に方り、十四年前新體詩創始の運動をなしゝ外山、山仙士は、再び一新體を提出して一世の耳目を聳動しぬ。二十八年二月『帝國文學』に掲げし「旅順口の英雄可兒大尉」は、實に此の新運動の第一着手にして、續いて「輸卒」「忘るゝな此日を」「我は喇叭手なり」等を出し、尙之に關する意見及び其の朗讀法をも發表せり。而して是等の詩篇たるや、いたく從來のと趣を異にし、先づ七五又は五七一聯の詩形を打破して最も自由なる無律沒韻の散文的句節を採り、次に典雅流麗にのみ傾ける古語を棄てて淡語と現代語とを交へたる日常普通の言語を用ひ、次に作者の創意に出でし獨得の表情的朗讀法を試みて其の詩形と用語との散文的澄淬を除かんと勉め、名けて朗讀體と言へり。

「開闢以來嘗て今日の如く我邦人の名譽の高大なるはなし。

良運なり。幸福なり。此の時期に遭遇せるの日本人は」。(『可兒大尉』)

右は唯冒頭の二行を出しゝのみなりと雖、以て其の一般を推すに足るべし。此の體一たび出でて評壇の排擊盛なりしも、作者は之に屈せず、意見を同

じうする人々と共に『新體詩歌集』を編み、同年秋之を世に問へり。收むる所、丶山仙士作十一篇上田萬年中村秋香阪正臣作長短七十九篇。中數首を除けば、悉く七五の舊調を脱し、而も大多數は「可兒大尉」の型式に依る。

此に於てか、評壇詩形論の沸騰を來し、律語詩非律語詩の論議甚だ盛なりき。然れども、此の論爭は遂に何等の效果を殘すことなく、創作界は依然として律語詩に適き、七五調に歸しぬ。されば彼の井上巽軒が長詩「比沼山の歌」を出すや、亦七五の舊調を襲ひ、革新の範圍を用語の種類と思想の規模とに限れり。「比沼山の歌」は二十九年初『帝國文學』及び『太陽』に掲げたる叙事詩にして、丹後風土記なる羽衣傳說を骨子となし、竹取物語を血肉となし、天人の志は信を本とすといへる思想を一篇の理想となしたる者、完結を見ずして止みしも、篇章節句、形式整齊、空前の長詩なり。作者の詩論を見るに、大體「可兒大尉」の作者に同じと雖、未だ一言七五調の非難に及ばず、又律語拘束の害を說かず。唯用語の豐富遒勁なると旨意の明瞭なるとを以て、擬古派に對する優勝の理由とせるのみ。

外山井上二家の運動は、詮ずる所、擬古派に對する反動なりき。而して其の成果を見るに、前者の朗讀體はやく失敗に歸し、後者の古語漢語俗語の混用も、著しき不調和の爲に、同じく失敗に終りぬ。蓋し、前者は廣義の詩卽ち科學に對立する詩の意義を取り來りて、直ちに新體詩に附屬し、以て散文詩と韻文詩との差別を棄却したりき。否、口演法の如何によりて諧調おのづから生ずと信じ、一定の律語種々に結合して萬人の心律に共鳴する者卽ち詩の韻律なりとはせざりき。此を以て、世の律語詩を主張する人、七五律を以て邦語韻律の主なる者となす人、詩歌は必しも謠ひ物に非ざればおのづから格律を形體に求めざるべからずとなす人、萬邦の詩歌皆一定の韻律と句節とを有するを思ふ人等、總べて此の體を取らず。次に後者は、結構の壯大なる、洵に文壇の珍たりと雖、長詩の價値たる內容の優秀と詞章の精美とに至りては缺陷なきを得ず。和漢雅俗の言語を混用するが如きは、選擇なく醇化なくして成功すること難し。

然らば其の內容卽ち詩想は如何。前者題材の狹隘なる、常に現實の事件に拘泥し、而も概ね戰爭中の事象に屬するを以て、多く恒久の價値なし。彼は人事及び自然の種々相を諷詠せず、幽遠の情感高邁の瞑想等に至りては全然之を缺く。後者の著想はむしろ奇拔なり。神話を題材とするは、本邦詩人に取りては好箇の暗示なり。唯其の構想理に偏し、且其の根本思想を倫理的功利主義に置けるを憾むべしとす。

要するに二家の作品は、遂に大なる成功なかりき。唯彼の長大の詩形を推稱せると、用語に勁健の分子を加へ、聲調に剛强の風趣を添ふるに至りしとは、此の運動が齎しゝ二個の賜なり。

斯かる間に擬古派の詩は、用語の古雅なると、題材の概ね抒情的なると、作風の餘韻を尙べるとよりして。評壇に朦朧體の名を得たりしも、其の詩想は深く主觀界にも入り、詩形は整齊、詩語は醇粹、加ふるに泰西詩歌の趣を帶び、總べて詩的非散文的なること前の二家に超え、擬古派其の物の爲に、大に光焰を擧げたり。武島羽衣は是等詩人の白眉にして、二十八年初「墨染櫻」の一篇を『帝國文學』に揭げて始めて斯壇に現はれ、同年「小夜砧」を出すに及んで、新詩人としての價値、文壇に認められたり。「小夜砧」は西詩飜案の叙事的抒情詩にして、秋夜征人を思ふ少婦の心、惱亂して夢幻の境に入り、旣に戰歿せる夫の靈に伴はれて廢寺の塚中に陷るを叙して、幽婉幻怪の趣に富む。此の類の思想は本邦從來の詩歌には絕えて有るなく、寧ろ國民の情想に遠き者なりと雖、清新溫藉縹渺として幽韻掬すべく、從來の擬古者流が、徒に詞藻の富麗を以て內容の空虛を飾る者に比較して、其の間超ゆべからざる畛域あるを覺ゆ。加ふるに、詞章の典雅精練にして雅言を驅使するの自在なるは、詩壇稀に見る所にして、七五四句一節をなせる者、總べて四十三を以て成る長詩、讀み去りて些の澁滯を見ず、泰西語脈の混用も自然にして調和を失はず。總べて新詩壇に寄與せる一新作風として推稱せらるべき者たり。爾來「詩神」「草刈笛」「月」「人生」等數多の創作、皆溫藉の詩思を發揮して悠容の姿致を凝らし、時に渾然として天衣無縫の概ある者あり。此の如きは羽衣の獨壇にして、當代及ぶ者

無かりきと雖、長所はやがて短所の潜む所、彼れの詩は情感の激越なる者、情熱の强烈なる者なく、其の調往々散文的の弊に陷り、單調の失を免れざらんとす。

鹽井雨江は、二十七年スコットの長篇『湖上の美人』を飜譯し、二十八年『帝國文學』の初刊に、「深山の美人」と題する抒情的叙事の長詩を出して名を江湖に馳せ、其より「深山の花」「故鄕の花」「磯の笛竹」等長短數篇の創作あり。之を羽衣に比するに、吟什の少きだけ題材も少く、詩想亦純古典的にして、西詩の面影を傳ふる所少し。形式に於ても古語古格の分量多きに過ぎ、粉飾の痕少からずして、高雅悠容の姿致に乏し。唯詩形の散文的ならんとするを避くるところに其の苦心と成功とあり。「磯の笛竹」の如き、句節の配置、措辭の選擇に於て、各種の修辭的技巧を用ひ、荒磯岩の松蔭に夜毎に憧れ出でて思を笛竹に吹きすます海人が子を詠じて、情緒の昂揚遙に羽衣等に超え、想髓の舊きに係はらず、一種清新の詩調に入る。雨江の特長茲に在り。大町桂月次いで現はる。彼は寧ろ文章家と稱すべけれど、新體詩に於ても、純主觀の短篇、情感の激越、詩調の昂揚を以て勝る。桂月の特長は詩形に非ずして、詩思の純眞情熱の强烈に在り。其の他杉烏山等二三の作家あり。皆擬古調を取りて王朝の麗藻を學べり。

以上は『帝國文學』の詩人の主たる者なり。顧みて之を概觀するに、純主觀の作甚だ稀にして、概ね叙事的色彩を帶び、小說的趣向を取りて之を律語に述べしが如き者少からず。地の文と詞とを分ち、詞は對白獨白並に之を用ふるが如き手法は、最も普通なりき。蓋し彼等が專ら用ひし雅語の性質として、最近の思潮に觸れたる主觀界を表現するに足らず。事を敍し景を描くには大なる缺陷を感せずと雖、一旦內觀の深きに入り瞑想の幽なるに至らば、到底適切明快なる表現を得ること能はず、從つて卓逸なる抒情詩を見ること難し。かくの如きは擬古派の發展に對する致命的缺點なれば、羽衣雨江を頂點として其の發展は長へに阻止せられぬ。

然れども擬古派の努力は、非律語論に對する律語論の勝利を確實ならしめ、爾來崛起せる新詩人は悉く律語の門に出でぬ。二十八年より三十一年

に至る四年間、特に二十九年は斯道勃興の機にして、新詩人は輩出し舊詩人は奮起し、各種の文學雜誌に現はるゝ創作甚だ盛なりき。以下次を追うて之を列叙せん。

用語及び聲調に於て擬古派に反對の態度を取る者を歌人與謝野鐵幹とす。鐵幹は二十九年短歌と共に『東西南北』の一集を公にして、始めて詩壇に上りぬ。集中の作は韓山羇旅に關する者多ければ、概して風雲の氣ありて神往の詩趣なし。三十年再び詩集『天地玄黃』を出し、豪語奇句一段の進境を示しぬ。「山中の石」「乾坤寥廓」「海嘯」「人鬼」等集中の主たる者、概ね理想的怪奇を弄す。就中「山中の石」は、深山の白雲に獨り寢ねたる太古の石の述懷に托して、「星の都に在りと聞く、一百五絃の玉の琴、嵐の神の音につれて、一時に裂くの概あらむ」詩人の胸懷を詠出す。總じて彼れの詩、勁健を求め豪壯を好み、客氣橫溢して却て淺俗に陷ること其の和歌に同じ。所謂男子の歌なるべけれど、固より高遠の詩想あるに非ざれば、擬古派の未だ開拓せざる抒情の好詩境に足を入れながら、世上一時の事象に拘して永遠の姿致に乏し。唯漢語を交へ漢語脈を採りし一事は、宿生硬を免れずと雖、擬古派の平弱單調を救ふに多大の效果ありき。

歌人鐵幹に續きて、俳人子規も亦新體詩に指を染め、二十九年竹の里人と名のりて『日本人』に現はれぬ。「鹿笛」「父の墓」「小蟲」「四季」「洪水」等、獨得の俳想を長詩に托し、中には全く俳句を新體詩にしたるが如きあり。されば詩人としての子規の得喪は一に此の點に歸す。總じて彼れの作、意洒脫にして語緊密、措辭弛廢なくして聲調常に張り、好んで自然を詠じ、多く客觀叙法を採り、觀察微にして且新なり。故に想に陳套なる少く、形に散文的なる弊なし。然れども規模狹少なる者多く、著想卽興的に偏し、最も暝想を缺く。三十年に入りて押韻論を唱へ、其の作例をも示したりしが、其は十五年の昔、『新體詩抄』に試みられし阿行五音の脚韻に過ぎざりしかば、幾もなくして事止みぬ。

前期以來の作家にして餘勢を今日に振ふ者を美妙齋及び『國民の友』の詩人となす。美妙齋は「韻文論」以來逸作なかりしが、二十九年雜誌『大

和琴』に現れ、翌年「魔界天女」を連載して詩壇に異彩を放ちぬ。數回に亙る長篇、精練の措辭、凄婉の情思、當年の意氣を偲ばしむ。『國民の友』の諸詩人は湖處子を始として、湯淺半月、嵯峨の舍等、前期に比して進歩著しからず。抒情の短篇、平淡にして規模小に、情感女性的にして想像亦稚氣を脱せず。詩形に於ても優雅の辭を操れども『帝國文學』一派の絢爛に及ぶべくも非ず。詩調平弱散文的の弊最も甚し。唯可憐の感情を和平の言辭に寫すを以て其の特長となす。三十年夏、湖處子嵯峨の舍は、國木田獨歩、松岡國男、田山花袋、太田玉茗と共に詩集『抒情詩』を出しぬ。

詩風に於て『國民の友』一派と正反對に立つ者を『早稲田文學』の詩人、即ち三木天遊及び繁野天來となす。共に小説家として二三の作ありし者。夙く新體詩に入り、二十八年以來、天來は「笛の音」「雨聲鳥語錄」等を、天遊は「紫姫」「月の國」等を出し、三十年夏合集『鈴虫松蟲』を公にせり。收むる所、天遊十九章、天來二十章。概して詩思情熱に富み、青春の客氣に滿ちたり。初は當時の流風に從ひ、抒情的叙事の長詩に傾きしが、後漸く主觀抒情を主とするに至れり。詩形は五七の韻律を好み、渾成の詩品に遠けれども、概ね調強くして弛廢なし。用語に於ては最も自由なる意見を有し、漢語俗語併せ之を用ひんとすること鐵幹に似たり。

『文學界』の詩人は、由來詩風の清高を以て知らる。情操清婉、詩品高潔、地の濁穢に在りて天の淨界を憧憬するが如きは、即ち其の特色なり。星野天知、島崎藤村、平田禿木、戸川秋骨、樋口一葉、田山花袋、松岡國男、馬場孤蝶、太田玉茗等、皆悲痛哀絶の調を以て自然を語り、聖愛を歌ふ。就中詩人として知られし者は、藤村花袋國男孤蝶玉茗等にして、花袋國男玉茗は『國民の友』にも出で『抒情詩』に收めらる。其の中にも國男は詞藻穩健にして想像亦溫藉、『抒情詩』の白眉なり。孤蝶は未だ特筆すべき無く、藤村此の間に立ちて恰も鷄群の孤鶴たり。

藤村の詩を『文學界』に試みしは、當期初頭以來の事なれども、其の名を斯壇に現せしは、二十九年後半に屬し、「一葉舟」「秋の夢」と題せる數篇の抒情詩に、一新聲調を出して時人を驚かしゝよりなり。就中詩人中野道

遙を悼める「哀歌」、朝と暮とを詠じたる「二つの聲」、戀さま〳〵の姿を歌ひし「こひぐさ」、星影水の如き夏の朝、匂ふあやめの邊りに、妻鳥を得んと鬪ふ二の雄鷄を詠じたる「鷄」の如きは、詩壇嘗て見しことなき清新の格調思想なりき。爾來「薄氷」等の諸篇を經て、三十年春「天馬」の傑作を『文學界』に出しぬ。「天馬」は序、雄馬、雌馬の三章、二百三十句に亙る長詩にして、星影夜な〳〵動き、奇瑞箱根の山に現はれて、蘆の湖の邊り村の南北に賤が屋の片廂をかりて人の世に生れ出でし雌雄の天馬を詠せる者。序に於て此の由來を叙し、「雄馬」の章にては、朝に富士の雪を蹈み夕に御嶽の岩を超え、青雲に嘶きて電影を追ふべき天馬の身を以て、暫く槽櫪に委して主人に伴はれ、今し箱根を下りて遠く近江の湖畔花橘の蔭を行くを詠じ、次に「雌馬」の章にては、青毛優しき牝馬が蘆の湖を去りて遠く陸奥の野に下り、四時の勞役、冷く情なき人間に驅使せられて、頻りに天の靈泉を戀ひわぶるあはれの姿を歌ふ。想像雄偉、詞章清新、當代詩界の通弊たる纖弱弛廢の想調を擺脱し、理想幽遠、詩境高潔、抒情詩壇の一大進運を劃せり。しかも彼は更に進んで「深林の逍遙」を『帝國文學』に寄せたり。陽春花深く霞かをる頃、斧鉞未だ入らざる深林の綠を分け、悠遊自適、靜に自然懷裡に同化し去るが如き詩境を寫す。深林の中山精と木精とありて相呼び相應へ、到る處春の德を頌し、春の意を語る。一誦先づ幽韻人を襲ふ。

花のむらさき葉の綠、うら若草の野べの糸、工を盡す大機の　梭の林に來れかし。

古き落葉を柔き　青葉の蔭に葬れよ、冬の夢路を覺め出でて、春の林に來れかし。

山風一たび渡れば、簫管おのづから鳴り、白妙の雲峯を分れて樹々に棚引く。巖を攀づれば脚下忽ち激湍噎嗒の聲あり。既にして彩雲見る〳〵色變る夕まぐれ、林中の湖邊に出づれば、春日水に沈みて殘紅紫に交り、遊子自ら暮色一樣の彩りに沐し去らる。斯くの如きは詩の大要にして、總べて二百餘句、自然を描きて悉く生命を賦與し、高韻清致、人をして神往せし

む。「天馬」の奔放と崇高と無けれども、沈靜と幽遠とは遙に之に優り、詞章の圓熟亦遠く之に過ぐ。蓋し新體詩創始以來の名篇にして、詩人としての藤村の名嶄然として卓出しぬ。同年秋一集を結びて『若菜集』と題し、長短五十一篇を收む。形式多樣にして句節の構成單調ならず。用語は概ね雅醇なるを選びしも、特に平易なるを用ひて耳遠きを取らず。但し其の修辭に新工夫あるを以て、清新の聲調獨得の妙あり。歌ふ所の題材は自然と戀愛との二方面ありて、自然を詠せる者は、「深林の逍遙」を初として、「秋風の歌」「明星」等、最も誦すべく、特に「明星」は、清高無比、短詩中の珠玉にして渾成の詩域に近し。戀愛を詠せる者は、熱情熾烈、從來の詩人の如く怠慢なる戀に非ず。「おくめ」「四つの袖」等は其の代表と見るべく、總べて英國近代のラファエル前派の面影を傳ふ。思ふに藤村の作は、詩壇最も西洋趣味に富める者なるべし。

藤村起りて幾くもなく、又一個の藤村現はれぬ。三十年『新著月刊』に「花密藏難見」と題して短詩數篇を公にし、清婉の調を以て可憐の情操を歌ひ出でたる薄田泣菫是なり。其の特色は「紅絹袖」「夕」等に見ゆる如く、自然懷裡に戀愛の慰藉を求むるに在り。此の點に於て確に藤村の一面を傳ふ。唯夫れ泣菫は藤村に比して情緒一層可憐なるだけ熱烈の度低く、形式の變化措辭の技巧を求むること多きだけ神韻に乏しく、斬新の譬喩を用ひ各種の語彙を取らんとするだけ聲調を傷くること多かりき。獨り彼が試みに成りし八六の調は一種蒼涼の趣を具へて幽婉の詩思を傳ふる所なしとせず。尙後の發達に徵すべし。

之と相前後して出でしは土井晚翠なり。二十九年の末、「紅葉青山水急流」及び「枯柳」を『帝國文學』に掲げて、夙に一種の新調を示しゝが、三十年より三十一年にかけて「希望」「造化妙工」「破鐘の響」「山おろし」「萬有と詩人」「羌笛餘韻」等、頻りに瞑想的抒情詩を出し、世評嘖々たりき。是より先き『帝國文學』の詩人相次いで潛み、羽衣等二三の作家、僅に擬古派の名殘を留むるのみなりしが、茲に又新作家を興し、而も其の作風全く異にして、前者の擬古的にして動もすれば朦朧の嫌あるに反し、後者は泰西

詩想を咀嚼して之を清高の大和文字に寫し、思想用語共に明晰爽亮なり。又前者の抒情は淺近平板にして、深刻の煩悶も向上の憧憬も無かりしに反し、後者の抒情は高く理想界に入り、常に憧憬の眼を天の一方に注ぎ、進んで瞑想思索の哲學的風趣を求む。且つ漢語漢文脈を操つること頗る巧妙にして、詩調爲めに遒勁、前者の女性的なるに反して男性的光彩を帶ぶ。蓋し晩翠深く泰西文學を愛し、日夕名家の詩篇に親しみ、而も又漢詩國歌を誦するを怠らず。瞑想思索の結果を詩篇に構成するに當りて、要する所の抽象語は、概ね漢語に求め、更に洋語を以て之を補ふ。斯くの如きは啻に『帝國文學』の詩人の中の異彩なるのみならず。所有新體詩人の雋逸たり。

晩翠の特色は瞑想思索に在り。瞩目萬象の中、常に一種神祕の意を觀せずんば止まず。彼れ自然を詠じ、人生を歌ふ。而も其の描寫に止らずして或意義を其の後景に探る。彼は美神を謳歌せんよりは寧ろ造花の幽を闡かんとするなり。「希望」「造化妙工」「雲の歌」「星と花」「夏の夜」「墓上の花」「登高」「鷲」等に見えたる自然觀、「夕の思」「光」等に見えたる人生觀、及び「詩人」「萬有と詩人」に見えたる詩人觀を窺はん者、何人も晩翠の理想的傾向の一斑を知了すべし。若し夫れ「暮鐘」の一篇に至りては、詩人としての作者の特色を名殘なく發揮せる者、落想文辭聲調、一として具はらざるなく、沈痛雄渾、晩翠が作中の絶唱なり。此の詩は三十一年春『帝國文學』に掲げし長篇にして、十七節百三十句に及ぶ。暮色降り來りて世上千萬の思を一樣の暗に包まんとする時、一打の鐘聲に群がり起る詩人の思は何ぞ。鯨音一過、餘韻浮世の耳に絶ゆるとも、「知るや無象の天の外、下界の夢のうは言を、名殘の鐘に聞きとらん、高き尊き靈ありと」。靈よはた何とか之を聞く、「下界の暗は厚うして、聖者の憂絶えずとか、浮世の花は脆うして、詩人の涙涸れずとか」。げに此の鐘聲は、濁世の福音、靈鷲橄欖の法の聲なり。願くは理想實現の曉に至るまで、絶えずも響け長へに、天籟地籟身に兼ねたる夕入相の鐘の聲よ。斯くの如きは「暮鐘」の神髄にして、又晩翠の詩想の精粹なり。思ふに彼れの詩、底を敲けば必ず厭世の響あり。曰く

「自然は笑ひ人は泣く」。曰く「人は死と疑との子のみ」。而も詩人の向上的憧憬は茲に起るなり。思へらく、かゝる人生を厭離して何所に適くべき。戀愛の花園に逍遙せんか。世に不變の戀なきを如何せん。現實以外永劫不變の大理想に向つて精進せんか。其の容易に企及すべからざるを如何せん。頼に人に想像の力あり。想像に成り出でし詩歌あり。卽ち之を以て理想實現の機至るまでの慰藉となし、暫く想像の翼を張つて光明の天國に神往し、美妙の詩歌を玩賞して永劫の樂土に逍遙せんと。是れ晩翠の作品に通ずる根本思想なるに似たり。

以上晩翠の詩想を說きて其の明側を盡しぬ。然れども暗側の之に伴ふ者亦少からず。夫れ晩翠の詩は勉めて哲學的宗敎的ならんことを求めたるが故に、多くは理知に走り、描寫せずして說明し、謳歌せずして論述す。されば其の調常に冷靜にして情火の熱烈なる者絕えて無し、而も彼れの思索は單純なるを以て、究竟詩想一たび定まるや、千篇唯同一の著想を繰り返すに過ぎず。且其の文辭も、明澄の極、餘韻を缺き、聲調も奇拔の利ある

と共に圓熟を缺くの害あり。然れども新體詩有つて以來始めて得たる瞑想詩人なるを以て、彼が詩壇に於ける地位甚だ輕からずと言ふべし。

顧みれば我が新體詩も、三年が間に長足の進步をなしけり。湖處子殘花より藤村晩翠に至るまでの想形の進步洵に驚くべし。而も其の間輩出せし詩人、概して壽命長からず。自然淘汰の鐵鞭に驅られて相次いで斯壇の外に逸し去り、殘る所は健鬪の勇士藤村晩翠の二家となりぬ。今や二家の詩風江湖に布き、青年輩の文學雜誌たる『文庫』『青年文』及び『新聲』等に見えたる年少詩人の作品は、曩に羽衣の麗藻を揮ふや、靡然として之に赴きしも、今は卽ち藤村調晩翠調となるに至りぬ。要するに、新體詩は草創日尙淺く、正に試驗時代に屬し、從て試み、從て驗す。一として恒久の威力あるものなし。唯藤晩二家のみ望を未來に屬せしむる者あり。請ふ。其の後の發達を見ん。

藤村が三十年以後の作は、纂めて翌年刊行の『一葉舟』と『夏草』とに在り。彼れの詩想は『若菜集』に比して著しく面目を改めぬ。『一葉舟』卷

頭の『白磁花瓶の賦』は、失戀の恨綿々として盡きざる若き藝術家が、萬斛の悲涙を一技にこめて作り出でし純白の花瓶を詠じ、情緒清婉楚々として人を動かす者なるが、一方失戀の恨を抒べて他方藝術の歎美に及ぶ所、頗る從來と趣を異にす。從來の藤村は戀を謳ひ愛に憧るゝ者なりしが、茲に至りて戀の破れ易きを恨み、却つて永劫の美常世の歡たる藝術に憧る。爾來彼は藝術愛慕の詩人となり、歌ふ所常に其の風韻を帶ぶ。勿論「驚の歌」の如きは、千里の蒼溟、忽ち黑雲湧き疾風起り、怒濤紫瀾を捲いて白沫四散する所、磯際の岩角に暫し身を寄する老若二羽の驚が、健翼一搏烈風に逆うて萬里の雲を追ふ光景を叙して、崇高雄渾、「天馬」と併び立つて圓熟は之に勝り、晩翠の諸什と拮抗して迂餘曲折は之に優り、其の風趣を察すれば、正に『若菜集』の遺韻を傳ふ。然れども、「晩春の別離」「曉の誕生」「月光」等に至りては、何れも藝術に對する無限の愛慕を表はして一種の特色を帶ぶ。試みに「晩春の別離」に詠せる詩人を以て晩翠の「萬有の詩人」に於ける詩人に比し、「曉の誕生」に於ける嬰兒を以て晩翠の「小兒」に比すれば、藤村の面目愈〻明かなるべし。かの皎月千里の清光を歌ふにも、一樣の彩りを以て萬物を理想化する神祕の色を謳はずして、百代易らぬ月影に藝術の永劫を觀じ、深夜の月光に藝術國の靜寂を思へるが如き、以て其の本色を見るに足るべし。

此の時に方りて彼れの詩風は再び轉じ初め、空想的藝術的の世界より出でて實際的自然的の生活に入りぬ。『夏草』收むる所の「新潮」と「農夫」とは明かに之を示す。「新潮」は漁夫の生活に托して人生の行路を描き、最後に處生の方針を示せる者。幼稚なりと雖、作者の新傾向を見るに足る。「農夫」は序、及び上下二卷、八章より成り。一千句に垂んとする叙事的抒情詩にして、新詩壇空前の長篇なり。利根河畔の農夫鍛工の女と相思ひ、征清の役に召されて征途に上り、三年軍終へて歸れば、少女が離恨に悶死せしを聞き、絶望の餘り、身を雲水に托せんと決せしが、會〻鍛工が愛子を失へる悲愁を勞働に慰めて奮勵するを見て、飜然昨非を悔ひ、再び利根川邊に己が生業を勵まんと思ひなるを叙し、前者より更らに一歩を進めたり。

時恰も『文學界』の倒るゝに際し、藤村亦信州に入りて實際的生活を營むに至りしかば、其の『新小說』に寄せし吟詠益實際的自然的となり、『文學界』時代の面影復見るべからず。當時の詩集たる『落梅集』を見るに、感情生活よりも意志生活を尙び、藝術戀愛を歌はずして汗額の事業を說き、空想の叙述よりも現實の描寫を取り、仰いで翹望せずして俯して慰藉す。總べて感興の湧くがまゝに任せずして、考察反省するを其の特徵となし、通篇著しく沈靜の調を帶ぶ。「壯年の歌」及び「勞働雜詠」は此の集の代表と見るべし。されば偶〻戀愛を歌へる「胸より胸に」の如きありと雖、戀愛其の物は、もはや『若菜集』の其れに非ずして、人生の戰線に立てる者の唯一の慰藉となれり。茲に至りて藤村の詩想の中心は事業の謳歌となり、生命の戰鬪は其の套語となり、明澄透徹、昔日の朦朧なく、靜平なる觀察頗る客觀的に入る。從つて其の文辭の如きも、青春の心情を踊らしむる詩的魅力なく、絢爛の賦彩既に見るべからず。唯彼が胸奥に潛める沈靜の詩思を抒べし者は、淡彩の中、大雅の光あり。「小諸なる古城のほとり」及び「寂寥」など、清楚の賦彩奕々たるを見る。三十四年秋『落梅集』を公にして後、復歌はず。

晩翠は三十二年春、詩集『天地有情』を刊しぬ。收むる所、長短四十篇、『帝國文學』『反省雜誌』等に揭げし從來の作の全部なり。中に、「馬前の夢」「星落秋風五丈原」の二長篇あり。彼れの主題及び作風の一變せんとするを示すこと、藤村の「新潮」と「農夫」との如し。「馬前の夢」は、不能の文字を笑ひし蓋世の英雄も「玉樓の春短くて、魚龍淋しき秋の水」「其の常勝の劍折れて、獨り小島の波枕」、疾風暴雨の夜更けて、終焉の床に橫はる拿破崙を歌ひ、「星落秋風五丈原」は集中の最長篇、六章三百五十句に上り、南陽の臥龍草廬を出で、天下を三分して王者の師を學びしも、成敗遂に天の命、一代の希望未だ成らずして、祁山の陣營、大星俄に落ちし諸葛亮を詠じ、共に偉人の歎美と運命の哀傷とを抒べて、悲壯沈痛を極む。其の形式に於ても共に三段に分れ、最初終焉の床に在る偉人を描き、中段作者得意の叙事的技巧を以て一代の功業を叙べ、結ぶに詠歎と憑弔とを以てす。

結構雄偉、詞藻壯麗、抒情叙事併せ得て手腕頗る見るべし。之を從前の作に比するに、厭世懐疑の遺韻尚響きて、而も理想を戀ひ光明に憧れし面影、復見るべからず。彼は理想の實にし難く、不朽の求むべからざるを史上の事實に見て、俯仰今昔、遂に感傷の悲音を洩せり。爾來晩翠は破られたる理想を悼む詩人となり、第二詩集『曉鐘』(三十四年刊)の各篇、概ね哀絶の調を帶ぶ。「萬里長城の歌」「秋興八首」「惆悵吟」「黑龍江上の悲劇」等、是が代表者たるべし。「萬里長城の歌」は秦皇の覇圖空しく消えて獨り史上の名を殘すのみなるを傷み、二十朝の興廢を閲せる古壁、今既に清室の運命を語るを哀しみ、「秋興八首」は悲風蕭殺の夕、詩人自身を歎き、故郷を偲び、母國の詩運を愁へ、海外の詩國を慕ひ、友を惜み、昔を戀ひて、痛切なる哀傷の聲を放ち、「黑龍江上の悲劇」は、三十三年北清戰役中、滿洲國境に於て演ぜられたる悲劇に憤を發し、文明の理想の爲に泣き、人道の大義の爲に悼みて熱烈奔放を極む。共に集中の長詩にして、措辭益〻圓熟に、詩形益〻整齊、修辭上の進歩著しと雖、青春の翹望を披瀝したる頃の如き豪華の風調なし。

「弔吉國樟堂歌」「富嶽の歌」「登高賦」は集中の絶唱なり。前者は、芳蘭花脆く、運命の神に嫉まれて萬古の恨を殘せる故友を弔ひ、孤燈の下、「靜寂」と「暗」との中に、瞑想の眼を閉ぢし一夜の思を叙し、清怨綿々、至情切切、加ふるに詞藻の富贍を以てし、洵に好哀歌なり。「富嶽の歌」は渾沌の世に湧き出でて太古の雪の膚清く暗を照して立てる姿不變の富士の高嶺に、天上の星永遠の光を送りて露と凝らしめ、其の星の精銀漢と共に下りて嶺上の明水となり、餘滴靜かに谷あひに流れて花を誘ひ香を浮け、幽泉細流集りて大河となり、滔々東海の波に注ぎ、南溟の風北溟の雲、群がる友を呼びて靈山に集る處、詩神降りて不朽の調を奏づるを叙し、玲瓏の想像、崇高の風趣、壯麗の詞藻、集中に異彩を放つ。「登高賦」は吹き去り吹き來る無限の秋風に對して、十九世紀の禍惡悉く吹き拂ひ、新に來らん二十世紀の世をして光と愛と詩との世ならしめんことを祈りし者にして、沈靜の想、莊嚴の辭、老熟の域に入る。而して「弔吉國樟堂歌」は、流轉の相を

觀じて懷疑に陷り、哲學を彈じ宗教を勸する所、依然として感傷の詩なりと雖、末段に至りて、靈の光を蓋ふ僧俗の聲を棄てて沈思瞑想すれば、有象世界の遙あなた、美妙圓滿の無象世界ありと說いて、從來甞て有らざる慰藉を含めり。爾來理想實現の時あるべきを信ずるに至り、「富嶽の歌」にては、靈山の曙光を見て萬邦比類なき理想國を我邦に現出せんことを信じ、「登高賦」にては、更に進んで理想界の實現を渾球上に見んことを無窮の靈に祈り、「愛の神、進化の神、詩人の神、……願くは爾の呼吸、天の果てより地の隅に吹き來る無限の風となりて禍惡盡く吹き拂ひ、光と愛と詩とをして永く此の地を掩はしめよ」。と呼べり。卽ち昔日理想の惱みは化して現實の惱みとなり、無象淨土の希望は變じて現象淨土の希望となりぬ。

上述諸篇は何れも『曉鐘』集中の長詩にして、其の短詩は思想修辭共に比較的精彩なし。詩形に於ては、七五二句を連ねて一行をなせる一體を始め、種々苦心の痕を止め、「萬里長城」以下勉めて變化ある詩調を得んと試みぬ。七五二句一行の詩形は、夙く二十八年羽衣の「月」に現はれ、藤村亦「鶯の歌」に之を試みし者なれば、晩翠の新案に非ざれども。最も多く之を用ひしは彼なり。「登高賦」に至りては全く七五の單調を脫出し、前條抽出の斷片に見えしが如き新形式を試み、以て一種蒼凉の調を出せり。而も藤村の『落梅集』に於けるが如く、『曉鐘』以後暫く高遠の聲を收めぬ。

二家の盛なるや、「花密藏難見」の作者泣菫も、亦『新著月刊』誌上、一種の聲調を以て可憐の情緒を歌ひ、頗る江湖の矚目を得、三十二年末、遂に一集を公にして『暮笛集』と言へり。試みに其の詩想を覗ふに、彼も亦他の詩人の如く、最初に、現世に對する不滿、俗人に對する嫌厭より、懊惱懷疑の雲に閉されて茲に一種の翹望を生じぬ。晩翠は斯かる時、仰いで天上雲のあなたに無窮を戀ひ、未來の世に樂土を夢想して心を遣りぬ。然れども泣菫に在りては、所謂現世とは趣味なき世、所謂俗人とは趣味なき人にして、彼れの懊惱は主として趣味なき人生に對する嫌惡の情より起るに過ぎず。されば彼れの翹望は甚だ簡素にして、單に趣味ある人生を實現せんと冀ふに止まる。然らば卽ち人生の趣味とは何ぞや。愛と詩と、是の

み。彼が憧憬の歸着點は卽ち此の二者に外ならず。卷頭「詩のなやみ」旣に此の思想を體現し、次いでは「星」「鐘」「蟋蟀」等に詩の憧れを示し、「琥珀」「玉腕」「紅絹袖」「夕」等に戀の憧れを示し、更に其の後の什に於て此の思想を明白ならしめたり。就中「兄と妹」一篇、詩歌の人なる兄と才敏く情切なる妹とを描きて、最もよく彼れの詩想を代表す。「尼が紅」は四行節百五を重ねたる集中の最長篇にして、浮世ゆかしと思ひそめし若き沙尼が、寺を遁れて若き戀に惱む綿々の恨を叙して精細を極め、少しく冗漫の弊ありと雖、想形共に集中一方の代表者たり。

泣菫の戀を語るや、熱情時に奔逸して頗る藤村の『若菜集』に似たり。さはれ、彼れの特徴は熱烈なる感情に非ずして可憐なる情緒に在り。かの「村娘」「鶺鴒」などに現はれし同情、「古鏡賦」「盃賦」などに現はれし想像、「秋の歌」「燕の賦」に見ゆる自然感情等、其の著しき者なり。就中「燕賦」は、此の點に於ける代表作品にして「圓き頭は葉隱れに、かゝる葡萄を見る如く、胸の和毛の白妙は、女子の恥づる肌に似て、瞳の色のらうたさは、潮に澄める一つ星、上毛の艶の紫は、朱冠に彫れる雲母」の如く、やがて八重の潮路を越えぬべき力ある翼を打ち、霞める青柳に新月を呼び出づる清き音に歌ひ出でたる燕子に寄懷せし者、姿態文辭最もよく整ひ、集中の佳作なり。

『新著月刊』倒れて泣菫は『新小說』『明星』『小天地』等に其の詩を掲げしが、『落梅集』『曉鐘』の刊行と同じ年に第二詩集『行く春』を出しぬ。詩想は前集と大差なしと雖、其の懊惱は空想より來ること少くして、現實の上に存すること多くなりしは、『暮笛集』に見ざる所、頗る晩藤二家の傾向に似たり。特に時事問題に憤を發して「遣憤」と「あゝ杜國」とを作りしは、彼れの現實的傾向の極端に走りし者なるべし。爾來作者の翹望せる「新たなる日」は、愛と詩との滿足せられたる華やかなる若々しき趣味の世より、轉じて平和の世特に平和の田園生活となれり。「牧笛」より始めて、「夕暮海邊に立ちて」「夕の歌」「小鼠に與ふ」「郭公賦」「金絲鳥を放つ歌」等は、卽ち平和の理想を謳ひし者。「野に立ちて」及び「南畝の人」に至りては、全然

農民生活の讃美にして、藤村の「勞働雜詠」と歸趣を一にす。

以上述ぶる所を通覽するに、泣菫の詩風は、大體に於て藤村の後影を追ふに似たり。而も其の可憐なる情緒を抒ぶる一面のみを傳へて、「天馬」「鷲の歌」「深林の逍遙」の高渾なる情調に及ばず。唯「石彫獅子の賦」の一篇、長鬚背に卷き、廣胸强く張りて、夏の日盛り、光を浴びて立ち、威風百獸を慴伏すべき石彫獅子の雄姿を寫し、進んで藝術の不死無窮を叙べて、雄偉壯麗、彼れの作に始めて見る所、宛然藤村が『一葉舟』の詩想なり。

詩形に關して、作者は諸般の試みをなし、『暮笛集』の八六調以外、種々變化ある律格を用ひぬ。但し一句一行概ね短く、晩翠の漸く長からんとするに反し、漸く短からんとする傾あり。之を學ぶ者、青年の間に少からざりき。

當代の詩壇、三家を除けば他は皆振はず。從來の作家にては、鐵幹新詩社を起し『明星』を發刊して短歌及び新體詩に勉むるあり。三十四年詩歌合集『紫』を公にせり。後進にては、高安月郊、蒲原有明、兒玉花外、岩野泡鳴、今村敬天等あり。月郊は、三十三年小說詩歌合集『金字塔』及び『夜濤集』を出し、特有の聲調を以て勁健の詩想を歌ひ、有明は、『帝國文學』『明星』『文庫』等に現はれしが、三十四年『片袖』に揭げし「高潮」最も稱せらる。花外は集『風月萬象』(三十二年)を出し、泡鳴は『露霜』(三十四年)を公にし、敬天は同じ頃『短笛長鞭』を出せり。又かの『文庫』の詩人河井醉茗は『無弦弓』を刊行せり。三十四年には詩集の出づること盛なりしも、皆前年の作を編みし者に過ぎず。實際に於ては、詩壇沈降、新興の氣運一段落を告ぐるに至れり。

第三節　戲曲

明治二十年前後に方り、文學界の新潮として其の勢を逞うしたる寫實主義が、戲曲演劇界に入りて誤つて邪徑に走り、性格寫實精神寫實の旨を離れて、徒に事件寫實衣裳道具の寫實に流れたりし由は既に述べぬ。又かの歐化主義の反動として起りし國粹運動と同樣の原因より來れる保守主義の

運動が、從來の夢幻史劇を推奬して斯界の前途を妨碍せることをも說きぬ。二十六七年に至る劇壇の形勢は、要するに此の二流の消長に外ならざりしなり。然れども少數の識者は、之に滿足する能はず、去つて新戲曲を求むるの念甚だ切なりき。前期劇界を叙し終るに方り、一言云ひ及びし坪內逍遙の評論は、卽ち此の少數者を代表する者と言ふべし。

二十六年秋逍遙は『早稻田文學』の論壇に立ちて「我國の史劇」を論じ初めぬ。彼は先づ本邦古來の史劇作者を擧げて其の作品を批判し、併せて自家の史劇に對する見解を述べたり。曰く、巢林子の史劇は一種の夢幻劇にして、單に眼に愬る技術としては、巧妙驚くべきも、嚴密に言ふ史劇としては、事件荒唐、人物單純、到底今の觀客をして歷史的幻影を起さしむるを得ず。唯、人情を描寫せんが爲に、時所と人名を過去歷史に藉りしに過ぎず。默阿彌の史劇は其の作意過去の事相人物の再現に在るを以て、多少歷史的寫實に近づけりと雖、彼や素と天禀の世話物作者にして、其の學殖識見、共に時代物英雄物作者たるに足らず。彼は僅かに野史俗說を典據として史實人物を思想し、而も其の直覺は現在以外に及ばざるを以て、時勢境遇地位器度人情及び風俗を異にせる過去の事相人物を寫して正鵠を得んこと、到底望むべからず。況んや治亂興亡の理を繹ねて英雄の心事を描出するをや。學海の史劇に至りては、過去再現の主義を極端に解釋して、單に正史の事實を其の儘に取り、道具衣裳臺詞等盡く之に依り、言はば非劇的非詩的の考古博覽會なり。蓋し脚本の精髓は個々人物の性格を因となし、境遇を緣となし、此の因緣によりて成れる著大なる業果を描き、以て人事の眞相を現はすに在り。從つて史劇は件の人物を過去の特殊なる境遇の中に立たしめ、以て人事の眞相を過去事實の中に表現せんと力むる者のみ。さればかの史上の事相と人物とを寫實的に舞臺上に現はすが如きは抑も末なり。史劇の過去相は普通の觀者をして過去の幻影を起さしむれば卽ち足る。學海の如きは此の本末を顚倒せる者なり。櫻痴の改作史劇は言ふに足らず、其の新作史劇は唯史的人物を取り來りて、之に當代俳優の個性を與へたるのみ。作者の筆に上りし史上幾多の英雄は、盡く之を演ずる一

俳優の儀型になり了らずんば止まず。加ふるに作者自身の影子を帶びて、俗智世間智に長け、明察幾微に通ずる人物ならざるなし。彼等は現在を洞觀し、未來を先見し、奇禍偶福、忽ち其の由來を察し、他人心事の隱微忽ち之を忖度し、事の成敗は一に此の世間智の優劣によりて決すとなす。斯くの如きは獨り史上の人物と異なるのみならず、所有人間の通有性を失ふと。次に逍遙は新史劇に反動して起りし夢幻劇崇拜の潮勢を摧かんと勉め、夢幻劇の形式美は近松當時の時勢に在りて始めて發揮すべき者なりと論じ、最後に將來の改良策に及び、從來の劇の根本的缺點は、第一叙事詩の體と劇詩の體との混淆、第二性格を無視して事件を主とせる事に存するを以て、先づ此の點に改良を加ふべしと說き、大に泰西式の性格劇を主張せり。

逍遙が史劇論は、げに斯壇の新聲にして、性格劇科白劇を鼓吹せる點に於ては、全然斯道の『小說神髓』なり。文學革新の著手せられて茲に十年、演劇革新の合理的に近き論議は始めて世に出でぬ。是より先き『柵草紙』の鷗外、穩健の思想と妥當の見解とを以て斯界を警醒せしも、彼れの態度は學者的批評的にして、逍遙の如く主張的鼓吹的に非ず。從つて其の江湖に對する影響遂に此の如くなる能はざりき。逍遙は、其の著眼の卓拔斬新なる、其の行動の華やかにして鼓吹的なる、假令多少の缺陷誤謬あるを免れずと雖、文壇の先覺評界の明星として、卒先の功著しき者あり。

然れども、史劇論の評壇に與へし影響の大なりしに反し、作劇乃至劇場文人に及ぼし、感化は、不幸にして甚だ小なりき。『小說神髓』ありて小說界の作風一變せしが如くなる能はざりき。蓋し劇界の革新は、脚本劇場俳優の革新以外、觀客の思想を一新するに非ざれば、得て望むべからず。而も當時の觀客は概ね教養なき舊世界の遺物なり。新七其水の徒、尙よく梨園作者として其の餘喘を保つは、卽ち此の惰力の恩のみ。斯くて爛熟せる舊劇、模倣陋劣の新作は、依然として活氣なき劇界を支配し、活歷流行以來、兎に角舊劇の範裡を脫せんとせし寫實史劇すら、櫻痴一たび蹉跌して、復起らずなりぬ。

此の時に方りて、日淸戰爭起り、戰爭文學の流行は所有方面を侵して演

劇界にも入りぬ。此の勢に乘じ、戰爭劇を標榜し、俄然として頭を擡げしし者を所謂壯士芝居となす。壯士芝居は二十四年西鳥越中村座に始めて政治的世話物を演せし川上音次郎一派の劇を指す。此の粗放露骨なる芝居も、二十七年『又意外』等の新作を演ずるに及びて、不思議にも江湖の喝采を博し、『戰地見聞記』以下の戰爭劇を出すや、一時舊劇の壘を摩し、眇たる貧書生の一團、都下の大劇場に據り、積年の大勢力たる歌舞伎俳優をして後に瞠若たらしむるに至り、劇評家は驚きて劇界革新の機運と稱し、之を呼ぶに新演劇を以てし、彼等を名づくるに新俳優を以てしたり。此の影響は延いて各地に及び、多數の壯士役者團の興起を見るに至れり。

此の運動は總べての點に於て藝術の域に遠きに係らず、演劇史上甚だ重要なる事件なるべし。然れども之を詳說するは本書の主旨に非ず。茲には唯脚本の方面より觀察するを以て足れりとなす。抑も劇界革新の事あるや、其の鋒先は先づ史劇に向けられ、世話物の天地は風靜なる別世界なりき。思ふに世話物に在りては、稀世の名作家默阿彌の存するありて、寫實的世話劇必しも貧少ならず。然るに、二十六年默阿彌歿して、凡庸作者獨り存し、且其の作る處、明治の假面を著けたる舊幕物に過ぎざりしかば、新時代の新世話物としての價値終に空し。新演劇の勃興は、卽ち此の虛を衝けるに外ならず。彼等の脚本は拙劣を極むれども、其水新七よりは明治の現實に近し。卽ち此の運動の功果は、曩きに史劇に施されし寫實主義を新に世話物に導きし點に存す。換言すれば、世話物に於ける活歷主義の擴充に在り。

然れども、是れ史上の價値のみ。之を脚本の側より見れば、筋の支離滅裂なる、寫實の皮相なる、學海櫻痴の作よりも甚しく、明治の世話物としての價値は全然缺けたりといふべし。顧みて劇壇の狀態を見れば、舊夢幻劇の精粹復びもて囃され、活歷物、川上物の總べてを壓倒しつゝ無前の繁榮を致し、斯壇の刷新、脚本の改良は、前途亡羊の歎なき能はざりき。或は敢て新作をものして梨園の關門を打破せんと試みし者なきに非ざりしも、時運は未だ至らず。新作家にして上場するを得る者、依然櫻痴居士に止ま

り、其れすら改作の俗劇のみ用ひられたりき。

此の時に方りて史劇論の記者逍遙は奮つて創作壇に立ち、二十七年末より、春の家主人の名を以て史劇「桐一葉」を『早稲田文學』に連載し、二十九年の初より同「牧の方」を同誌に連載し、完結するや、共に之を刊行して廣く世に問へり。蓋し是れ著者が理想となせる脚本に非ざるべきも、亦以て多年の所論の具體的發表の第一着歩と見るを得べし。

「桐一葉」は豐臣家遺托の重任を負へる片桐市正且元を主人公とする悲劇にして、且元が駿府に使して大御所の難題を受け、已むを得ず淀君關東下向の儀を承諾なし、別に苦計を胸に祕めて大阪に歸りしに、讒者の爲に關東に内通せりと稱せられ、烈しく淀殿の不興を蒙るに端を發し、奸臣の阻格偶發の錯誤の爲に、胸中の祕計遂に施すべからず、乃ち望を大阪に絶ち、居城攝州茨木へ退かんとして、曉霧の中長良堤の上に木村長門守と訣別し、後事を托して悄々と落ち行くに至りて終結す。之を本筋として、且元の一女蜻蛉が長門守に對する戀物語を織り込み、淀君が神經質的なる狂態を以て之を彩り、總べて七幕十五場に分る。其の材料は概ね正史に取りたるも、作者は素と、正史の事實が單に段幕に按排せられたる者を以て劇と見なさざるが故に、事件の進行を助け、人物の性格を描出すべき幾多の醇化を加へたりき。作者は此の悲劇の葛藤は、一時關東に屈して大御所百年の後を待たんとする且元の祕計を知らざる淀君の猜疑憤怨と、且元を退けんとする大野父子の野心と、相依り相助けて且元の苦忠を破却し去らんとする所に存すとなし、遂に且元をして退身の已むを得ざるに至らしめたり。故に其の終結は、普通の悲劇の如く悲壯の死に非ずして慘苦の生なり。事件の取捨按排は總べて此の著想より來る。作者は又、筋の統一を求むるが故に、挿話の爲に離裂する弊を避けて、一道の本流全篇を貫かしめぬ。作者は又人物に作家の影子を宿し、劇に作家の觀念を寓するを忌むが故に、個々の人物各〻特殊の性格を具へて、其の間に褒貶を挿まず、學海櫻痴の弊套を擺脱して、最も自然的なる描寫をなし、特に且元淀君に於て其の著しきを見る。作者は又俳優の爲に人物を作るの非を知るが故に、舞臺上の注意周到